

## 6 遺物

### (1) 焼物 (第7～9表、第104～112図、写真図版18～20)

#### ア 焼物の概要

1次調査A区では各遺構面から多量の遺物が出土した。その中核をなすのは焼物で、時代的には縄紋時代～近世初頭にわたるがその9割以上は中世が占める。その中から図示可能なもの317点について提示する。

#### ア) 古代以前の焼物

縄紋土器 地山面上から得た早期末～前期初頭の含繊維土器があるが、小片で風化が著しく図示し得ない。

奈良・平安時代の焼物 (1～6・46・47・75～77・78・95～104・184・188・197・220・223・268～272・284・291～293・295・305) 土師器・黒色土器・須恵器・灰釉陶器・白磁がある。地山面・5面を中心に各遺構面の造成土等から出土した。地山面または遺構に帰属するものとして住1から須恵器杯A(4)、土師器小型甕D(5)・甕B(6)、P1201から須恵器杯A(3)、旧表土から須恵器杯A(1)・杯B(2)が出土した。その他中世の造成土等から得られたものに、土師器甕B(104)・小型甕D(102・269・270)、黒色土器A杯A(46・103・197・268)、須恵器杯A(75・95・96・184・222・293)・杯B(76・97・99・220・221・272・295)・杯蓋B(188・291・292)・壺類(77・98・101・223・271)・甕類(284)、灰釉陶器碗(305)・長頸瓶(100)、白磁碗(78)がある。須恵器が多く、杯A・Bの器形・法量・焼成、加えて土師器甕Bの特徴に概ね4～7期の特徴を認め、さらに灰釉陶器碗305が7～8期に伴うケ丘1号窯式であることから、全般に8世紀後半～9世紀末にわたるものと捉えられよう。加えて基盤造成土出土の玉縁口縁の白磁碗78は大宰府IV類、12世紀代で15期に併行する。(竹原)

#### イ) 中世の焼物

中世の焼物は第8表に示すとおり、総量1,284点を数え、うち277点を図示した。先行研究に基づき既報告(5次調査報告、小笠原氏城館群井川城跡試掘・第1次・第2次報告)で行った器種・器形分類に従って器種を概観した後、遺構面毎の構成について述べる。図示遺物個々の詳細な情報は一覧表に譲る。

#### (ア) 器種・器形

##### ①土師質土器

皿 1次調査ではロクロ成形のみ出土した。本遺跡や井川城跡、林山腰遺跡では3種類の基本形態(皿A～C)と3種類の胎土(1～3群)が認められる(第105図)。皿Aは口縁部が直開するもの(13・14・16・17等多数)、皿Bは口縁部が内湾するもの(61・139・147・149等多数)、皿Cは体部が大きく開くものである(51・60・72・90・170等)。1群は胎土が粗くざらつくもので内耳鍋と同質のものを含む。2群は精良で橙色を呈するもの、3群は極めて精良で砂粒を含まず白色を呈するものである。これらの組み合わせは第8表のとおりで皿Aは胎土1・2群のみ認められ、皿Bは1群主体に各群認められる。皿Cは3群が半数を占め2群が少ない。また図版18に示すように2群と3群の胎土が重なった皿が時折みられる(51)ことから、同一工房で作分けして生産されていたことが判明した。その他、皿A・Bは見込み外周が窪み中央が盛り上がるものや体部下端に強いナデが入り立ち上がりがかびれるもの、底部との境界を丸く仕上げるものなど、仕上げ処理に個体差がある。同様に、見込みの処理においてもi:ロクロナデ後未調整のもの、ii:1方向にナデを行うもの、iii:丁寧なナデを行い平滑に仕上げるものが見られる。iは3・4面出土品に多く1・2面に少ない。またiiiは胎土3群の皿Cに顕著である。

皿の法量には口径7cm代から14cm代まで6種(I・II-1・II-2・III-1・III-2、IV)、さらに著しく深い形態(V-1～3)が認められる(第105図)。器形・時期(遺構面)との関係は、皿Cが口径の大きい皿・

IVのみ認められ、逆に皿A・BはIVを欠く。器高の大きいVは3・4面にはなく、また皿Cに口径の大きいものが認められる（V-3）。

その他、皿の特徴的なあり方として、灯明皿に用いた煤・タールの付着するものが器形・胎土の別を問わず多いことや、判読不明ながら125に施された墨書や79の見込みに残る墨痕などが挙げられる。

**大型皿** 口径17cmを上回るロクロ成形の皿である（239～241等）。底部は回転糸切りの後ヘラ削りを行い、さらに体部との境界を削り落として丸底風にするものがある。胎土は1群のみ認められるが、林山腰遺跡では3群も認められる。用途として酒盃との指摘がある（阿部来氏教示）。

**内耳鍋** 3・4面を中心とし4・5面に伴うものは極少である。器形はA：口縁部がくの字状に屈折して開くもの（166）、B：口縁部が直立または緩く内湾し内面に1～2条前後の凹凸を伴うもの（135・206・244・245・249・263・316等多数）、C：頸部の強いヨコナデにより口縁部が内湾し時に受け口状となり、内面に凹凸がないもの（216・264・304等）、D：頸部が不明瞭でほとんど屈曲せずに立ち上がるもの（確実な例無し）等がある。また、全体がバケツ型を呈し底部は砂目が顕著な平底となる。本遺跡ではBが主体的で他の形態が極少である点で林山腰遺跡と近似したあり方を示す一方で、Aを主体とする井川城跡とは対照的である。

**播鉢・片口鉢** 19・45は厚手で内耳鍋と同様、砂質の胎土のものがある。19は瓦質に近い焼成の底部片である。132は口縁部片で端部は外傾する面をつくる。

## ②瓦質土器

**播鉢** 65は端部を面取りする厚手・小形の播鉢で、粗い摺り目を施す。風炉・火鉢とは異なり胎土は粗く焼成も甘い、在地製品とみられる。土師質や瓦質を含め播鉢は少ないものの一定量が存在する。

**風炉・火鉢** 風炉は直立口縁に丸胴が取り付け付く形態が見られる（66・67・68・158）。66～68は同一個体とみられる黒色処理の精良品で、口縁部にスタンプによる殊点紋・雷紋帯と連子紋帯を施し、胴部は研磨して光沢を有する。158は赤褐色を呈する丸胴の上部破片で、頸部の突帯と透かしの一部を残す。254は火鉢の胴部下端で、突帯間に花菱紋をスタンプする。風炉・火鉢は後の調査でも毎回出土し、点数は少ないものの出現頻度は高い。

## ③妬器

在地産須恵器 播鉢がある（11・94）。11の内面は摺り目が消失する程磨耗する。

常滑 三筋壺（120・314）と甕（180・181・214・303）がある。三筋壺は12世紀後半～13世紀、甕180は口縁部形態から赤羽編年8型式・14世紀後半に位置づくものであろう。なお、後の調査では常滑系の妬器である中津川製品も出土している。

珠洲 斜行する密なタタキを施す甕がある（182）2次報告26（第112図に写真掲載）と同一個体とみられ、吉岡編年Ⅲ期・13世紀に位置づく。常滑系に比べ絶対的に少ない。

## ④東海系無釉陶器

山茶碗 10は東濃型の山茶碗で、低い高台にわずかに煎痕が見られる。第5型式・12世紀末～13世紀初頭に位置づく。

片口鉢 尾張型の口縁部片1点を図示した（21）。

## ⑤瀬戸産施釉陶器

古瀬戸 碗・皿・盤類を中心に豊富な器種が見られる。内訳は天目茶碗（29・31・43・64・91・115・116・260・273）、平碗（285・302）、緑釉小皿（157・266）、豆皿（156）、卸皿（48・93・126・196・278）、小鉢（142）、播鉢形小鉢（44）、碗形鉢（50）、播鉢（172・250・259）、折縁深皿（22・52・92・119・129・195・262・312）、直縁大皿（288・289）、根来形瓶子（63）、片口小瓶（117）、

祖母懷茶壺(183)である。これらの時期は古瀬戸後Ⅰ期～後Ⅳ期新が見られ、後の調査ではA区や他の平場から前・中期の天目茶碗・四耳壺・盤類、後期の茶入・小壺・香炉等が得られている。

帰属時期と遺構面の関係は、4面に後Ⅰ期の天目茶碗(91)、碗形鉢(50)・折縁深皿(22)、後Ⅰ～Ⅱ期の天目茶碗(64)、卸皿(48)、後Ⅱ～Ⅲ期の搦鉢形小鉢(44)、後Ⅲ期の天目茶碗(43)・折縁深皿(92)がある。他に4次調査では後Ⅳ期古の折縁深皿ないし卸目付大皿がある。3面は後期製品があるが時期細分可能なものがない。2面に後Ⅱ期の卸皿(126)、後Ⅱ～Ⅲ期の豆皿(156)、後Ⅳ期新の折縁深皿(129)・搦鉢(172)が見られる。1面には後Ⅱ期の天目茶碗(260)・折縁深皿(195)、後Ⅳ期新の緑縁小皿(266)、後Ⅳ期新の折縁深皿(262)・搦鉢(250・259)がある。

大窯 古瀬戸に比べ非常に少ない。天目茶碗(134・294)、丸皿(213)、丸碗(251・265)、搦鉢(179)がある。天目茶碗134は直立する口縁部と玉縁状の端部を有するが大窯製品にはあまり見られない胎土である。丸碗265は外面に櫛目が施される。帰属時期と遺構面との関係は、2面に2段階並行の天目茶碗(134)、1面に1～2段階の灰釉丸碗(265)、3段階以降の鉄釉の丸碗底部(251)がある。その後の調査では2面に1段階の小碗・丸碗・搦鉢を得ている(2・7次調査)。また1面に2段階の丸碗がある(2次調査)。

#### ⑥貿易陶磁

青磁 貿易陶磁の中では量的に最も多く、器種は碗のみ見られる。内訳は鎗蓮弁の上田分類B-I類(274)、鎗を失った幅広い蓮弁紋のB-II類(290)、太い丸彫の沈線で蓮弁紋を施すB-III類(171・253)、雷紋帯を伴うC-II類(143)、端反・無紋のD-II類(252・261・313)、その他(121・315)である。加えて後の調査では無紋・内湾縁の碗Eがある。これらは1・2面からの出土が多い。総じて15世紀のものを中心に13世紀代まで認められるが、遺構面の帰属時期との整合性はあまり見られない。青磁はこの他、7・9次調査地点に香炉、盤がみられる。

白磁 陶器質の胎土に白磁釉を施す森田分類D群の碗(155)と四耳壺(42)が見られる。42は2次調査で土塁盛土中から出土した胴部と同一個体の可能性がある。他に7次調査でC群の碗が出土している。全般に白磁が貿易陶磁に占める割合は小さい。

陶器 天目茶碗がある。胎土の特徴から49・118が該当し古瀬戸に含めた91・260もその可能性がある。瀬戸製品に比べ端部が鋭く作られる特徴が窺える。他次調査でも出土しており一定の割合で存在する。

A区の平場遺構から得られた貿易陶磁は他に2・7次調査に青花皿B1、3次調査に皿B2があり、いずれも1面からの出土である。また、8次調査地点からは12～13世紀の黄釉洗が出土している。

#### (イ) 遺構面出土焼物群の特徴と構成、時期

次に、遺構面毎の焼物群の特徴と構成、時期について触れる。なお、各遺構面に帰属させた遺物は遺構出土品から遺構面の基盤となる造成土出土品まで時間幅を内包しており、遺構面の時期決定を行ううえでは注意が必要となるが、遺構出土品は非常に限られ、一括性のある出土状況も稀であることから、ここでは一括して扱うこととした。また、統計的には7次調査まで行ったA区所在平場遺構全体を扱う。

地山面・5面 出土点数が28点で他の遺構面より著しく少ないため比較対象とはなりにくいが、他の遺構面と比較して組成の半数近くを土師質土器皿が占め、無釉陶器や炆器が多い傾向が窺える。無釉陶器は山茶碗や片口鉢、炆器は在地系の須恵質搦鉢である。前者は4面以降には希薄であることから遺構面の帰属時期を反映していると受け取れる。他に3次調査では古瀬戸前期様式の壺が得られている。本遺構面の時期は、縄紋時代、8世紀末～9世紀、12世紀～14世紀と幅広い。そのうえ最終末は4面の初期段階と並行する可能性もあろう。

4面 総数188点の内訳は土師質土器皿が71.3%を占め、瀬戸製品(古瀬戸)約11.7%、貿易陶磁3.7%

というあり方である。1・2面に比べ内耳鍋が著しく少ない状況が窺える。時期的な指標となる古瀬戸は後1期～後4期古(14世紀後半～15世紀中葉)まであり、時期的に重なる井川城跡では後3期段階を中心に内耳鍋A類が伴うが、本遺跡では半ば欠如し様相が異なる。土師質皿は各器形・胎土が見られるが、皿Aが主体で、さらに皿A・Bの内面に1方向のナデを施すものの比率が最も高い。瓦質土器風炉66～68はこの段階に伴うものであろう。

3面 200点の多くが石積前空間埋立て土出土品である。構成上の特徴は、土師質土器皿が70.5%、内耳鍋17%、瀬戸製品5.5%、貿易陶磁3%で、土師質土器皿、瀬戸製品、貿易陶磁に4面とほぼ同じ傾向を認めることができる。土師質土器皿は皿Aが主体である。内耳鍋はB類が主体的にみられる。古瀬戸は後1期～後4期新段階が伴う。遺構面との時期的関係を示すものは後4期新段階(15世紀後半)の古瀬戸製品であらう。

2面 449点の構成は、土師質土器皿が61.4%、内耳鍋20.9%、瀬戸製品6.4%、貿易陶磁3.8%で、3・4面と傾向を等しくする。土師質土器皿は皿B・Cが数を増す。内耳鍋は3面同様B類が主体的である。瀬戸製品は古瀬戸後2期～大窯2段階まで幅広く存在するが、遺構面の時期指標となるものは大窯1～2段階(15世紀末～16世紀中葉)のものと捉えられよう。

1面 420点の構成は、土師質土器皿が65.7%、内耳鍋22.4%、瀬戸製品5%、貿易陶磁2.9%で、これも2～4面とほぼ同じ比率である。土師質土器皿は皿A・Bを主体とするが、皿Cは少ない(1次調査では皆無)。皿に法量Vの深い形態が加わる。内耳鍋にCが加わる。瀬戸製品は古瀬戸後2期～大窯3段階が見られる。貿易陶磁は青花皿が加わる。遺構面の時期指標となるものは大窯3段階ならびに青花の皿B2群(16世紀後半)と捉えられよう。

1面を覆う黄褐色土 基本的に遺物を含まない層だが、1点のみ胎土2群の土師質土器皿を得た(267)。(竹原)

#### ウ) 近世の焼物

中世の焼物に後続する資料として排土表採資料の皿1点がある(317)。長石釉の志野丸皿で、17世紀初頭に位置付けられよう。中世の焼物は大窯3段階が皆無に等しく、4段階に至っては皆無の状況であり、遺構の状況と相まって平場での活動の連続性を示すものとは考えられないものである。(竹原)

#### エ) まとめ

殿村遺跡A区平場遺構に伴う中世の焼物の様相は、土師質土器皿の法量や整形、内耳鍋の器形、瀬戸製品や貿易陶磁の器種等に時期的変化は認められるものの、土師質土器皿が7割を占め、瀬戸製品が5～11%、貿易陶磁が3～4%という安定した構成で推移する点特徴的であり、その点で見れば平場上で繰り返された大規模な普請に関わらず、焼物を用いた諸活動に大きな変化を窺うことはできない。さらに詳細な焼物の構成を見ると茶道具が一定量を占め、そこ舶載の天目茶碗が加わる点も平場上における活動やその主体者の一端を示す事象ということができよう。

最後に焼物と遺跡の性格に関わる視点として、単位面積当たりの特定遺物の出土数について記す。1～5面まで総体的な数値だが、出土点数をA区調査面積1,683.5㎡で除した数値は、在地土師質土器0.654点/㎡、瀬戸産陶器(無釉・施釉)0.058点/㎡、貿易陶磁0.025点/㎡となる。ちなみに比較データとしてほぼ同時期の小笠原氏守護居館である井川城跡主郭を挙げると、在地土師質土器1.588点/㎡、瀬戸産陶器(無釉・施釉)0.148点/㎡、貿易陶磁0.060点/㎡であり、井川城跡が約2倍という結果が導かれる。(竹原)

## イ 中世の瓦質土器風炉について (第 104 図)

殿村遺跡の発掘調査で出土した瓦質土器の中で特に注目されるものが、瓦質土器風炉である。茶道具である風炉は喫茶がかつて行われていたことを示す遺物であり、その出土は寺院跡や城館跡にほぼ限られる。ゆえに風炉は殿村遺跡の性格を考える上で重要な資料の一つである。しかし本遺跡から出土している風炉の出土はごく少数で、出土した個数をもとにした分析は困難である。そこでここでは瓦質土器を再見し、その胎土やスタンプ紋様などの特徴に着目することで、殿村遺跡から出土した風炉についての分析を行うこととする。なお資料を再見した結果、1次調査 1A-158・3次調査 3A-22・6次調査 6A2-19の3点と、1次調査 1A-66・1次調査 1A-67・1次調査 1A-68・5次調査 5A1-39の4点が、それぞれ同一個体であることを確認した。そのため以下では便宜上、1A-158・3A1-22・6A2-19の3点を一個体として示すときにはG1、1A-66・1A-67・1A-68・5A1-39の4点を1個体として示すときにはG2と表記する。

風炉に加え火鉢、搦鉢等の器種が存在する殿村遺跡出土の瓦質土器は、その胎土によって4種に分類できる。

- 1群 細密な素地であるが砂粒も多く含む。赤褐色や暗褐色を呈し、瓦質土器というよりは土師質土器に近い。
- 2群 砂粒を多く含む。内外面ともに黒～灰褐色を呈し、断面は褐色となる。赤色粒子を含む。
- 3群 細密な素地であるが、砂粒もやや含む。内外面は暗灰褐～黒褐で、断面は灰白となる。
- 4群 精良な胎土で、砂粒を少し含む。外面は黒褐色で、断面外側は灰白色、内側は黒灰を呈す。

このうち胎土の粗い1・2群をA群、胎土の精良な3・4群をB群とする。G1、G2はそれぞれA群(1群)、B群(3群)に分類される資料である。いずれも頸部と鼓胴部を持つ風炉の頸部片で、スタンプ紋と突帯、透かし穴を持つ。両資料の破片が出土するもっとも古い出土層はともに4面基盤造成土層であることから、A群の風炉とB群の風炉とは、ともに15世紀前半ごろには使用されていたと考えられる。

瓦質風炉が複数出土している同時期の近隣遺跡での様相を見ていくと、茅野市の干沢城下町遺跡、長野市の栗田城跡では殿村遺跡同様、A群・B群それぞれの瓦質風炉が出土している。また栗田城跡出土資料の中には殿村遺跡のG1・G2のように、同じ頸部片でありながら異なる胎土・紋様構成を持つ瓦質風炉片が存在する。G1とG2が同じ時期に使用されたことも踏まえれば、当時の長野県域において、用いる瓦質風炉の胎土やその紋様へのこだわりが希薄であったことがうかがえる。

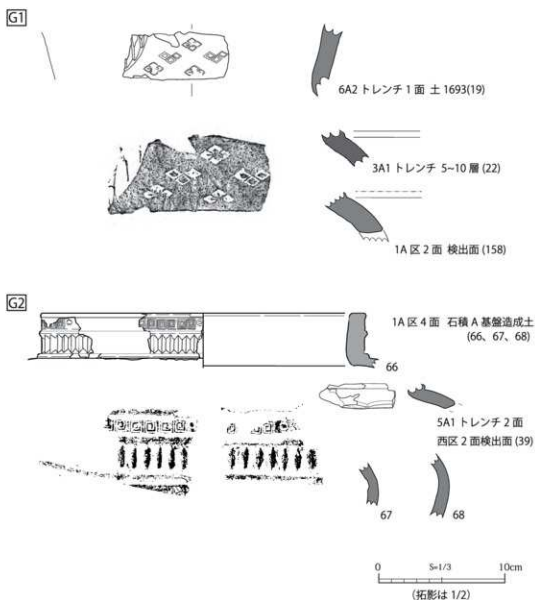
殿村遺跡から出土した土師質土器皿においても、瓦質風炉同様に胎土の異なる製品が確認されている。土師質土器皿の場合、前の項でも触れているように、異なる胎土が混ざった資料の存在によって、砂粒を含み橙色を呈するものと、精良な胎土で白色を呈するものが、共通の工人によって作り分けられていたことが明らかになっている。では殿村遺跡から出土した胎土の異なる瓦質風炉の生産主体もまた、共通していたのだろうか。複数の胎土が混じった資料を確認できていない瓦質風炉においてその生産主体を探る手掛かりとなるのは、外面に施されたスタンプである。

殿村遺跡から出土している瓦質風炉G1とG2に施されたスタンプに着目すると、B群のG2は垂直に立ち上がる頸部の外面が突線によって2段に区切られ、上段に雷紋と珠点紋、下段に連子紋が施されている。一方、A群のG1は頸部の外側にスタンプを施紋するという点では一致するものの、突線を伴わない曲線の中に連子紋が施されるほか、2種類の菱形紋が一定の間隔で施されている。G2とは使われるスタンプの種類、および配置が大きく異なっている。瓦質土器に施紋するスタンプの種類、およびスタンプによる紋様構成の違いが生産主体の違いを示しているとする指摘が、東北地域での瓦質土器を集成する過程でなされている(高桑 2009)。同じ部位におけるスタンプの構成が異なるG1とG2も、その生産主体が異なっていた可能性が

高い。であれば両資料で異なっている胎土もまた、生産主体の差異に由来すると考えることができるだろう。異なる生産主体によって作成された異なる様相をもつ瓦質風炉が、かつての殿村では同じ年代に用いられていたと理解される。(伊藤)

【参考文献】

- 高桑 登 2009 「東北の瓦質土器」『中近世土器の基礎研究』22  
 茅野市教育委員会 1993 『干沢城下町遺跡』  
 長野市教育委員会 1991 『栗田城跡 下宇木遺跡 三輪遺跡(3)』  
 松本市教育委員会 2015 『殿村遺跡 ー第5次発掘調査報告書ー』  
 水澤幸一 2009 「中世後期における瓦器の位相」『日本海流通の考古学』

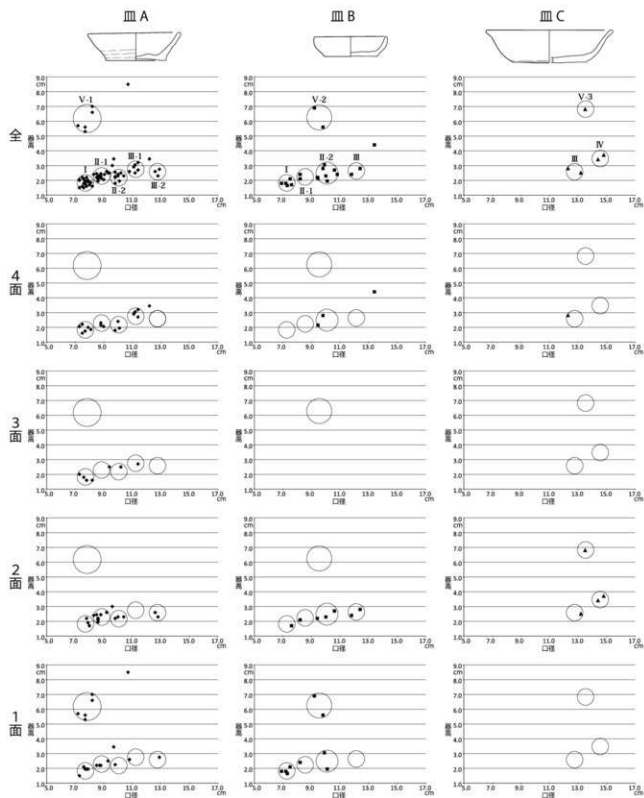


第 104 図 瓦質土器風炉集成

第7表 土師質土器皿における胎土・調整のあり方

胎土の構成 (器形別・全体)

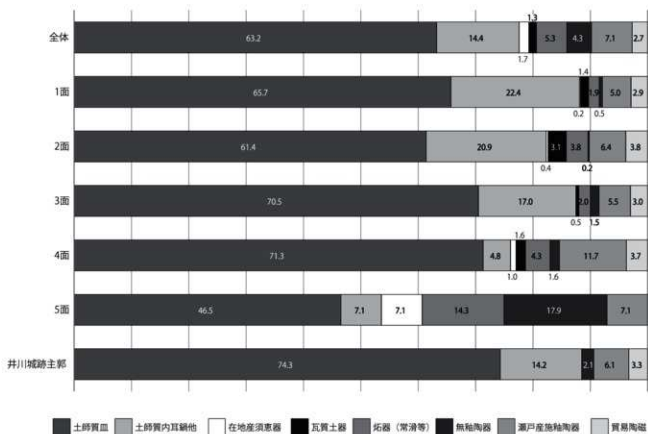
胎土	器形別胎土構成			胎土構成	見込みのナデ消し処理				
	皿 A	皿 B	皿 C		遺構面	4面	3面	2面	1面
1群	35 27%	71 55%	24 18%	130 46%	図化数	40	13	108	49
2群	35 42%	42 51%	6 7%	83 29%					
3群	0 0%	36 52%	33 48%	69 24%	割合	25%	31%	4%	2%



第105図 殿村遺跡出土土師質土器皿の法量分布

第 8 表 器種別焼物出土点数集計 (Aゾーン・1次)

器種	器形	5面		4面		3面		2面		1面		計	
		計	%	計	%	計	%	計	%	計	%	計	%
土師質土器	1群	5	17.9	42	22.3	53	26.0	87	19.4	125	29.8	312	24.3
	2群	8	28.6	76	40.4	60	30.0	70	15.8	80	19.0	294	22.9
	3群	13	46.4	16	8.5	23	11.5	66	14.7	63	15.0	168	13.1
	大型皿	1	3.6	5	2.7	4	2.0	8	1.8	5	1.2	22	1.7
	内耳皿	2	7.1	7	3.7	28	14.0	133	29.6	94	22.4	264	20.6
土師質土器	鉢・片口鉢			2	1.1	6	3.0	4	0.9			12	0.9
	鉢・片口鉢	2	7.1					2	0.4	1	0.2	7	0.5
瓦質土器	鉢			3	1.6	1	0.5	1	0.2			2	0.2
	鉢・火鉢			3	1.6			13	2.9	6	1.4	22	1.7
土器 (常滑・珠洲等)	鉢	4	14.3	8	4.3	4	2.0	17	3.8	8	1.9	41	3.2
	鉢・胎製	4	14.3	8	4.3	4	2.0	17	3.8	8	1.9	41	3.2
陶器 (瀬戸産胎製)	山茶碗	2	7.1	5	2.7	4	2.0	8	1.8	5	1.2	22	1.7
	片口鉢	3	10.7	3	1.6	3	1.5	1	0.2	1	0.2	3	0.2
陶器 (古瀬戸・大塚)	大口茶碗			5	2.7	4	2.0	8	1.8	5	1.2	22	1.7
	平碗・その他			5	2.7	1	0.5	9	2.0	6	1.4	21	1.6
	碗・皿・小鉢			9	4.8	3	1.5	3	0.7	5	1.2	21	1.6
	類	1	3.6									1	0.1
	御皿	2	7.1	22	11.1	11	5.5	29	6.2	21	5.0	71	5.5
	飯子箱	1	3.6	1	0.5	2	1.0				4	0.3	
	茶入							1				1	0.1
青磁	鉢・胎製			3	1.6	4	2.0	12	2.7	5	1.2	24	1.9
	その他			3	1.6	4	2.0	13	2.9	5	1.2	25	1.9
白磁	鉢・皿			1	0.5			3	0.7	2	0.5	6	0.5
	飯子箱			2	1.1			3	0.7	2	0.5	7	0.5
青花	鉢・胎製									3	0.7	3	0.2
	大口茶碗			1	0.5	2	1.0	1	0.2	2	0.5	6	0.5
船載陶器	大口茶碗			1	0.5	2	1.0	1	0.2	2	0.5	6	0.5
合計		28	100.0	188	100.0	200	100.0	449	99.8	420	100.0	1,284	100.0



第 106 図 殿村遺跡出土焼物構成比 (Aゾーン・1～7次集計)





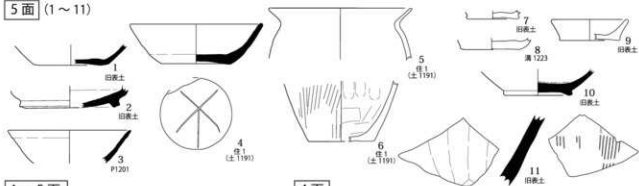






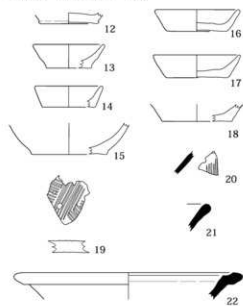


5面 (1~11)



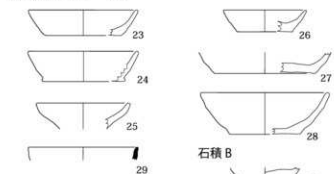
4~5面

造成土~旧表土 (12~22)

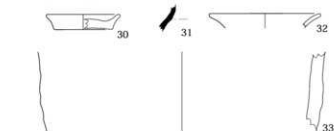


4面

烧土面 1061(23~29)



石積 A(30~33)

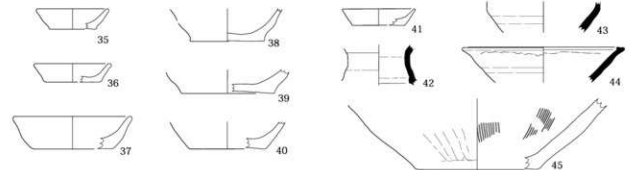


石積 B

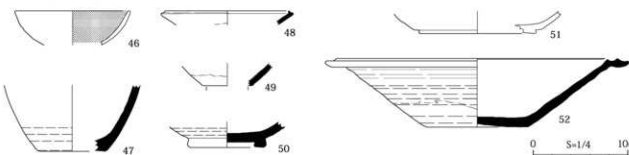
34

4面

石積 4 (35~45)



造成土 (46~52)

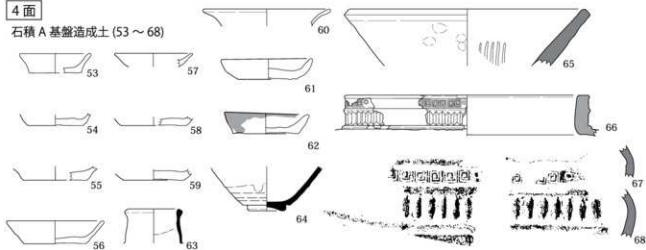


0 S=1/4 10cm

第107図 烧物 (1)

4面

石積A 基盤造成土 (53~68)



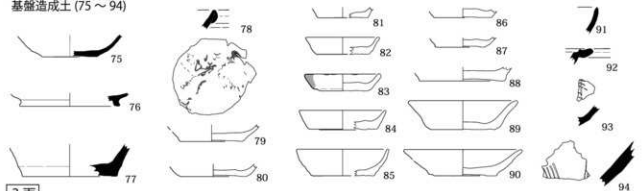
石積B 基盤造成土 (69~73)



石列8 基盤造成土

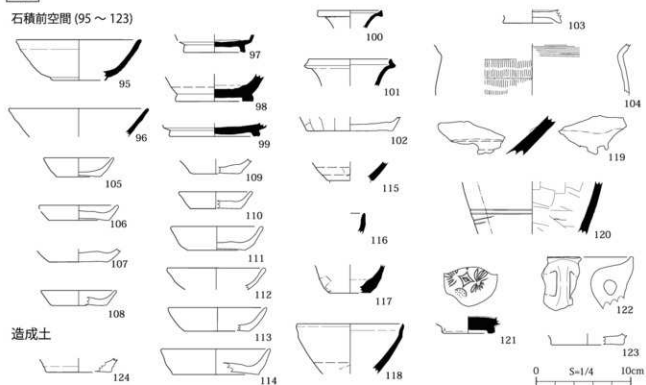


基盤造成土 (75~94)

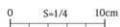


3面

石積前空間 (95~123)



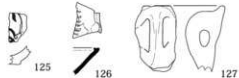
造成土



第108図 焼物 (2)

2面

礎石 1171 礎石 1166 柱列 15(P719)



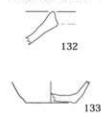
P423



P541



土坑 466 (132・133)



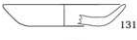
土坑 591



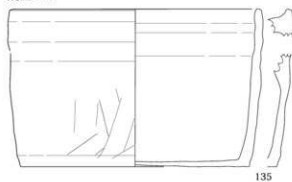
P761



P295



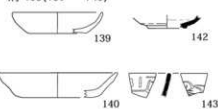
焼土 368



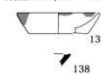
溝 344



溝 465(139~143)



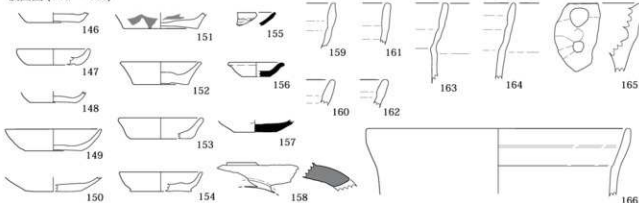
焼土 599(137・138)



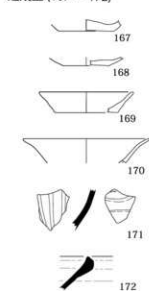
石列 9(144・145)



検出面 (146~166)

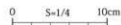
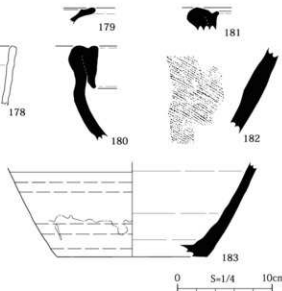
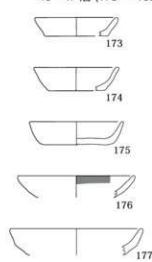


造成土 (167~172)



1面 (平場南斜面)

46・47層 (173~183)

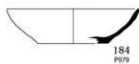


第109図 焼物 (3)



1面

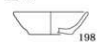
建 5 (184 ~ 186)



土 4



土 13



土 19



土 64



溝 281



溝 900



溝 181



検出面 (220 ~ 241)



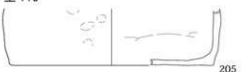
柱列 4 (P838)



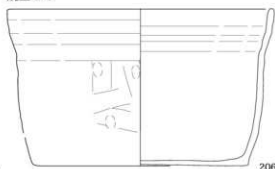
P88



土 110



焼土 273



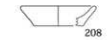
P9



P917



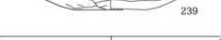
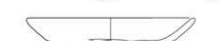
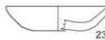
石列 1 (207 ~ 214)



石列 3 (215 ~ 216)



P137

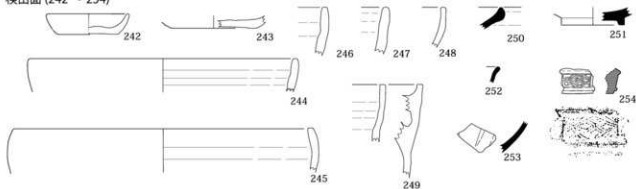


0 S=1/4 10cm

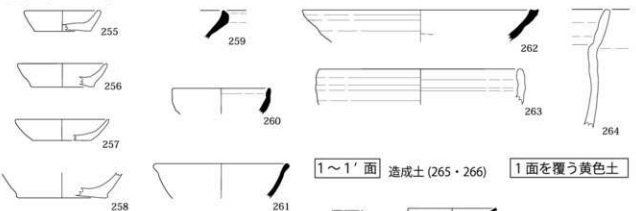
第 110 図 焼物 (4)

1面

検出面 (242~254)



造成土 (255~264)

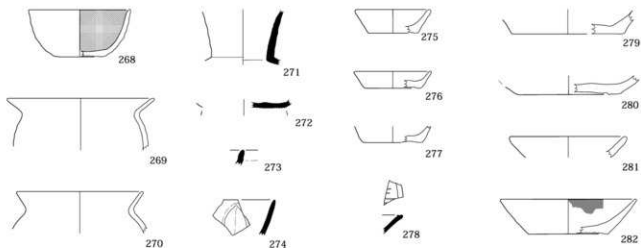


1~1'面 造成土 (265・266)

1面を覆う黄色土

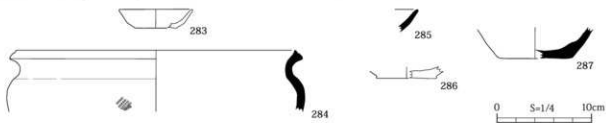
2~5面

造成土~地山 (268~282)



1~5面 造成土 (283・284)

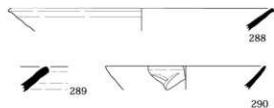
2~4面 造成土 (285~287)



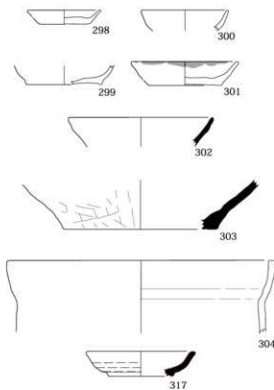
第111図 焼物 (5)

不明

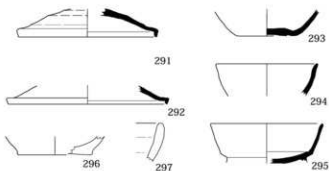
検出面 (288 ~ 290)



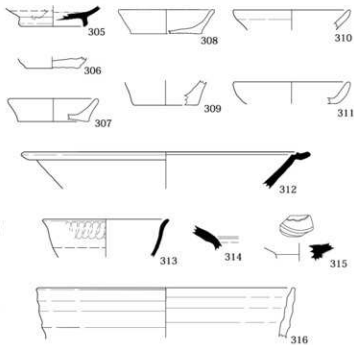
造成土 (298 ~ 304)



排土 (291 ~ 297)



その他 (305 ~ 317)



0 S=1/4 10cm

1次調査では出土しなかった貿易陶磁他



第112図 焼物 (6)

## (2) 石器・石製品 (第10表、第113～115図、写真図版22)

1次調査で出土した石器・石製品の総数は126点に及ぶ。内訳は、縄紋時代に帰属する石器90点、中世以降に帰属する石製品36点がある。このうち23点を図示して概要を述べる。それ以外のものについては、一覧表を参照されたい。

### ア 石臼 (1～8)

石臼はその形状から茶臼と粉挽き臼に分類することができる。本次調査では、11点の茶臼(1～7)と1点の粉挽き臼(8)が出土しており、そのうち8点を図示した。茶臼はいずれも被熱の痕跡が確認できる。1・2・4は、挽き木打込孔周辺に装飾が施されているものや装飾部分である。1・2は方形が3段重なり、3は菱形が3段重なるような装飾が認められる。5～7は、下臼につくりつけになっている受け皿の縁部分である。

1・2の安山岩製茶臼を除き、残りは比較的粒子の細かい閃緑岩製である。また、5は偏光顕微鏡観察を実施(付録DVD)し、四賀地区周辺には産出しない変質微閃緑岩という結果がでている。特に質の良い製品は、広域に流通することがあるため、当遺跡の茶臼も遠方から搬入された可能性が考えられる。

8は、唯一の粉挽き臼の上臼である。茶臼と違いふくみが大きくなっているのがわかる。白面は、摩耗により溝がほとんど残っておらず、回転時に生じた擦痕が観察できる。

### イ 石鉢 (9～12)

いずれも安山岩製の石鉢である。9は、底部の径が大きく、口縁にかけてほぼ垂直にたちあがる。10と11は接合関係にあり、底部から口縁部まで確認できる。内外面ともに丁寧に整形され、胴部はやや内湾する。12は、比較的小形の石鉢であり、10・11と同様に丁寧な整形が見られる。

### ウ 硯 (13～16)

本次調査では12点の硯が出土している。被熱等で割れて小破片のものが多く、全形をうかがえるものは2点のみである。13は、長軸15.04cmを測る長方硯である。被熱により、表面が部分的に薄く剥がれている。14は、13と比べてやや小ぶりの長方硯である。陸の縁部分が故意的に割られたような、連続した剥離が観察できる。16は、やや緑がかかった色の凝灰岩製で、縁部に2条の連続したふくらみで装飾されている。残存している面は丁寧に研磨が施されており、光沢がある。

### エ 砥石 (17～19)

3点図示した。17は、概要報告時に硯として扱ったが、その後の観察で、明瞭な硯の特徴を有さないと判断されたため、砥石とした。直方体に整形されたもので、残存している面には、線条痕が明瞭に残る。18は、粒子の細かい緑色片岩の自然礫を素材とした砥石で、表裏面に線条痕が認められる。19は、直方体状に整形加工されたもので、表裏面は使用により大きく内湾している。線条痕の他に、V字形の溝状研磨痕が観察される。

### オ 石鏝 (20～22)

合計で6点の石鏝が出土しており、そのうち5点がチャート製で、1点が黒曜石製と、チャートの占める割合が多い。20～22は、いずれも無茎凹基鏝である。21は、逆刺の長さが異なり、左右非対称の平面形をしている。

### カ 石錐 (23)

23は、チャート製の石錐で、平面形は棒状を呈する。

## キ まとめ

### ア) 茶臼について

1～9次の調査で出土した茶臼は合計13点あるが、そのほとんどが1次調査で出土している。さらに、1次調査のうち9点がFトレンチの整地土中(46・47層)からということが特筆される。当整地土は、炭化物や被熱した遺物が多く含まれており、火災によって廃棄された遺物が土ごと運び込まれたものと考えられる。茶臼も被熱していることから、他遺物同様に火災により廃棄されたものと考えられる。この他に、1面土877と1面検出面から1点ずつ出土している。

上記にもあるとおり、出土茶臼の多くが在地ではない閃緑岩製で、遠方からの搬入品である可能性がある。遠方からの搬入品の例として、丹波鳴滝産の砥石が数点出土しているため、茶臼の産地についても、全国的な視野で考える必要がある。

### イ) 硯について

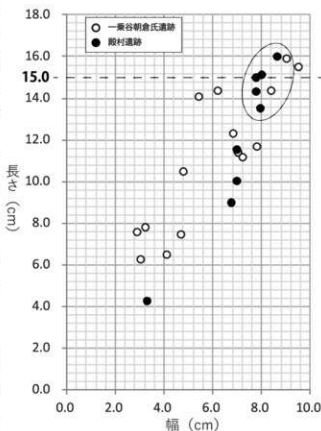
1～9次調査の合計で27点の硯が出土している。中世の一遺跡からの出土量としては、特筆すべき量の多さといえる。一般的には、硯は陶磁器等と違い、ある程度耐久性があるため、廃棄頻度が少ないなどが考えられる。殿村遺跡出土の硯を特徴として、被熱で使用不可になったものが多く見られるため、出土量の多さが火災と関連している可能性が考えられる。

出土量以外にも、サイズや装飾等にも本遺跡の特徴が表れる。出土品の中に長軸15cmを超す大型品が複数含まれていることや装飾がみられるものが極めて少ないことなどが挙げられる。大友府内町跡、吉川元春館跡、江上氏館跡など各地の中世遺跡出土の硯を見ると、10cmプラスマイナス3cmの長軸を持つものが多く、15cm超の製品は非常に限られており、一乗谷朝倉氏遺跡の町屋敷跡などからの出土が見られる程度である。第113図に殿村遺跡と一乗谷朝倉氏遺跡出土の硯の計測値(復元値も含む)をグラフ化した。殿村遺跡では、長軸15cm前後の範囲に集中していることがわかる。ただ、本遺跡でも言えることだが、全体形が把握できる状態での出土自体が少なく、計測できる個体の比率が少ないため、サイズについての評価は難しい。本遺跡で装飾が無く大きいサイズが多く用いられているという特徴は、硯が実用性に特化していたり、墨の消費量が多いことなどが想定される。

また、平面形は、形状のわかるものだけでも、すべてが長方形を呈している。また、内側の平面形については、長方形を呈するものが多くみられるが、楕円形のものも一定数認められる。側面は、傾斜しているものと垂直なものが混在している。水野氏の編年で、長方硯I Ac・III Ac・III Bcに分類できるもので、15世紀代に見られる形態である。(原田)

#### 【参考文献】

- 水野和雄 2007 「石硯」『季刊考古学 第99号』 關西山園
- 大分市教育委員会 2007 「大友府内10」大分市文化財調査報告書第72集
- 大分市教育委員会 2008 「府内城・城下町跡5」大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第78集
- 中条町教育委員会 1993～1996 「江上館跡1～IV発掘調査報告書」中条町埋蔵文化財調査報告書2・6・8・10
- 広島県教育委員会 1998 「吉川元春館跡第5次発掘調査概要」中世城館遺跡保存整備事業発掘調査報告10
- 福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 『特別史料-一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査整備事業概報』



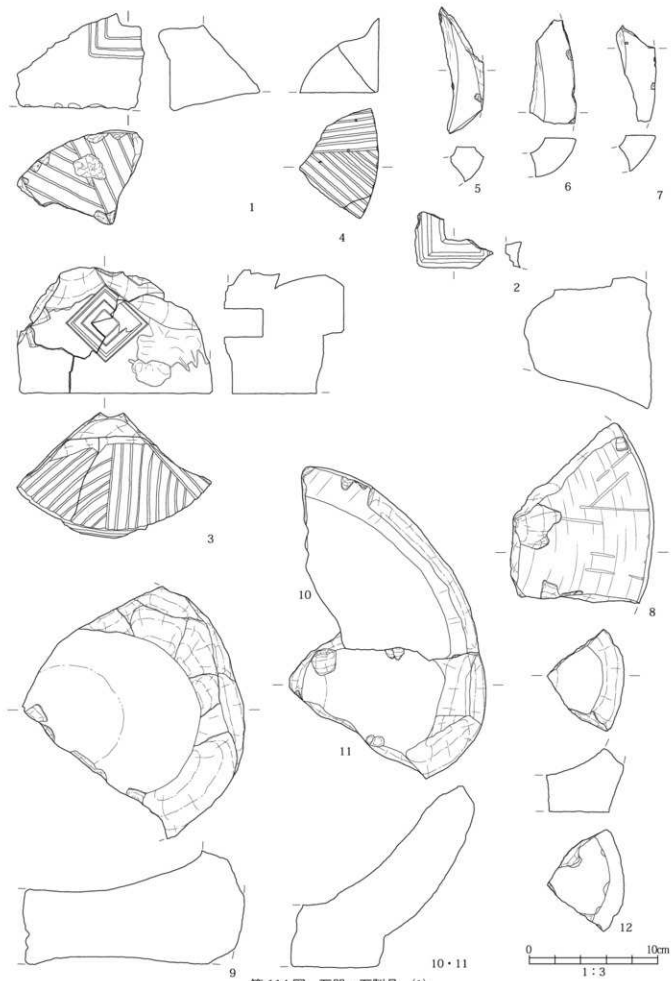
第113図 出土硯のサイズ比較グラフ



No	種 No	K	検出 面	遺構名	出土位置・ 方位・備考	器種	石材	寸法 (cm)			重量 (g)	備考
								最大長	最大幅	最大厚		
73	19	A	4	検出面	No.1	磁石	砂岩	(7.67)	(4.41)	(2.64)	(107.0)	折れ 検出面 4面
74	A	4	検出面			銅片	チャート	4.28	2.57	0.80	7.3	
75	A	5	2住	覆土(紫色土層)		銅片	チャート	2.20	2.69	0.63	3.4	
76	A	5	溝状遺構 1220	地山土		銅片	チャート	1.73	2.02	0.37	0.9	
78	A	5	沼状土	横刃形石器		貝殻	貝殻	8.97	4.47	1.27	57.9	
79	A	5	沼状土	石鏡		チャート	チャート	(2.90)	(2.53)	(0.83)	(7.1)	つまみ部のみ残
80	A	5	沼状土層	銅片		黒曜石	黒曜石	2.50	1.50	1.10	2.0	
81	A	5	沼状土層	銅片		黒曜石	黒曜石	1.29	1.91	0.63	1.2	
82	A	5	沼状土層	西部		銅片	黒曜石	2.54	1.77	0.98	2.6	
83	A	5	沼状土層	西部		銅片	黒曜石	1.31	1.01	0.33	0.4	
84	A	5	沼状土層	西部		銅片	チャート	1.69	1.89	0.61	1.8	
85	A	5	沼状土層	中部		石鏡	黒曜石	1.94	2.12	0.83	3.2	
86	A	5	沼状土層	中部		銅片	チャート	2.14	2.69	0.76	4.5	
87	A	5	沼状土層	古代惣含層		銅片	チャート	0.91	1.46	0.28	0.2	
88	A	5	沼状土層	古代惣含層		銅片	黒曜石	2.20	1.61	0.98	3.1	
89	A	5	沼状土層	古代惣含層		銅片	黒曜石	1.61	1.72	0.45	1.1	
90	A	5	沼状土層	古代惣含層		磁石	チャート	5.36	3.83	2.73	65.6	
91	A	5	地山土			磁石	砂岩	(5.11)	(5.17)	(0.83)	(23.6)	折れ
92	A	1	地山シルト層			銅片	黒曜石	1.58	1.85	0.72	1.7	
93	A	2-4	P1055			銅片	黒曜石	2.80	1.52	1.13	4.0	
94	21	A	2-4	整地土		石鏡	チャート	(2.09)	(1.25)	(4.30)	(0.8)	折れ 凹型無茎石鏡
95	A	2-4	整地土			附属	黒曜石	2.40	1.82	0.61	1.4	1検出加工
96	A	2-4	整地土			銅片	チャート	2.17	1.08	0.27	0.6	
97	12	A	2-	整地土～基盤土		石鉢	安山岩	推定径(底部)	9.0		(161.7)	折れ 底部一部残存
98	A	2-	整地土～基盤土			石鏡	黒曜石	4.17	3.23	2.07	27.3	
99	A	2-	整地土～基盤土			銅片	黒曜石	2.32	2.61	0.44	1.8	
100	A	4-5	整地層			残破的断ある銅片	黒曜石	2.34	2.14	0.53	2.1	1検出残破的断
101	22	A	4-	整地土～地山		石鏡	チャート	(2.17)	1.57	4.60		先端折れ、凹型無茎
102	A	4-	整地土～地山			残破的断ある銅片	黒曜石	3.36	2.37	0.67	3.3	2検出残破的断あり
103	23	A	4-	整地土～地山		石鏡	チャート	3.53	0.87	0.70	2.0	検出
104	A	4-	整地土～地山			二次加工ある銅片	チャート	3.41	1.87	0.91	5.1	1検出加工
105	A	4-	整地土～地山			附属	チャート	(3.29)	2.87	0.91	8.59	折れ、1検出加工
106	A	4-	整地土～地山			銅片	黒曜石	2.25	1.32	0.70	1.0	
107	A	4-	整地土～地山			銅片	柱状貝殻	2.37	2.02	0.70	2.6	
108	A	4-	中央部			磁か	貝殻	(3.80)	(3.17)	(0.40)	(6.1)	折れ
109	A	2-4	検出面			銅片	チャート	2.42	1.60	0.49	2.1	
110	16	1-2	南斜面近世層	焼土・灰層		磁	黒灰岩	(8.68)	(10.32)	(2.67)	(166.6)	折れ 研磨面1面のみ残存
111	3	1-2	南斜面中世層	炭化物混入 明葉褐色土		茶白	閃緑岩	推定径 19.6			(1580.0)	上白 折れ 4つを接合 八分十講 丸講 残き木内 込孔は三重の菱形に装飾
112	4	1-2	南斜面中世層	炭化物混入 明葉褐色土		茶白	閃緑岩	推定径 19.6			(280.6)	折れ(熱熱割れ) 八分十講 丸講
113		1-2	南斜面中世層	炭化物混入 明葉褐色土		茶白	閃緑岩	推定径 19.2			(163.6)	折れ(熱熱割れ) 八分十講 丸講
114		1-2	南斜面中世層	炭化物混入 明葉褐色土		茶白	安山岩	推定径 20.4			(71.5)	折れ(熱熱割れ) 熱熱 白面磨滅面 八分十講一講か
115	5	1-2	南斜面中世層	炭化物混入 明葉褐色土		茶白	変質閃緑岩	推定径 38.0			(71.4)	折れ(熱熱割れ) 下白受け面の縁部
116		1-2	南斜面中世層	炭化物混入 明葉褐色土		茶白	閃緑岩	-			(7.6)	折れ(熱熱割れ) 下白受け面の縁部
117	6	1-2	南斜面中世層	炭化物混入 明葉褐色土		茶白	閃緑岩	推定径 37.5			(96.3)	折れ(熱熱割れ) 下白受け面の縁部
118	7	1-2	南斜面中世層	炭化物混入 明葉褐色土		茶白	閃緑岩	推定径 37.5			(47.5)	折れ(熱熱割れ) 下白受け面の縁部
119		1-2	南斜面中世層	炭化物混入 明葉褐色土		茶白	閃緑岩	-			(33.8)	折れ(熱熱割れ) 下白受け面
120		1-2	南斜面中世層	炭化物混入 明葉褐色土		銅片	チャート	2.44	3.40	0.87	6.4	
121		1-2	南斜面中世層	炭化物混入 明葉褐色土		銅片	チャート	2.09	1.46	0.31	0.7	
122	A		東壁面			磁か	貝殻	(3.20)	(2.93)	(0.57)	(5.4)	折れ 研磨面2面残存
123	A		西壁面			銅片	チャート	3.42	2.48	1.05	9.2	
124	A		35			磁か	貝殻	(5.17)	(2.96)	(0.61)	(10.9)	折れ 研磨面3面残存
125	A		排土			打製石斧	貝殻	7.91	6.11	1.59	120.4	平面形定状
127	A		排土			石鏡	黒曜石	(3.18)	(1.48)	(0.43)	(1.8)	両面割折れ 凹型無茎石鏡
128	A		排土			挾入石器	黒曜石	2.50	1.64	0.70	1.9	
129	A		排土			銅片	黒曜石	1.42	2.79	0.53	1.7	
130	A		排土			石鏡	黒曜石	2.52	1.48	1.27	5.1	
131	A		不明			磁石か	貝殻	(3.22)	(2.08)	(0.70)	(7.1)	折れ 熱熱 磁か磁石の破片か 2個体に割れ
132	A		不明			石鉢	安山岩	推定径 19.0			(344.5)	折れ 熱熱 工部部
133	A		不明			打製石斧	貝殻	(7.83)	(5.18)	(1.66)	(93.2)	折れ

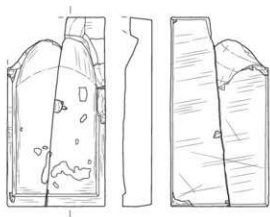
※ ( ) 内数値は残存率を表す。

※ 1200g未満は0.1g単位、1200g以上は1g単位

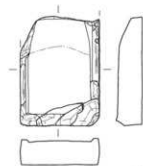


第114図 石器・石製品 (1)





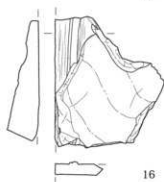
13



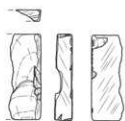
14



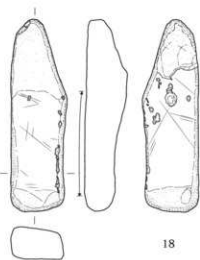
15



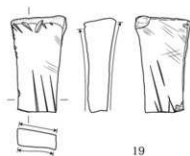
16



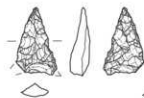
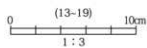
17



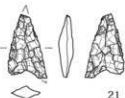
18



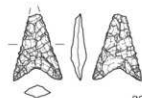
19



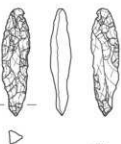
20



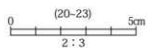
21



22



23



第115図 石器・石製品 (2)

### (3) 木製品 (第11表、第116～121図、写真図版21)

#### ア 概要

石積前空間の下層堆積層(3面段階)および基盤整地土層(4面段階)より木質遺物として取り上げ、木製品整理カードを作成したものは2,343点に及ぶ。その内329点の実測を行い、概報(松本市教育委員会2011)に掲載したものを含め、76点について報告を行う。

齋串(1) 上端に側面削りを施し台形状となる。下の剣先部の加工は側面を左右交互に削ったため若干蛇行した形状になる。平安時代以前の齋串は上端が圭頭状になる例が多いが、その他の成形技法は共通しており、古代の祭祀具である齋串の系譜を引くものと考えられる。

齋串状木製品(2～39) 概報では串状木製品・箸状木製品としたが、詳細な観察の結果箸としては構造的に認められず、伴出遺物には箸に関わる食器類(かわらけ・折敷など)が皆無に近い。また近年同様の木製品を齋串としての役割をもつとする類例(注1)があること、また形を伴うことから祭祀具と判断し、齋串状木製品と統一した(松本市教育委員会2014)。

完形品を中心に報告するが、欠損したものも含めると1,082点にも及び、1次調査で出土した木製品の約46.2%を占める。これまでの調査でも製作技法は大きく2種類に分けられる。Ⅰ群(2～22)は削り出しによって作成されたもので、素材の外周を削り出すことにより形をととのえられる。そのため、位置によって異なるが断面が基本的に丸に近いものである。Ⅱ群(23～39)は割り裂きによって作成されたもので、細い板材または角材の両端もしくは一端を細く削り尖らせたものである。先端の形状は丸く加工したものの、切り落とし、あるいは切り折りのものがある。

齋串状木製品のほとんどは箸とよく似た形状をするが、木口や胴部に切り込みを持つものがある。9は側面下方に1か所薄く、切り込みが入られる。26は上木口を切り込んで上端をV字に開き、胴中央にも切り込みが1か所入れられている。31は薄く割り裂いて作られているが、さらに上木口に板目に切り込みが入られた痕跡がある。18と38は上木口と側面から切り込み、上木口を段状に加工してある。34は上部の面に3.3cmの切り込みを入れ、細長い孔が開けられている。39は両側面に小さい切り込みが複数か所あり、塔婆のような形状をしている。これらの切り込みはⅠ群・Ⅱ群の両方に見られ、製品の成形加工による差異はないようである。またそれぞれに長いもの(Ⅰ群1～15、Ⅱ群23～32)と短いもの(Ⅰ群18～22、Ⅱ群37～39)の2タイプがある。

本報告にあわせて長野県佐久市地家遺跡出土の箸状木製品と、静岡県三島市御殿川流域遺跡群出土の箸状木製品を実見させていただいた。地家遺跡は中世の寺院跡で、遺跡一帯は寛平五年(893)に開創され天正十年(1582)に兵火で焼失した旧長命寺跡という伝承が残る。調査では礎石建物跡、墓跡、遺跡内を流れる川跡が確認され、活動の中心は14世紀とのことである。御殿川流域遺跡群は三島市の中心部を南流する御殿川右岸に広がり、御殿川の中近世の流路跡が確認されている。箸状木製品は総点数6980点出土し、形状により6種類に分類可能な5976点について詳しく報告されている。対して殿村遺跡は15世紀に活動のピークがあり、時期的には両遺跡の間に位置するものとする。いずれの遺跡も中世の水辺の祭祀に関わると考えられ、殿村遺跡の齋串状木製品を考えるうえで重要な資料である。その結果、製作技法(殿村遺跡でのⅠ群・Ⅱ群)や形、端部の加工は同様の特徴を有することが分かった。また、2遺跡出土の完形の箸状木製品に比べ、殿村遺跡の齋串状木製品は大型であるという印象を得た。遺跡の時代差もあるが、製作方法は共通しているため、地域による特徴と見ることもできるのではないかと。ただ、御殿川流域遺跡群の実見資料は出土遺物全てではないこと、保存処理が施されていたことを申し添えておく。報告書によれば長さ270mm以上の製品も少数出土している。

形代(40・41) 2点とも刃を作り出しており、刀形木製品と考えられる。4次調査(松本市教育委員会

2014)では馬形木製品、5次調査(松本市教育委員会2015)では鳥形木製品が出土しており、古代からの伝統的な祭祀具である形代と言えるだろう。40の形はゆるやかに弧を描き篋にも似た形をしているが、刃部は鋭利である。41は先端まで鋭利に作られ、より刀に似た形状をしている。

短冊状板(42~50) 小型の板であるが、形状は木簡学会の型式分類中011型が主である。木口は切り折りあるいは切り落としによって成形されている。木表あるいは木裏は刀子等で削り調整を行ったもの(42、46)、調整法は不明であるが滑らかな面のもの(43、44、48~50)、割りっぱなし未調整のもの(47)がある。まさに木簡状木製品と称しても良い木製品である。42は全体の厚さが均一で見事な加工といえる。43は下部先端を斜めに切り落としとしてある。44は上端を隅切りにし、下端は丸みを持たせながらも尖らせてある。穿孔のあるものもあり、46には縦に並んで2か所ある。49は2隅切り落としにされ、中央に1か所穿孔がある。製品としては斎串状木製品に次いで出土量が多く、欠損したものを含め105点確認される。

木札(51~52) 短冊状板の内、赤外線照射により確実に墨書が確認できたものが2点ある。2点ともに確実な読みは不明である。ただ51の上の字は「浄」に似た文字である。上部は緩やかではあるが主頭状に加工されており、あるいは斎串に墨書したものと推定される。推定のとおりとすると呪符の可能性もある。

漆器(53~54) 53は椀、54は盃である。両方とも内面に赤漆、外面に重ね塗りして黒漆を施している。この技法は14世紀以降にみられるものとされている(注2)。53は外面に円に囲まれた文様が赤漆で描かれており、4単位あったと推察される。欠損が著しいため図柄は不明であるが、残存している部分は水鳥の下半身のようにも思われる。54は内面に黒漆で文様が描かれていた痕跡が残る。

狭匕(55) 江戸時代の『和漢三才図会』の中の「厨房具」に掲載されている、樽の味噌をこそぎすくう道具としての「狭匕(せかひ)」と形状が良く似ている。松本城三の丸跡小柳町に近世の出土事例がある。

篋(56) 1点のみ出土している。先端に向かって薄く鋭く加工されている。

円板(57) 小型の円板である。側面は斜めに切り落とされている。古代の遺跡で出土するものは側面に木釘孔があるものがほとんどで、曲物の底板と判断できるが、中・近世のものはそれが少ない。タガが使用されたことにもよると思うが、57のような小品は容器の蓋とも考えられる。

下駄(58~60) 3点とも台が楕円形の差歯下駄である。歯の差し込み孔は前後各1か所で、60のみ後歯が残る。歯の下部が開き、草戸千軒町遺跡の出土下駄ではB-1-a類に該当するものである。いずれも指頭圧痕が残り、長期間使用された後に破棄されたものだとわかる。台が厚く、後ろの鼻緒孔が台の内側に向かって斜めに穿たれているのが特徴である。

楔(61) 小型の楔である。頭部に敲打痕がある。先端が表裏両面から削られている。

鍬(62) 中間の材は上木口から下方に向かって細い溝があり、本体とは異なる部品を組み合わせて作られた可能性もある。

板(63~64) 63は厚い板で、一端に貫通孔がある。両面に多数の切傷があり、片面は被熱している。64は長50cmを超える薄い板である。表面は平らに調整されるが、裏面と側面は割り放し未調整である。

部材(65~69) 5点図化した。いずれも貫通孔が見られ、広い意味を持つ言葉になるが、部品を何らかの方法で接合して作り上げた製品の一部分と捉えられる。65は正面から裏面に2か所、側面に1か所穿孔があり、平面削りで隅が1か所丸く加工されている。67は長さが不明であるが、2つ1セットでの穿孔が複数ある。セットになる孔の間には溝が彫られていることから、板の皮等で側板と結節されていたものと推定される。側面から裏面にむかって斜めに貫通する2孔には溝はない。66にも67と同様の溝つきの穿孔がみられるが2孔の間隔が67と異なるため別の製品の部材と考えられる。69は厚手の板である。一方の木口が弧を描くようにシャープに加工されている。この弧の部分が他の部材との接合面となったものか。

端材(70~73) 端材とは加工されて素材となった木材や製品の一部分を削ったり、切ったりすること

によって発生するものである。特徴的なことは素材であるため表面がきれいであること、手斧の外に鋸で切断されたものも目立つことである。削屑が木材加工に関わるものとするれば、端材は製品加工に大きくかわるものと考えられる。端材も出土量が多く、木製品カードを作成したもので288点ある。70・71・73は荒い加工の残り、あたかも成形途中で切断されたと推測できる。72は面取り加工が施され、丁寧な仕上げが窺える。

棒 (74～76) 棒状に加工されたものは58点出土している。74は芯持材を、75は柁目取りの材を丸棒に、76は角棒に加工されている。74は側面全周に明瞭な加工痕があり、丁寧に成形されている。長さはさまざまだが端材と同じく木口を鋸挽きされている。

削屑 削屑とは木製品の素材となる木材を製作する際、あるいは素材から製品を製作する際に発生するものである。手斧や鑿などで削り落されたもので、製品ではない。しかし殿村遺跡では明らかな削屑として取り上げて来たものが583点と全体の約24%を占め、齋串状木製品に次いで多く出土している。特に細かい精緻な削屑というより、大きな粗いものが目立ち、中には樹皮がついたものもある。原木からの加工も含め木材加工が行われていた可能性が高い(宮島義和1999)。(廣田)

### イ 各形態の構成

以上が1次調査で出土した木製品の概要だがこれらの構成は、祭祀に関わると考えられる齋串・齋串状木製品・短冊状板・木札・形代が計1,197点で全体の51%に上り、次いで端材・部材・板・棒等の加工部材が976点確認され、全体の42%を占める。食膳具と農具を含める生活に関するものは36点で全体のわずか1%程度にとどまり、この遺跡の特異性が如実に表れている。(廣田)

### 【註】

- 1 例えば畑 大介氏は祭祀具としての串状木製品の集成を行っている。「中世前期の村落祭祀と串状の木製品」『鎌倉時代の考古学』高志書院2006年。
- 2 水澤幸一氏の御教示による。

### 【参考文献】

- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1993 『御殿川流域遺跡群1』  
水澤幸一 2009 『日本海流通の考古学—中世武士団の消費生活—』高志書院  
松本市教育委員会 2011 『長野県松本市 殿村遺跡第1次発掘調査概報』  
松本市教育委員会 2014 『長野県松本市 殿村遺跡第4次発掘調査報告書』  
松本市教育委員会 2015 『長野県松本市 殿村遺跡第5次発掘調査報告書』  
宮島義和 1999 「第5章第7節古代の木質遺物」『更埴条里・屋代遺跡群—古代1編—本文』長野県埋蔵文化財センター

### ウ まとめ

最後に1次調査以外の出土品も含め、殿村遺跡の木製品の様相をまとめる。

構成と内容 第116図に示したように、殿村遺跡の木製品は大きく製品と屑(宮島義和1999)に分けられ、1次調査では祭祀具とわずかな用具が半分以上を占め、再生不可能な木質遺物である加工部材(屑)が40%以上となる状況が窺えた。

祭祀具の内訳はいわゆる齋串群でわずかに形代を含む。短冊状板は木簡学会においては「木簡状木製品」と呼ばれているが、殿村遺跡のものは実用品とは言えず、祭祀具の範疇に入れたほうが無難であると考えられる。

加工部材(屑)は2種類に分けられる。すでに加工済みの製品から切り出された端材と製品に加工する過程で削り出された削屑である。

材 第3節で報告する2次～5次調査出土品を対象に実施した樹種同定では、祭祀具を中心とした製品はサワラ・ヒノキにほぼ特定されることが判明している。これは明らかに樹種を選択した結果と判断できる。特に齋串や木簡は古代からサワラ・ヒノキが主であり、特に都ではヒノキが選択されてきた。地方ではヒノキの割合が少なく圧倒的にサワラであることが多い。殿村遺跡の場合は古代と異なりヒノキの割合が高いことが特徴的である。

端材・削屑は、齋串群の製作も含めて考えればサワラ・ヒノキが多いのは当然であるが、これらになると樹種が非常に多様になってくる。丸木芯持材も大きな材本体から削られたものと推定され、実に多くの樹種の材で作られた製品、または加工する素材が入ってきていたことを示す。多様な木材加工および製品利用あるいはその搬出・搬入が殿村遺跡では行われていた恰好の資料となる。

出土遺構 A区の石積前空間が主な出土遺構である。祭祀具・部材(屑)ともにここからの出土が圧倒的に多い。すなわちここは当時の捨て場である。ただ木製品に限って言えば、祭祀具・加工部材(屑)にほぼ限られている。中世で特有な折敷・曲物といった生活用品が全くと言っていいほど見られない。このことから石積前空間は祭祀終了後の祭祀具、解体終了後の端材、加工終了後の削屑という再利用できないもの捨て場であったと推定される。

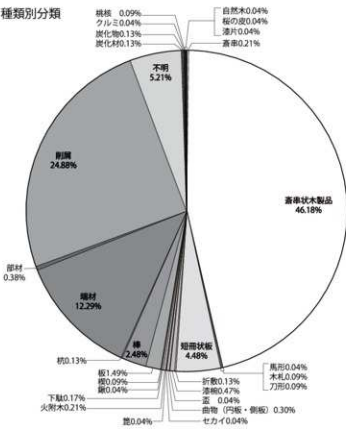
なお、A区でもKトレンチ等の基盤造成土からは、椀・下駄・狭ヒ・鎌といった実用的木製品が出土しており、石積前空間とは異なった様相を見せる。

4次調査4A1トレンチの石積遺構1528(便所遺構)からも祭祀具が主に出土しており、この時期では珍しいデフォルメされた馬形木製品がある。短冊状板のひとつには墨書が確認できる。その反面加工部材(屑)は確認できない事から廃棄の目的が異なっている。おそらくこの特殊な施設に対しある種の呪い(キヨメ)などの行為が行われた結果ではないかと推定される。

木器群の性格 当初「箸」と捉えていた串状の木製品を伴出遺物や他遺跡の同様の製品に対する所見から、「齋串状木製品」として祭祀具の範疇でとらえたことにより、遺跡の性格を考える上でのひとつの目安となったと言えるだろう。一般的な集落遺跡などで出土する木器は多種多様で、不用のものを廃棄した結果によるものであるが、殿村遺跡の木器群は遺棄されるべきものであったといえるだろう。祭祀具は祭祀が終わると再利用はされないのが通常であり、祭祀の場に残されるべきものでなかった。呪いを受けなにかを背負ったものは焼却されず水場に捨てられたのである。それもまた祭祀行為の一部であったともいえるだろう。

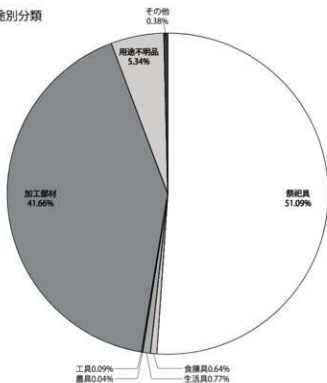
さらに加工部材(屑)も廃棄されるべきものであった。祭祀行為とは異なるかもしれないが、不用なもの、再利用されないものという点では一致している。祭祀が繰り返して行われる場、木材加工が頻繁に行われる場として平場が存在した時期があったことを示す性格のある木器群といえる。(宮島)

種類別分類



分類	器種	点数	割合(%)
祭祀具	香炉	5	0.21
祭祀具	普通状木製品	1082	46.18
祭祀具	彫板	1	0.04
祭祀具	刀形	2	0.09
祭祀具	木札	2	0.09
祭祀具	短冊状板	105	4.48
食器具	折敷	3	0.13
食器具	漆桶	11	0.47
食器具	漆	1	0.04
生活具	曲物 (円板・楕板)	7	0.30
生活具	櫛	1	0.04
生活具	セカイ	1	0.04
生活具	火附木	5	0.21
生活具	下駄	4	0.17
農具	鋸	1	0.04
工具	櫛	2	0.09
加工部材	板	35	1.49
加工部材	漆	58	2.48
加工部材	杭	3	0.13
加工部材	端材	288	12.29
加工部材	部材	9	0.38
加工部材	彫刻	583	24.88
用途不明品	不明	122	5.21
用途不明品	炭化材	3	0.13
その他	炭化物	3	0.13
その他	くすみ	1	0.04
その他	横板	2	0.09
その他	自然木	1	0.04
その他	桜の皮	1	0.04
その他	漆片	1	0.04
合計		2343	

用途別分類



分類	点数	割合(%)
祭祀具	1197	51.09
食器具	15	0.64
生活具	18	0.77
農具	1	0.04
工具	2	0.09
加工部材	976	41.66
用途不明品	125	5.34
その他	9	0.38

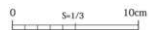
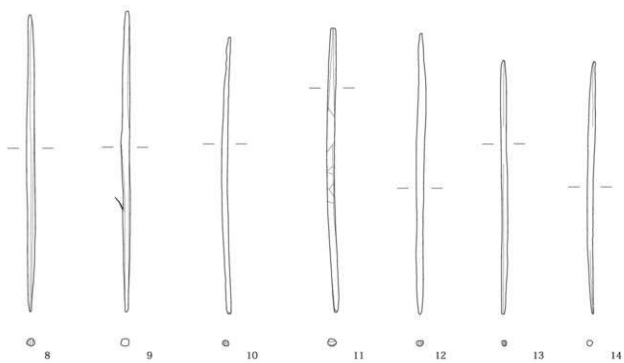
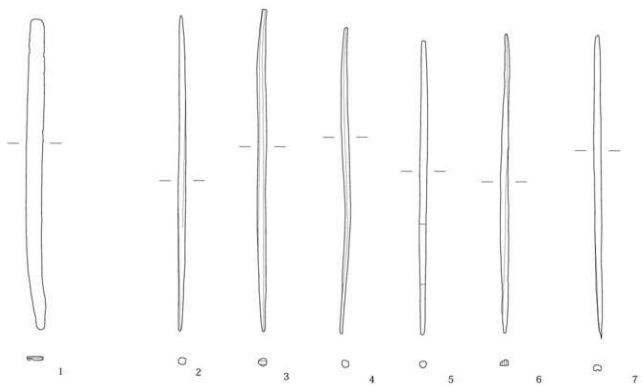
第 116 図 木製品の種類別・用途別構成

第11表 木製品一覧

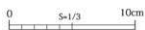
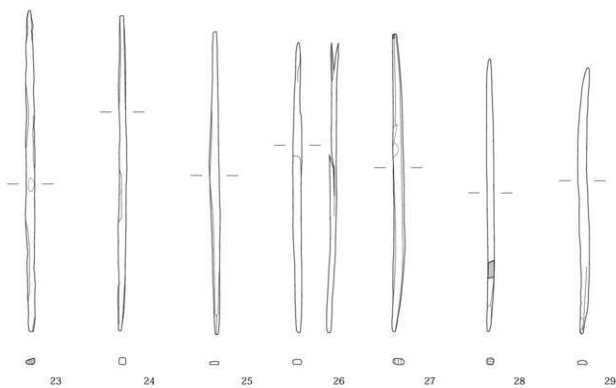
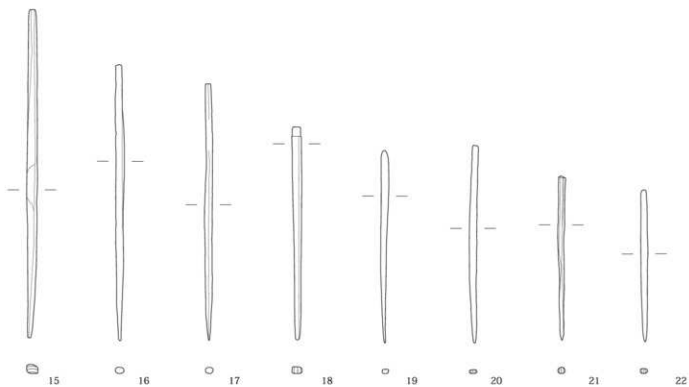
No.	整理番号	地区	トレンチ	輸出面	遺構名	出土位置・単位・備考	手法	器種	長さ・径	幅	厚・高	備考
1	TA029	A	A	3	右横溝空間	東部埋立	版材(板)	漆器	24.60	1.40	0.30	天井は切り落とし後に磨削 上端から両側面に0.5～1cmの切り込み重なり 磨削：サワラ
2	右横A130	A	A	4	右横A	基礎土	埴材(板)	埴球本製品	24.95	0.60	0.50	
3	右横B166	A	A	4	右横B	基礎土	埴材(板)	埴球本製品	25.50	0.71	0.61	両端揃くなるタイプ 加工痕あり 湾曲あり
4	TA202	A	A	3	右横前空間	東部石積B 3段階埋立	埴材(板)	埴球本製品	24.30	0.53	0.60	加工痕あり
5	TA207	A	A	3	右横前空間	東部石積B 3段階埋立	埴材(板)	埴球本製品	23.30	0.60	0.60	下方に小さな切り込み
6	TA582	A	A	3	右横前空間	東部埋立	埴材(板)	埴球本製品	23.70	0.60	0.50	
7	TA156	A	A	3	右横前空間	東部埋立	埴材(板)	埴球本製品	24.10	0.60	0.50	一端削利に削られる
8	TK③066	A	K-1	4	基礎土		埴材(板)	埴球本製品	23.50	0.65	0.70	加工痕あり 両端揃くなるタイプ ほぼ定形
9	右横B168	A	A	4	右横B	基礎土	埴材(板)	埴球本製品	23.90	0.60	0.60	加工痕あり 上下共に揃くなる
10	右横A005	A	A	4	右横A	基礎土	埴材(板)	埴球本製品	22.60	0.60	0.60	一端削利に削り、もう一端は磨削に成形
11	右横A163	A	A	4	右横B	基礎土	埴材(板)	埴球本製品	22.60	0.60	0.60	加工痕あり
12	TA842	A	A	3	右横前空間	埋立	埴材(板)	埴球本製品	22.30	0.70	0.42	片面は丁寧に成形、片面削り削がし
13	右横A076	A	A	4	右横A	基礎土	埴材(板)	埴球本製品	20.10	0.50	0.50	
14	TA021	A	A	3~4	右横前空間	埋立土～基礎土	埴材(板)	埴球本製品	20.00	0.55	0.47	
15	右横B045	A	A	4	右横B	基礎土	埴材(板)	埴球本製品	21.80	0.70	0.50	
16	右横B020	A	S E 4	4	右横B	基礎土	埴材(板)	埴球本製品	20.40	0.60	0.60	加工痕あり
17	TA009	A	A	3~4	右横前空間	埋立土～基礎土	埴材(板)	埴球本製品	16.90	0.90	0.50	磨削：サワラ
18	TA197	A	A	3	右横前空間	東部石積B 3段階埋立	埴材(板)	埴球本製品	15.30	0.60	0.45	上木1側面削り 上を丸く加工、裏面少し磨削
19	右横A117	A	A	4	右横A	基礎土	埴材(板)	埴球本製品	15.70	0.60	0.30	
20	TA455	A	A	3	右横前空間	東部埋立	埴材(板)	埴球本製品	13.10	0.50	0.50	加工痕あり 下方削利
21	右横A127	A	A	4	右横A	基礎土	埴材(板)	埴球本製品	12.10	0.50	0.40	
22	右横A236	A	A	4	右横A	基礎土	埴材(板)	埴球本製品	25.70	0.73	0.39	各面は調整され、工具痕顕著
23	TA012	A	A	3~4	右横前空間	埋立土～基礎土	埴材(板)	埴球本製品	25.00	0.60	0.50	
24	TA201	A	A	3	右横前空間	東部石積B 3段階埋立	埴材(板)	埴球本製品	24.00	0.75	0.25	上の木1側に3cm程の切り込み 上の方に1か所切り込みあり
25	TA208	A	A	3	右横前空間	東部石積B 3段階埋立	埴材(板)	埴球本製品	23.00	0.80	0.40	
26	右横B121	A	A	4	右横B	基礎土	埴材(板)	埴球本製品	23.60	0.90	0.50	本端に加工痕あり
27	TA794	A	A	3	右横前空間	東部石積B 3段階埋立	埴材(板)	埴球本製品	21.60	0.60	0.50	加工痕あり
28	TA203	A	A	3	右横前空間	東部石積B 3段階埋立	埴材(板)	埴球本製品	21.20	0.70	0.30	
29	TA148	A	A	3	右横前空間	東部埋立	埴材(板)	埴球本製品	23.40	0.65	0.50	上部切り折り 片面調整
30	TA151	A	A	3	右横前空間	東部埋立	埴材(板)	埴球本製品	21.60	0.70	0.30	両端そろ 磨削：サワラ
31	TA151	A	A	3	右横前空間	東部埋立	埴材(板)	埴球本製品	22.50	0.90	0.70	一面は平らに調整
32	TA878	A	A	3	右横前空間	東部石積B 2段階埋立 (177・178 層)	埴材(板)	埴球本製品	18.60	0.60	0.40	上方木1径千欠痕あり
33	TA204	A	A	3	右横前空間	東部石積B 3段階埋立	埴材(板)	埴球本製品	18.40	0.60	0.50	加工痕あり 先端に孔あり
34	TA157	A	A	3	右横前空間	東部埋立	埴材(板)	埴球本製品	16.50	0.60	0.46	裏面削り削がし、表のみ加工
35	TA569	A	A	3	右横前空間	東部埋立	埴材(板)	埴球本製品	14.90	0.56	0.45	上端は平らに削り落とす 下方端く加工、上面2/3は削り削がしで下方に削がって削っている
36	TA611	A	A	3	右横前空間	埋立	埴材(板)	埴球本製品	13.75	0.60	0.35	
37	右横A137	A	A	4	右横A	基礎土	埴材(板)	埴球本製品	11.00	0.70	0.46	上下に切り込みあり 下方は斜めに切っている
38	TA568	A	A	3	右横前空間	東部埋立	埴材(板)	埴球本製品	10.80	0.70	0.30	両木端に斜の切り込み
39	TA143	A	A	3	右横前空間	東部埋立	埴材(板)	埴球本製品	19.90	1.60	0.50	
40	TA036	A	A	3~4	右横前空間	埋立土～基礎土	版材(板)	刀形	19.90	1.60	0.50	
41	右横B061	A	A	4	右横B	基礎土	版材(板)	刀形	19.10	1.20	0.20	磨削：針葉樹

西名	整理番号	地区	トレンチ	輸出面	遺構名	出土位置・部位・備考	手法	器種	長さ	径	幅	厚・高	備考
42	TA022	A	A	3	石積前空間	東部埋立土	板材(板目)	短冊長板	23.60	3.30	0.50		一端切落と。 副溝：サワラ
43	TA024	A	A	3	石積前空間	東部石積B 3段階埋立土(142層)	板材(板目)	短冊長板	(19.90)	(3.20)	0.40		上端切落と。 副溝：サワラ
44	TA025	A	A	3	石積前空間	東部石積B 3段階埋立土(142層)	板材(板目)	短冊長板	17.30	(2.20)	0.50		上端切落と。 下端加工あり 副溝：サワラ
45	TR 002	A	B	4	南部基壇土	東部埋立土	板材(板目)	短冊長板	16.80	3.00	0.50		鉄分付着 上端は切り落と
46	TA023	A	A	3	石積前空間	東部埋立土	板材(板目)	短冊長板	14.30	3.40	0.60		両端切落と。 2か所孔あり 副溝：サワラ
47	TA583	A	A	3~4	石積前空間	東部石積B 3段階埋立土	板材(板目)	短冊長板	14.55	3.45	0.40		表裏磨り割し 鉄分付着
48	TA034	A	A	3~4	石積前空間	埋立土→基壇土	板材(板目)	短冊長板	(9.50)	(2.10)	0.20		上下切り落と。 副溝：ヒノキ
49	TA026	A	A	3	石積前空間	東部埋立土	板材(板目)	短冊長板	8.70	1.70	0.20		上端に孔 上面磨り割し 両木口切落と。 副溝：アスナロ
50	TA032	A	A	3	石積前空間	埋立土	板材(板目)	短冊長板	(8.90)	(1.90)	0.30		上端切り折。 副溝：サワラ
51	TA045	A	A	3	石積前空間	東部埋立土	板材(板目)	木札	(9.70)	1.60	0.20		墨書跡不可 副溝：サワラ
52	TA046	A	A	3~4	石積前空間	埋立土→基壇土	板材(板目)	木札	(9.40)	(2.50)	0.30		墨書跡不可 鉄分付着 副溝：ヒノキ
53	TK③001	A	K-3	4	基壇土								内面赤漆 裏面黒漆 高付台は赤漆の上に黒漆をか 副溝：ブナ属
54	TA006	A	A	3	石積前空間	東部埋立土	漆	底 5.20					内面赤漆に黒文様 外面黒漆 副溝：ブナ属
55	TR 001	A	B	4	基壇土		漆	底 5.20	17.70	3.30	0.65		一端切落。 加工痕あり 副溝：サワラ
56	TA002	A	A	3	石積前空間	東部埋立土	漆	底 5.20	21.20	1.50	0.80		両面を斜めに面取り加工 副溝：サワラ
57	TA003	A	A	3	石積前空間	埋立土→基壇土	円板		22.80	10.00	2.90		差面下駄 差面の貫通孔2か所 鉄分付着 指頭付風あり 副溝：キハダ
58	TK③001	A	K-1	4	基壇土下階		下駄		21.90	10.10	3.00		差面下駄 差面の貫通孔2か所 若干の指頭付風あり 副溝：キ
59	TK③002	A	K-3	4	基壇土		下駄		22.30	10.00	3.20		差面下駄 差面の貫通孔は2か所 指頭付風あり 副溝：台・トネリコ風、後編・サクラ
60	TK③001	A	K-4	4	基壇土		下駄		22.30	10.00	高 7.40		差面下駄 差面の貫通孔は2か所 指頭付風あり 副溝：台・トネリコ風、後編・サクラ
61	TA043	A	A	3	石積前空間	東部石積B 2段階埋立土	筒		9.90	2.85	1.20		頭部にたまたき痕あり
62	石積B120	A	A	4	基壇土	東部下階	筒		19.70	9.00	3.40		筒内の下部は埋定位置 副溝：コナラ風コナラ準風コナラ節
63	TA011	A	A	3	石積前空間	埋立土→基壇土	板	(29.40)	5.60	1.50			上端切落と。 上方に小さな孔 片面に張り上げ 切り傷痕あり
64	TA803	A	A	3	石積前空間	東部埋立土	板		51.70	4.40	0.50		片方の木口切落と。 片方の木口は若干欠損し 片面磨り割し
65	TA007	A	A	3~4	石積前空間	埋立土→基壇土(204層)	筒		25.60	2.40	1.50		貫通孔正面2か所、側面1か所 貫通孔らしき加工痕1か所 副溝：サワラ
66	TA586	A	A	3	石積前空間	東部埋立土	筒		28.35	1.46	0.70		一端欠損 孔6か所うち2か所欠損
67	TA004	A	A	3	石積前空間	東部埋立土	筒	(22.50)	1.80	1.20			貫通孔あり 副溝：サワラ
68	TA008	A	A	3~4	石積前空間	埋立土→基壇土	筒		14.00	2.10	1.10		貫通孔1か所 副溝：サワラ
69	TA144	A	A	3	石積前空間	東部埋立土	筒	(11.40)	3.40	1.00			副溝：ヒノキ
70	TK③003	A	K-1	4	基壇土		筒		7.70	6.25	2.30		上端切り落と。 下端に工具痕 裏面磨り割し
71	TR 013	A	A	3	石積前空間	埋立土	筒		4.50	6.06	4.62		片方の木口磨れ、反側の木口は削り、全体に加工痕あり
72	TR 012	A	A	3	石積前空間	埋立土	筒		1.68	5.40	1.64		木口磨れ、表面に片割れあり 断面長方形
73	TR 089	A	A	4	基壇土		筒		4.34	4.43	3.51		片割れあり 鉄分付着
74	TA459	A	A	3	石積前空間	埋立土	棒		5.07	1.14	1.09		上下端切断痕あり
75	石積B161	A	A	4	石積B	基壇土	丸材(逆板目)		長 3.77 径 1.15				円柱状 片方の木口は磨れ
76	石積A334	A	A	4	石積A	基壇土	棒		20.02	1.00	0.86		片方の木口は磨の様なもので切断

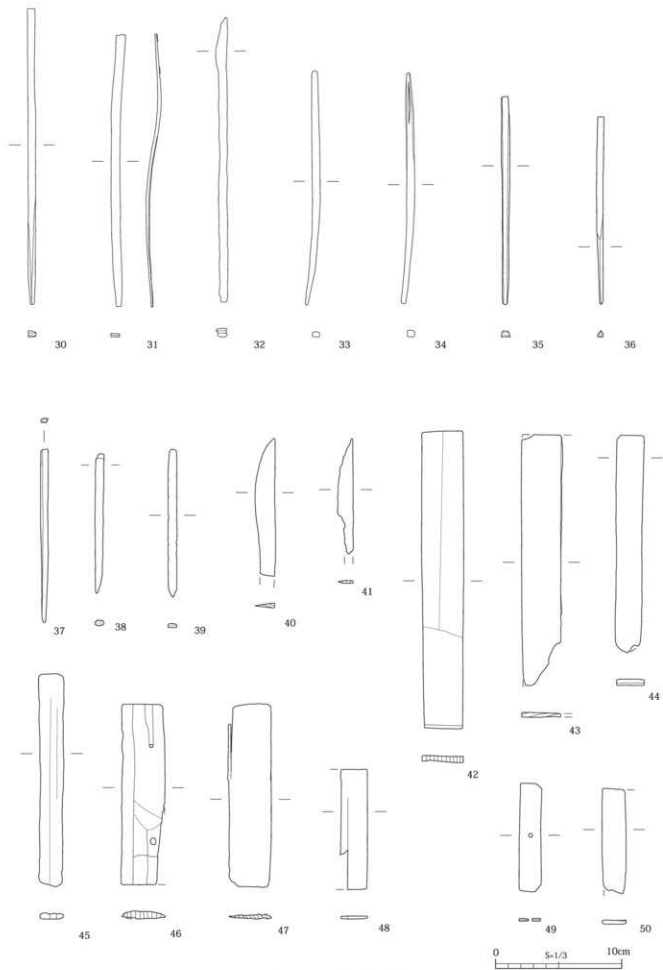




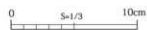
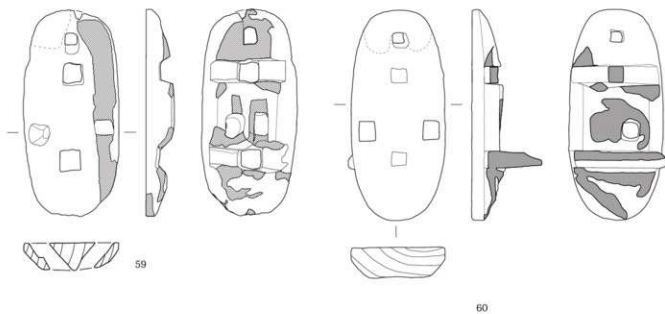
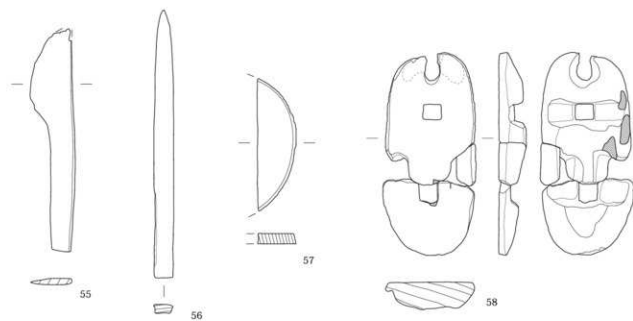
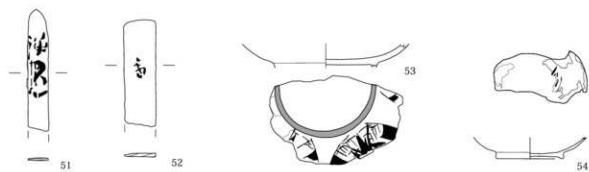
第 117 図 木製品 (1)



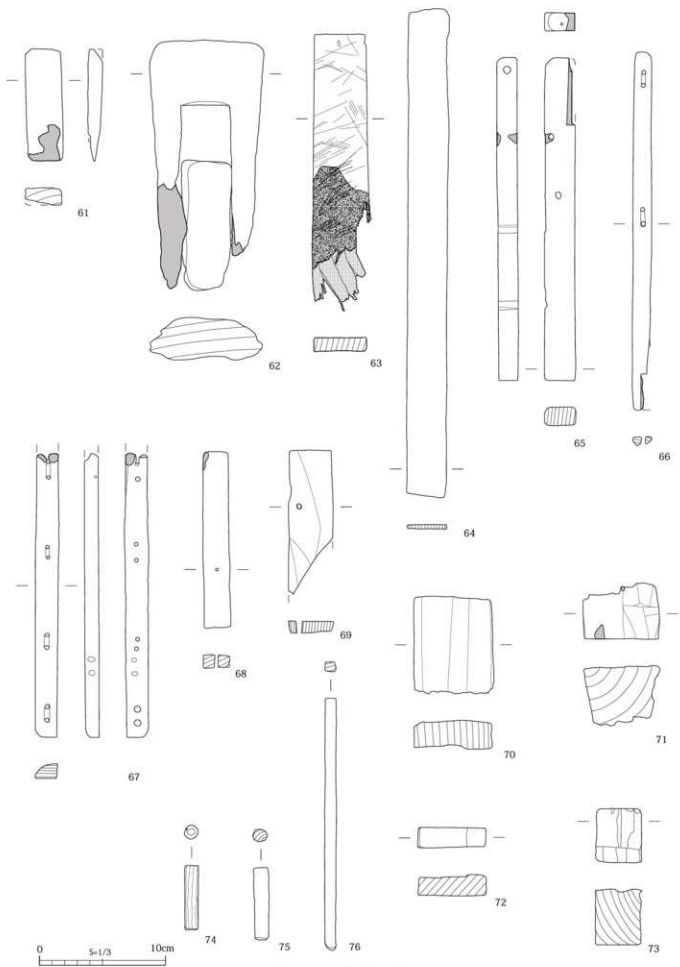
第118図 木製品 (2)



第119図 木製品 (3)



第 120 図 木製品 (4)



第121図 木製品 (5)

#### (4) 金属製品 (第 123 図、写真図版 22)

95 点が出土している。内訳は鉄釘 23 点、鉄滓 3 点、刀子 1 点、簪 1 点、銅銭 61 点、不明 6 点(鉄製品 3 点、銅製品 3 点)で、そのうち 33 点を図示した。傾向として地鎮等の行為により意図的に埋納された銅銭を除き、他の遺物に比して非常に出点数が少ない傾向が窺え、とりわけ焼物とは対照的である。

1～7 は鉄製の角釘である。1・2 は錆膨れがほとんどない良品で、中世によく見られる巻頭である。長さは 1 が 9.2 cm、2 が 6.7 cm である。3 は側面にねじれが見られ、頭部を欠損している。残存長は 6.7 cm である。4 も頭部を欠損し、残存長は 5.1 cm を測る。5 は方形の頭部で残存長 3.4 cm、6・7 は頭部が折れる形態で、残存長は 6 が 3.5 cm、7 が 4.4 cm を測る。8 は細長い銅製品で刀子のように片側縁が刃部状を呈するもので、簪と思われる。残存長 14.4 cm を測る。9 は 1 mm ほどの厚さの薄板状、10 は  $\phi 3$  mm の目釘穴を有する青銅製品で、いずれも全形は不明である。容器の破片の可能性も考えられる。銅銭は北宋を中心に唐～明代のものがある。このうち、4 面段階低位平面面の基盤整地土中からは永業通宝(初鑄 1408 年)が出土した。4 面の年代を考える上で基準資料となる。(栗田)

#### (5) 鍛冶関係資料 (第 123 図、写真図版 22)

羽口 6 点、増場 1 点が出土し、羽口 2 点と増場を図示した。1 は漏斗形を呈する羽口である。孔径 1.5 cm、器面はナデ調整を行い、先端部にくすんだ赤銅色の滓が厚く付着する。2 は先端部のみ残存し、先端部に滓が付着する。大きさや調整の特徴から 1 と同形のものと考えられる。3 は碗形の増場で、厚い器面の外面にナデ・ユビオサエ痕が残る。口唇部から内面にかけて赤銅色の滓が付着する。なお、2・3 は低位平面面の基盤整地土から接近して出土している。しかし、金属滓や鍛冶遺構は見当たらず、他所から整地土とともにもたらされたものと考えられる。(栗田)

#### (6) ガラス製品 (第 122・123 図、写真図版 22)

石列 1 の掘り方からおはじき状ガラス製品が出土した。直径 1.4 cm・厚さ 0.46 cm、重さ 1.8 g を測る良質なガラスで、気泡や不純物はほとんど見られない。透明度が高く鮮やかな青色を呈する。両面に工具によるものと見られる線状の圧痕がある。遺構からの出土状況と一乗谷朝倉氏遺跡出土の類似資料(福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 2014『戦国時代の金とガラス』pp73 所収のおはじき状ガラス製品に外観上酷似、成分は未分析)に鑑み、1 面段階に帰属する中世のガラス製品と推定して、奈良文化財研究所田村朋美氏に分析を依頼し指導を受けた。

一般に日本中世のガラスは類例が少ないが、10 世紀に中国からもたらされ 12 世紀以降国産化が進んだカリ鉛ガラスが近世まで認められるようである。分析の結果、本資料はカリ鉛ガラスではなく、ソーダ石灰ガラスであることが判明した。ソーダ石灰ガラスは原料に植物または鉱物が用いられるが、前者は不純物が混じるため  $\text{Na}_2\text{O}$  (ナトリウム) を含み、 $\text{MgO}$  (酸化マグネシウム) と  $\text{K}_2\text{O}$  (酸化カリウム) の Wt% が 1.5～2% 以上と高くなる。一方後者の鉱物の場合はソーダ以外の不純物が出ないか、出ても低い数値とされる。本資料は  $\text{K}_2\text{O}$  がやや多いものの  $\text{MgO}$  が少ないため鉱物を原料としたソーダ石灰ガラスであり、また  $\text{ZnK}$  (亜鉛) を多く含むことから判断して、近・現代のガラス製品の可能性が高い(第 120 図)。

よって 1 次調査概報において 1 面段階帰属とした所見は訂正を迫られることになった。出土地点付近は昭和 29 年のグラウンド造成以前の旧表土(耕作土)に覆われるが、その層厚は 20～30 cm 程度とわずかなため、局所的に遺構深度まで達した根掘乱等により偶然遺構面に紛れ込んだ可能性も捨てきれない。しかし、中世のガラスについては事例が少ないうえ、類例とみたら一乗谷例も科学分析が行われていないので、今後の検討材料として資料と分析結果についてここに提示をした。(栗田)

(7) 骨製品 (第 123 図)

4 面段階の低位平表面の基盤土内から 2 点、石積 A に伴う基盤土内から 1 点、骨類が出土した。いずれも種の判明するものはない。5 は中型種と思われる骨片である。末端に 3mm の孔が 2 孔穿たれるが貫通はしない。2 つの孔は逆方向に斜めに穿たれ、道具として加工されたと考えられる。6 は小型種で、解体時のものと思われる加工痕(切痕)が見られる。図示していない中型種の脛骨と思しき 1 点にも加工痕(切痕・打割痕)が見られた。(栗田)

(8) 自然遺物 (第 123 図)

低位平表面の基盤整地土や石積前空間の堆積土から自然遺物が出土した。その大半は古環境復元を目的に採取した土壌試料からのもので、花粉、種子、珪藻、植物珪酸体等の植物遺体を中心であるが、ここでは遺物として調査時に取り上げた大型の動植物遺体について報告する。

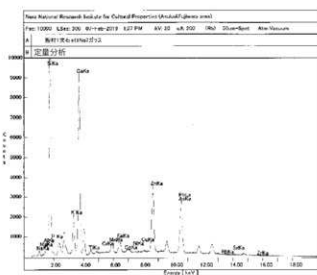
動物遺体には貝、骨類がある。骨類は前項に記載したとおりである。貝類は 3 点が出土し、うち 2 点を写真で示した。いずれも殻の特徴から日本近海に生息し、食用や染色に使用されるアカニシ貝と同定される

第 12 表 金属製品・鍛冶関係資料他一覧

図No	地区	位置	面	遺構	種別	器形
1	IA	中	4	基盤造成上	鉄製品	釘
2	IA		3	石積前空間	鉄製品	釘
3	IA	北西裾	4	石列 4 裏込土	鉄製品	釘
4	IA	西	4	石列 8 裏込土	鉄製品	釘
5	IA	東	1	礎石 283 掘り方	鉄製品	釘
6	IA	西	1	石列 3	鉄製品	釘
7	IA		不明	平場造成上	銅製品	不明
8	IA	西	1	検出面	銅製品	不明
9	IA	東	1	検出面	銅製品	板状製品
10	IA	東	2	柱列 15 (P722)	銅製品	不明
11	IA	B	4	平場造成上	銅製品	関元通宝
12	IA	東	1	礎石 283 掘り方	銅製品	淳化元宝
13	IA	東	1	P872	銅製品	咸平元宝
14	IA	東	1	礎石 283 掘り方	銅製品	景德元宝
15	IA	東	1	礎石 283 掘り方	銅製品	符符元宝
16	IA	東	1	P872	銅製品	天禧通宝
17	IA	東	1	P872	銅製品	大聖元宝
18	IA	西	1	T 235	銅製品	景祐元宝
19	IA	東	1	P872	銅製品	皇太通宝
20	IA		3	石積前空間	銅製品	至和通宝
21	IA	西	4	基盤造成上	銅製品	治平元宝
22	IA	東裾	1	礎上 824	銅製品	嘉祐通宝
23	IA	東	1	P872	銅製品	治平通宝
24	IA	東	1	礎石 283 掘り方	銅製品	熙寧元宝
25	IA	東・Q	4~5	平場造成上~地山	銅製品	元豊通宝
26	IA	東	1	礎石 283 掘り方	銅製品	元祐通宝
27	IA	東	2	平場造成上	銅製品	紹聖元宝
28	IA	西	4	石列 4 裏込土	銅製品	聖宗元宝
29	IA	東・K3	4	基盤造成上	銅製品	大観通宝
30	IA	東	1	P872	銅製品	政和通宝
31	IA	東	1	P872	銅製品	淳熙元宝
32	IA	東	1	平場造成上	銅製品	拱武通宝
33	IA	東・K1	4	平場造成上	銅製品	永樂通宝

鍛冶関係資料・ガラス製品・骨製品・自然遺物

図No	地区	位置	面	遺構	種別	器形
1	IA	東	3	石積前空間埋立上	鍛冶関係	羽口
2	IA	東・K1	4	基盤造成上	鍛冶関係	羽口
3	IA	東・K3	4	基盤造成上	鍛冶関係	増嶋
4	IA	東	1	石列 1 覆上	ガラス製品	おはじき状
5	IA	東・K4	4	基盤造成上	骨製品	不明
6	IA	東・K1	4	基盤造成上	骨製品	不明
7	IA	東・K4	4	基盤造成上	自然遺物	アカニシ貝
8	IA	東・K2	4	基盤造成上	自然遺物	アカニシ貝

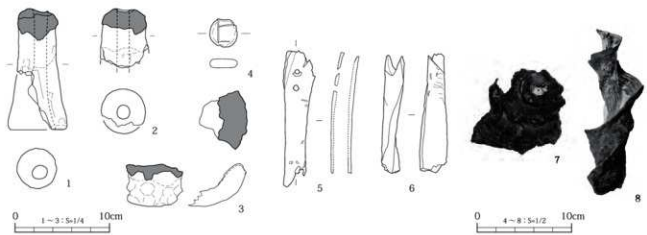
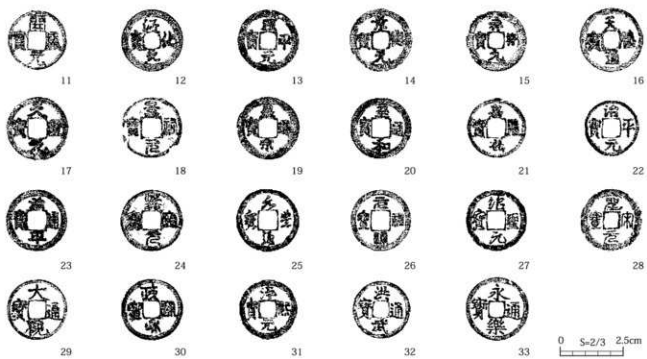
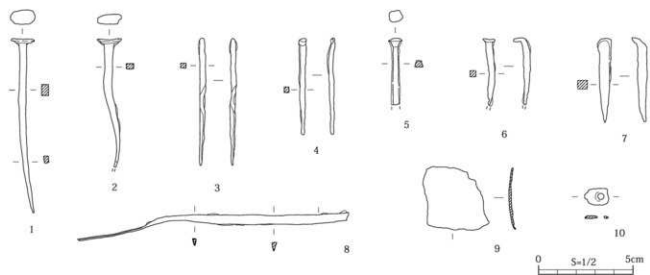


蛍光X線分析結果(スタンダード補正IP法による定量)

Wt%	Na2O	MgO	Al2O3	SiO2	P2O5	K2O	CaO	TiO2	Cr2O3	MnO	Fe2O3	CoO	Ni2O3	CuO	ZnO	As2O3	PbO	Ba2O	SrO	ZrO2	その他
Point1	13.0	0.8	2.7	68.0	0.2	1.8	7.2	0.09	0.02	0.19	0.22	0.03	0.01	0.03	1.70	0.22	3.02	0.03	0.06	0.10	Ba検出
Point2	12.8	0.8	2.7	69.2	0.2	1.8	7.2	0.09	0.02	0.19	0.22	0.03	0.01	0.02	1.28	0.22	2.88	0.03	0.05	0.18	Ba検出
Point3	12.6	0.7	2.7	68.2	0.2	1.8	7.2	0.09	0.02	0.20	0.24	0.03	0.01	0.03	1.35	0.25	3.11	0.03	0.05	0.14	Ba検出
Point4	12.8	0.9	2.7	69.4	0.2	1.8	7.1	0.09	0.02	0.19	0.22	0.03	0.01	0.02	1.32	0.25	2.91	0.02	0.05	0.12	Ba検出
Point5	13.0	0.8	2.7	68.8	0.2	1.8	7.3	0.09	0.02	0.20	0.23	0.03	0.01	0.02	1.33	0.23	3.09	0.03	0.08	0.18	Ba検出
Point6	13.4	0.8	2.8	68.9	0.2	1.8	7.2	0.09	0.02	0.20	0.22	0.03	0.01	0.03	1.27	0.24	2.82	0.03	0.05	0.10	Ba検出
Point7	12.2	0.8	2.8	68.5	0.2	1.8	7.1	0.09	0.03	0.20	0.23	0.03	0.01	0.03	1.34	0.24	3.10	0.03	0.07	0.18	Ba検出
Point8	12.4	0.7	2.8	69.5	0.2	1.8	7.2	0.10	0.03	0.19	0.23	0.03	0.01	0.03	1.23	0.23	2.93	0.03	0.06	0.19	Ba検出
Point9	12.5	0.8	2.7	69.3	0.2	1.8	7.2	0.09	0.02	0.20	0.23	0.03	0.01	0.02	1.33	0.25	3.07	0.03	0.05	0.19	Ba検出
Point10	12.4	0.8	2.8	69.3	0.2	1.8	7.3	0.09	0.02	0.20	0.23	0.03	0.01	0.03	1.34	0.27	2.93	0.03	0.05	0.11	Ba検出
平均	12.7	0.8	2.7	69.2	0.2	1.8	7.2	0.09	0.02	0.20	0.23	0.03	0.01	0.02	1.32	0.24	2.98	0.03	0.05	0.15	

検体名	検体No	測定日時	測定時間	測定場所	測定装置	測定条件	測定結果	測定エラー
AK20	19.61	2.546	1.83	4.91	2.27	0.07		
AK21	208.58	86.893	22.21	5.21	3.26	0.19		
AK22	3.12	0.167	0.03	0.46	3.76	0.03		
AK23	66.14	1.744	1.18	0.77	5.54	0.03		
AK24	226.68	7.350	8.13	3.33	4.65	0.03		
AK25	8.61	0.405	0.26	1.86	1.14	0.06		
AK26	2.10	0.605	0.40	10.51	10.90	0.03		
AK27	27.03	0.198	0.17	1.56	12.19	0.03		
AK28	36.28	0.328	0.29	1.79	13.64	0.03		
AK29	6.28	0.605	0.42	5.49	14.92	0.03		
AK30	1.08	0.405	0.40	30.45	15.90	0.03		
AK31	3.84	0.923	0.62	9.99	18.21	0.03		
AK32	862.59	1.527	1.02	4.44	18.22	0.03		
AK33	37.95	6.521	0.67	1.28	15.25	0.03		
AK34	399.01	3.123	0.82	5.62	14.47	0.02		
AK35	0.45	0.605	0.01	10.49	11.47	0.03		
AK36	1.46	0.605	0.03	17.44	9.39	0.03		
AK37	0.95	0.937	0.02	22.12	13.15	0.03		

第 122 図 ガラス製品分析結果



第 123 図 金属製品、鍛冶関係資料、ガラス製品、骨製品、自然資料



が保存状態が悪い。7は螺旋上部の外殻を残し、拳状に発達した肩部に列状の瘤が見られる。遺存する殻頂から第一螺層までは6cmを測る。8は螺旋が残り、殻の最下端（水管溝）から8.5cmである。

大型の植物遺体は低位平場面の基盤土内から出土したクルミ、モモの核がある。また、石積前空間下層堆積土からはイネの頭が多出し、ヤナギ属やクリ等の自然木も相当数出土した。一方、低位面平場の基盤整地土に多量に含まれる炭化材にはクマシデ属、ブナ属、コナラ属、サクラ属、カエデ属等が見られた。これらを含め、外部委託した微細遺物採取では47分類群に及ぶ木本植物、草本植物遺体（稲実・葉・枝条・胚乳）が得られている（外部機関による分析結果は付録DVDに収録）。（栗田）

## 7 調査のまとめ

本項では、調査のまとめとして各項で述べた遺構や遺物の所見を踏まえ、1次調査地点の考察をすべきところであるが、本書のもう一つの目的である1～9次調査の総括にあたりA区の考察が遺跡全体の解釈に直結するため、章を改めて第5章で遺跡全体の視点も絡めながら平場の変遷や性格の変化等を中心に考察することとした。

そこで、まとめに代えて前項までの中では詳述できなかったA区及び調査区内で設定したもの以外のトレンチの調査状況についてもう少し詳しく記しておきたい（第11・12図、写真図版17）。

C・Dトレンチ 旧会田中グラウンドの北部に設定したトレンチで、昭和28年のグラウンド造成に係る削平地に当たるため、岩井堂沢の堆積物である輝石安山岩礫を多含する茶褐色シルト層を検出して終了した。

Eトレンチ 旧会田中プールに沿って南北に設定した2カ所のトレンチである。北トレンチは北半がC・Dトレンチと同じ状況で岩井堂沢堆積層が露出していたが、途中で急傾斜の法面となって南半が大きく落ち込み、南トレンチにかけてグラウンド造成土が厚く覆っていた。その下は造成前の耕作土層が広く覆い、さらに中世以前の10～30cm厚の旧表土層が広がっていた。それを取り除くと輝石安山岩礫を多含した地山層が現れ、旧表土から掘り込まれるピット等の遺構を伴う平坦面を検出した。特記事項として地山法面直下に溝状の落ち込みが存在していた。

Gトレンチ プール西側の岩井堂沢に至る崖面に設定したトレンチで、周辺に露出していた輝石安山岩の巨礫が石垣等人為的な遺構か否かを確認した。掘下げの結果、礫は地山層に含まれるものであることが確認された。

Hトレンチ Eトレンチ南部と同様、グラウンド造成土が厚く多い、それを除去すると昭和28年当時の耕作土、中世のピット、土坑等の遺構を伴う造成土、地山層を検出した。本トレンチは第6次調査に6A1区として再調査し成果を得た。

Iトレンチ BトレンチとEトレンチの中間に設定した南北トレンチで、北トレンチはEトレンチやBトレンチと同様に中間に地山の急激な落ち込みを検出し、それを境に南側には中世の遺構を伴い造成された平坦面が存在することを確認した。南トレンチは実質的にA区の一部として調査した。なお、地山の法面直下にはEトレンチより鮮明に溝状遺構の存在が認められた。

Jトレンチ 南北方向と東西方向に設定したT字状のトレンチで、南部はA区内にある。他のトレンチと同様、急激に落ち込む地山と耕作土層、地山上にある遺構面が捉えられた。

以上の所見から、第11・55図に示した1面造成範囲推定ラインまで平場遺構が広がっていたこと、その遺構面は薄く造成土で整地されている箇所があったこと、造成範囲の境界に溝状遺構が伴うこと、第12図に示すように造成範囲とグラウンド造成以前の地割の一致を確認した。（竹原）

## 第2節 殿村遺跡Eゾーンの調査(第9次調査)

### 1 調査の方法と概要

**調査地の選定とトレンチの配置** 殿村遺跡調査事業に係る一連の発掘調査は、①1次調査で検出した平場遺構周辺における整地層の広がりや外縁部の状況を確認すること(内容把握)と、②広大な遺跡内における中世造成遺構(平場)の範囲確認を目的として実施している。一連の調査事業において最後の発掘調査となった本次調査は、会田中学校旧校舎から長安寺参道を隔てた東側、標高630～635mの傾斜地に9E1トレンチを設定し、遺跡東部の遺構分布状況の確認を目的とした。なお、調査地の現況は休耕中の畑地である。(第11図)

**調査手順** 9E1トレンチは調査地中央で直交する十字形に設定し、交点を境に北区、南区、東区、西区と呼称した。調査は、まず厚さ14～20cmの耕作土を重機で除去し、近世以降の堆積層を検出した。以後人力作業によって層別的な掘り下げを行った。

**調査面・遺構名・番号管理** 9E1トレンチではこれまでの調査で確認された盛土を伴う中世の人為的な造成面は確認されなかった。調査過程で、耕作土直下の3～9層目に遺構の存在は確認されなかったため、全体的に地山面までの掘り下げを行った。従って各遺構は地山面で確認し調査を行うこととなった。

遺構番号はこれまでの調査で使用した番号に後続する2132から開始し、1次調査の方針に従い、内容が判明した時点で種別を頭に冠した。

**記録** 測量基準は1次調査で設定したメッシュを踏襲した。国家座標(世界測地系・第8系)に拠っているが、1次調査との整合を図るため、東北太平洋沖地震以前の観測地を補正せずに使用している。(栗田)

### 2 層序(第124図)

中世の造成面は確認されず、10層からなる。1・2層は耕作土で、これを剥ぐと3・4層(近世以降の盛土層)を検出した。調査地は南に向かって緩やかに下降しており、この盛土層も厚みを増しながら地形に沿って傾斜している。一方堆積の薄い北区では検出されず、耕作土直下ですぐに地山が顔を出す。さらに北区では竪穴状遺構2147の北側及び地山面を削り込む5～8層(近世以降の整地土)を壁面で確認した。5層は黄褐色と灰白色の含有物を多く含む明るい色の層で、対照的に6～8層は暗く、畑の耕作の際に周辺の旧表土を埋めこんだものと考えられる。東区では近世以降の盛土(3層)の下に旧表土層を確認、これを除去して地山面で遺構を検出した。(栗田)

第13表 殿村遺跡第9次発掘調査成果一覧

調査期間	平成29年7月18日～10月6日	
調査面積	90㎡	
検出遺構		
総数	竪穴状遺構:1 ビット:5 土坑:5 溝状遺構:2 計13	
出土遺物		
縄紋	石器	
奈良・平安	黒色土器・須恵器・灰釉陶器	
室町・戦国・近世	焼物	土師質土器(皿・内耳鍋) 瓦質土器 古瀬戸系施釉陶器(皿・折縁深皿・袴腰形香炉) 船載陶磁器(青磁香炉)
	石製品	石臼
	金属製品	鉄釘・銅銭・キセル吸口・不明2
	鍛冶資料	鉄滓

### 3 遺構 (第 124・125 図、写真図版 23・24)

#### (1) 概要

遺跡東部の中世造成面と遺構分布状況の確認を目的に調査した結果、造成面は確認されず、殿村遺跡における中世平場跡群の東限が判明した。遺構面は地表から浅く、南に下降する地山面直上に中世の土坑や溝状遺構が少数認められ、石白や内耳鍋、鉄滓などが出土している。(廣田)

#### (2) 竪穴状遺構

竪 2147 長辺 2.4m 以上、短辺 1.3m 以上の隅丸方形を呈すると考えられ、調査区外へ続く。深さ 31 cm、南側は削平され、近世の整地土に覆われる。底面を縁どるようにごく浅い周溝上のくぼみがとり巻き、暗褐色土で貼床している。埋土上層から青磁算木文香炉と須恵器片が出土している。古代の竪穴住居地の可能性もあるが断定できない。(廣田)

#### (3) ヒット

P2134 長径 30 cm、短径 22 cm の楕円形を呈し、深さは 9 cm。断面は皿形で、遺物の出土はない。

P2160 長径 22 cm、短径 20 cm の隅丸方形を呈し、断面は浅鉢形を呈する。遺物の出土はない。遺物の出土はない。

P2162 長径 32 cm、短径 26 cm、深さ 21 cm の不整形円形を呈し、溝 2132 の底面で確認された。断面形は上部が浅鉢形、下部は中央が深く、柱穴の可能性もある。遺物の出土はない。

P2163 長径 18 cm、短径 16 cm、深さ 7 cm、P2162 と同様、溝 2132 の底面で確認された。断面形は浅鉢形を呈する。遺物の出土はない。

P2164 土 2138 の底面で確認された。長径 14 cm、短径 13 cm、深さ 2 cm。ほぼ土 2138 に削られ、南側が浅く残る。断面は逆台形を呈していたと推察される。遺物の出土はない。(廣田)

#### (4) 土坑

土 2133 北側を溝 2148 に切られる。長径 2.1m 以上、短径 72cm、深さ 41cm、西側は調査区外へ続く。土坑と溝が連結したような外形をしており、床面は不整形。一部掘乱により掘削されている。検出面から中世の内耳鍋片と埋土中から平安時代の須恵器が出土している。また、南西側底部で P2134 を確認した。古代の遺構と推定される。

土 2138 長径 192 cm、短径 164 cm、深さ 41 cm の隅丸方形を呈する。断面形は南北方向では船底形、東西方向では逆台形を呈する。底面には貼床がなされ、南側で P2164 を確認した。南西側を掘乱に切られている。古瀬戸後 I・II 期に該当する折縁深皿、中世の内耳鍋が出土している。

土 2149 中央を溝 2132 に、北端を土 2152 に切られる。長径 94 cm 以上、短径 70 cm、深さ 7 cm の不整形楕円形を呈する。断面形は皿形で、中世の内耳鍋が出土している。

土 2158 長径 48 cm、短径 32 cm、深さ 38 cm の不整形楕円形を呈する。断面形は不整形で、南側に船底形のテラスを持ち、北側の掘方はほぼ垂直に下がり、箱形を呈する。南側を掘乱に、北側を溝 2132 に切られる。断面図で掘乱の下の 2131 を切っていることが確認できるが、2131 の規模と種類は不明。遺物の出土はない。

土 2161 長径 244 cm、短径 126 cm、深さ 30 cm の楕円形を呈する。底面には貼床が施され、黒色土器杯や内耳鍋の破片が出土している。断面形は船底形を呈する。(廣田)

#### (5) 溝状遺構

溝 2132 長さは 8.3m 以上、最大幅 48 cm、深さ 12 cm、断面形は皿形を呈する。軸は N-70°-W にとる。溝 2151、土 2149、土 2158、P2150 を切り、東側は調査区外へ続く。西側は検出・調査をしていないので、平面図上では溝 2148 に切られているように見える。底面から P2162、P2163 が確認された。遺物は内耳鍋が主だが、近世の灰軸筒形香炉片が出土しており、近世以降に帰属すると考えられる。

溝 2148 軸 N-37°-E にとり、土 2133、土 2161 を切って調査区の中央を南へ延びる。長さは調査区内で 7.8 m 以上、幅 40 cm、深さは 21 cm、北側は調査区外へと続く。断面形は浅鉢形を呈し、軸線上には長径 10cm ~ 30cm 前後の石が列をなして入っていた。中には平らな面が上を向くように置かれた石もあり、割れた石白も含まれていたことから人為的に配された可能性がある。(廣田)

#### 4 遺物

##### (1) 焼物 (第 14・15 表、第 126 図、写真図版 25)

調査区は後世の攪乱をうけており、近代以降のものを多く含む焼物の破片が見つまっている。古代・中世にさかのぼる資料としては在地系須恵器 5 点、黒色土器 1 点、青磁 1 点、古瀬戸系陶器 3 点、瓦質土器 1 点、土師質土器皿 (以下、土師質皿) 19 点、土師質土器内耳鍋 (以下、内耳鍋) 66 点、非製品 (粘土塊) 1 点の計 97 点が見つまっている。その内、16 点を図化した。古瀬戸系陶器については河合君近氏、金子健一氏に、青磁は小野正敏氏、水澤幸一氏にご指導・鑑定を受けた。以下、遺構・層位毎に概要を記す。

壺 2147 (1・2) 1 は青磁香炉の胴部片である。算木文が刻まれ、やや緑がかった青灰色の青磁釉がかかる。素地は白色で非常に薄く作られている。2 は土師質皿で、5 次調査報告書での分類のうち I A に該当する。やや荒い粒子の胎土で、立ち上がりから口縁部まで直線的な杯形を呈する。内面見込みが黒変しており、外面にもタール状の付着物があることから、灯明皿に使用した可能性もある。

土 2133 (3・4) 3 は内耳鍋で口縁部は直立に近く、内外面にヨコナデの凹凸が顕著である。市川分類 B 類に該当する。胎土のきめが比較的細かく焼き締まっている。15 世紀中葉から 16 世紀前葉のものと考えられる。4 は在地産須恵器の鉢の胴部である。胎土は赤みを帯びた暗灰色を呈する。隣接する 2C1 地点や 7E1 地点でも須恵器杯や長頸壺が出土しており、本資料も概ね同じ時期、奈良・平安時代のものとする。

土 2138 (5・6) 5 は古瀬戸折縁深皿である。上部内外面に折縁の屈曲がわずかに残る。外面には 2 本の稜線がめぐり、淡灰色の胎土に淡緑灰色の灰釉が施される。古瀬戸後 I・II 期に位置づけられる。6 は内耳鍋の底部である。胎土は暗褐色を呈し、焼締まっている。胴部が外反して立ち上がる。

土 2149 (7・8) 7 は内耳鍋の口縁部である。内面にヨコナデの稜線がみられ、B 類に該当すると思われる。8 は内耳鍋の底部である。内面の摩滅が進み、底が薄くなっている。胎土は赤みを帯びた暗褐色を呈し、胴部は外反して立ち上がる。

土 2161 (9・10) 9 は内耳鍋の口縁部である。耳があるため詳しくはわからないが、直立する B 類か D 類に当たると考えられる。外面全体にスガが付着する。10 は内耳鍋で、胴部がやや垂直に立ち上がる。

溝 2132 (11・12) 11 は小型の内耳鍋の底部である。大型の内耳鍋に比べて底部が厚く作られている。胎土は黒褐色を呈し、調理による被熱とは異なる様相を呈している。12 は内耳鍋の胴部で、胎土が比較的精良である。口縁部下のナデによる屈曲がみられ C 類に該当すると思われる。外面には指かへらによる調整痕が多数残る。

溝 2148 (13・14) 13 は土師質皿の底部である。胎土は精良で淡灰褐色を呈し、III A に該当する。表面が摩滅し、調整法は不明。14 は内耳鍋で、胎土は橙みをおびた暗褐色で、粒子は荒い。胴部はやや丸みを帯び、外反して立ち上がる。

南区近世層 (15) 15 は古瀬戸の袴腰形香炉の口縁部である。わずかながら内外面に口縁部から頸部へと続く屈曲部が残る。白～淡橙色の胎土に淡緑灰色の灰釉が施されている。古瀬戸後 1 期に位置づけられる。

攪乱 (16) 16 は古瀬戸の皿の高台である。胎土は淡黄灰色を呈し、一部白濁した淡緑灰色の灰釉が全面に施されている。極小片のため器種や時期など詳細は不明である。

小結 本調査では中世の造成面が確認されず、出土点数も少ないにもかかわらず、舶載品の青磁香炉のほ

かに古瀬戸後Ⅰ、Ⅱ期に該当する折縁深皿と袴腰形香炉や在地産の土師質皿、内耳鍋など、既報告調査で出土した焼物と時期や内容ともに類似する。須恵器については、会田盆地一帯が古代の須恵器生産地で、旧会田小学校敷地や長安寺付近でも須恵器窯跡が見つかっており、生産遺跡との関連が考えられる。(廣田)

#### 【参考文献】

㈱長野県埋蔵文化財センター 1999 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書9—長野市内その7—小滝遺跡・北之脇遺跡・前山田遺跡』

松本市教育委員会 2015 『長野県松本市殿村遺跡—第5次発掘調査報告書—』

#### (2) 石器・石製品 (第16表、第128図、写真図版25)

9次調査で出土した石器・石製品は合計10点がある。内訳は、石臼5点、砥石2点、石鏝1点、剥片1点、不明1点である。このうち4点を図示して概要を述べる。それ以外のものについては、一覧表を参照されたい。

石臼 (1～3) 5点石臼が出土し、3点を図示した。1・3は、安山岩製の茶臼の下臼である。破損が大きく全体形はわからないが、わずかに臼面が確認できる。両者は接合関係に無いが、石質や破損状況が非常に似ていることから同一個体の可能性がある。2は、安山岩製の粉挽き臼の上臼である。ちょうど半分に割れており、割れ面に芯棒受けやものくぼりの孔が残り、それらの加工の様子がよく観察できる。

石鏝 (4) 4は、チャート製の無茎凹基鏝である。左右非対称の平面形ではあるが、側縁が屈曲し五角形鏝のような形状をしている。(原田)

#### (3) 金属製品 (第127図、写真図版25)

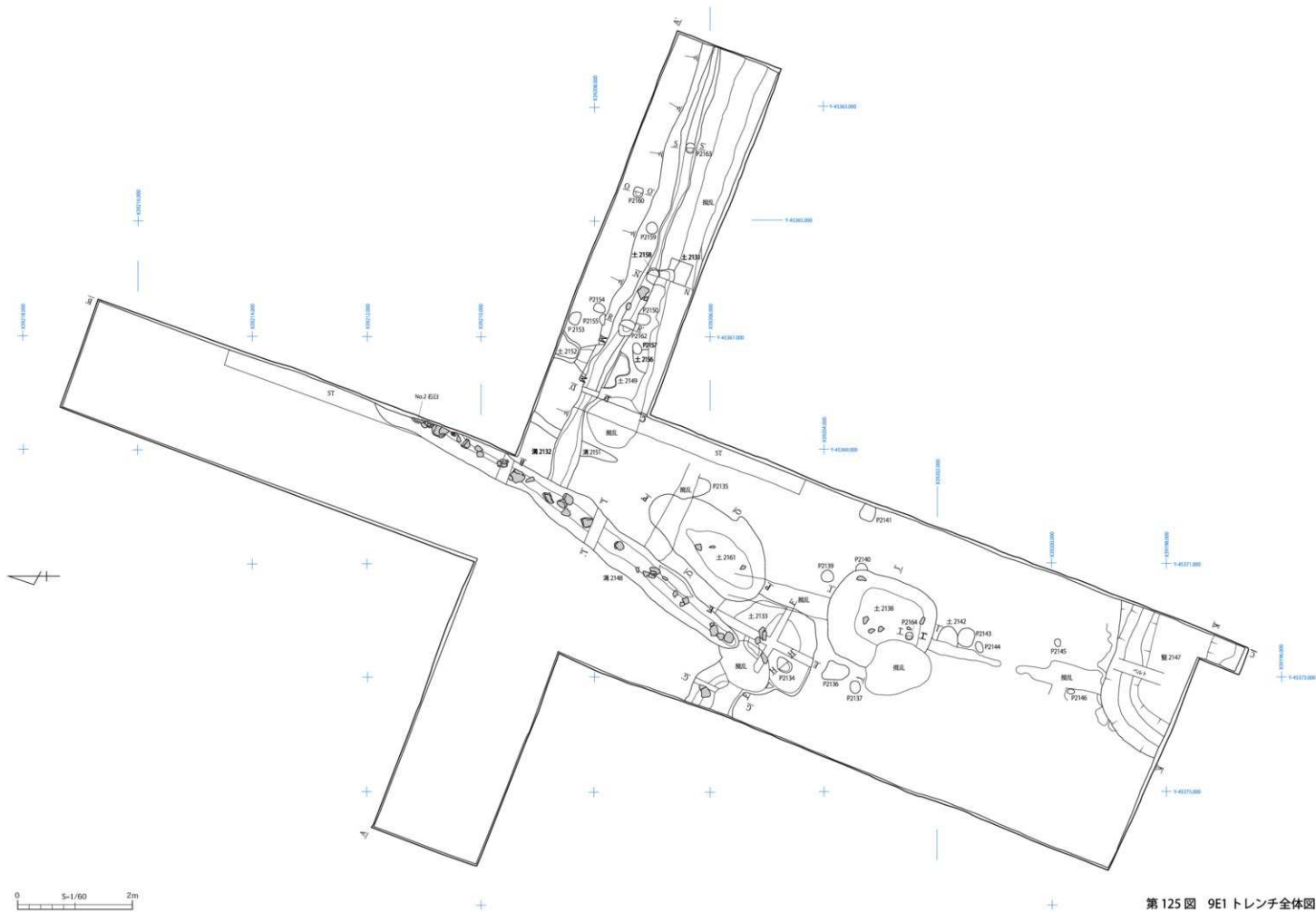
10点が出土している。内訳は鉄釘4点、鉄滓1点、銅銭2点、キセル吸口1点、不明2点うち鉄釘3点と不明1点を図示した。1～3はいずれも中世の角釘で、1は頭部、先端部ともに欠損しており、頭部の形状を知ることはできない。残存長は1.9cmである。2・3は先端部を欠損しており、頭部を丸く折り曲げる巻頭の形状をなす。残存長は2が3.6cm、3が3.5cmを測る。4は断面が長方形の棒状製品で長さ8.4cmである。(栗田)

## 5 調査のまとめ

報告してきたとおり、本調査は殿村遺跡東部の遺構分布状況の確認を目的に実施した。これまで遺跡東部では、平成22、24、27年度に発掘調査を実施し、7E1地点(長安寺本堂跡)とその西南下段にある2C1地点で中世の造成面が確認されている。7E1地点では池跡、礎石建物跡と炉跡などが確認され、14世紀中葉から15世紀の古瀬戸製品、青磁、火鉢に加え、15世紀前半から中頃の擬漢式鏡「花浅双鳥鏡」が出土したことから、池庭を伴う堂跡の存在が想定されている。一方で、2C1地点のすぐ南下の4C1地点では中世の造成面が確認されず、平場群の分布域の南限に近い状況とみられることから、さらに東縁における状況確認が必要になった。

本調査では、中世の造成面は確認されず、ここに殿村遺跡の広大な中世平場跡群の東限が明らかとなった。しかし、地表からほど浅く、南から北によって傾斜する地山面には土坑や溝状遺構が少数確認された。検出面や遺構内からは青磁香炉、古瀬戸製品、かわらけ、内耳鍋、石臼や鉄滓など中世の遺物が出土し、平場群の外にも当時の生活の痕跡をわずかながら認められた。このように平場群周縁における状況が明らかとなったことから、遺跡の範囲確定を目的とする発掘調査として一定の成果を得ることができた。(廣田)





第 125 図 9E1 トレンチ全体図

第14表 器種別焼物出土点数集計(9E1)

器種	器形	計		%	
		数	割合	数	割合
土師質土器	皿	I群	13	19	14.4
		II群	4		4.4
		III群	2		2.2
	内耳鍋		66		73.3
土師質土器					94.4
瓦器(在地産須恵器)					
瓦質土器	不明		1		1.1
瓦器(常滑等)					
陶器(東海系無輪)	山茶碗				
陶器(古瀬戸)	皿	I		3	1.1
		折縁深皿	1		1.1
		香炉	1		1.1
青磁	香炉		1		1.1
合計			90		100

第15表 焼物一覽

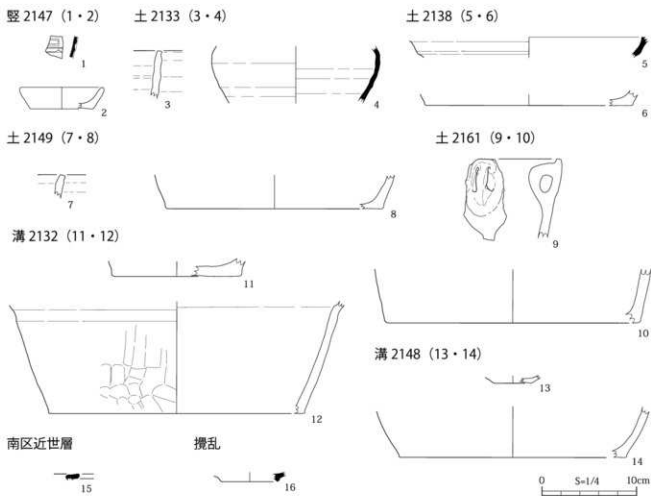
国No	出土地点		器種		法量 (cm)			残存度		色調		成形・調整・形態の特徴	
	地区	位置	遺構	種別	器形	口径	底径	器高	口縁	底部	釉		胎土
1	9E1	南	竪2147	青磁	香炉						青磁釉・青灰	白	算木文
2	9E1	南	竪2147	土師質	皿	(8.7)	(6.2)	2.3	1/32	1/5			淡褐～暗褐 ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、底部回転糸切り、胎土I群、内面黒変、外面タール状の黒色付着物あり
3	9E1	南	上2133	土師質	内耳鍋								口縁部ヨコナデ
4	9E1	南	上2133	須恵器	鉢								暗灰 ロクロナデ、自然釉付着?
5	9E1	南	上2138	古瀬戸	折縁深皿						灰釉・淡緑灰	淡灰	ロクロナデ、内外面施釉、後I・II
6	9E1	南	上2138	土師質	内耳鍋	(21.6)				1/16		暗褐	内外ナデ、底部砂目、内外面黒変
7	9E1	東	上2149	土師質	内耳鍋							暗褐	内外面黒変
8	9E1	東	上2149	土師質	内耳鍋	(22.5)				1/10		暗褐	内外ナデ、底部砂目
9	9E1	中央	上2161	土師質	内耳鍋					僅か		暗褐	内外ナデ
10	9E1	南	上2161	土師質	内耳鍋	(27.0)				僅か		暗褐	内外ナデ、底部砂目
11	9E1	東	溝2132	土師質	内耳鍋	(13.3)				1/6		黒褐	内外面黒変
12	9E1	東・中央	溝2132	土師質	内耳鍋	(27.2)				1/10		暗褐	内外面煤付着
13	9E1	中央	溝2148	土師質	皿	(37.5)				1/7		淡灰褐	胎土II群
14	9E1	中央	溝2148	土師質	内耳鍋	(23.5)				1/12		暗褐～黒褐	内外ナデ、底部砂目、外面煤付着
15	9E1	南	検出面	古瀬戸	袴腰形香炉					僅か	灰釉・淡緑灰	白～淡褐	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、後I
16	9E1	東	覆瓦	古瀬戸	皿	6.0	(1.0)			僅か	灰釉・淡緑灰	淡黄灰	ロクロナデ、付高台、内外面施釉、時期不明

第16表 石器・石製品一覽

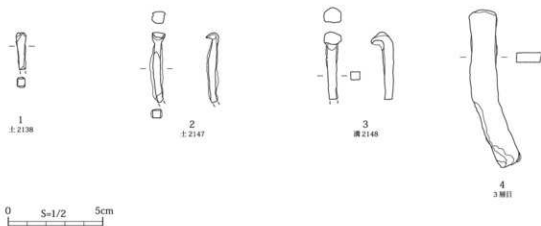
ID	国No	器種	地区	出土位置・層位	出土地点	石材	寸法			重量(g)	破損状況	備考
							長(cm)	幅(cm)	厚(cm)			
1	4	石鏝	9E1	竪2147	No 20	チャート	(2.21)	1.66	(0.25)	(0.8)	1/4 欠(尖頭部欠)	無茎凹基
2		砥石	9E1	上2138	No 55	砂岩	(9.15)	(6.46)	(3.83)	(393.0)	1/3 欠	平面形長方形、断面形長方形、砥面数1、輪茶研磨痕あり、自然礫素材
3		石白	9E1	上2161	No 41	砂岩				(18.1)	3/4 以上欠	白面の一部
4	1	石白	9E1	上2161	No 44	安山岩	(30.50)	(13.40)	(9.45)	(1915.0)	3/4 欠	茶白の下白、白面磨耗、No 9 と同一個体か
5	2	石白	9E1	溝2148	No 28	安山岩	(28.50)	(27.60)	(8.05)	(3035.0)	1/2 欠	粉挽き白の上白、白面磨耗
6		不明	9E1	溝2148	No 29	安山岩	(12.35)	(5.30)	(808.0)	3/4 以上欠		一部に整形痕あり
7		石白	9E1	溝2148	No 30	安山岩	(30.20)	(11.25)	(7.14)	(335.0)	3/4 以上欠	粉挽き白の上白、白面磨耗、側面被熱か
8		砥石か	9E1	溝2148	No 33	砂岩	16.85	15.45	4.95	1385.0	完形	表面に付物痕あり
9	3	石白	9E1	溝2148	No 61	安山岩	(31.30)	(17.75)	(9.55)	(1475.0)	3/4 欠	茶白の下白、白面と受皿磨耗、No 4 と同一個体か
10		剥片	9E1	I層		黒曜石	(1.01)	(0.86)	(0.33)	(0.2)	1辺折れ	

※ ( ) 内数値は残存値を表す。  
※ 1200g 未満は 0.1g 単位、1200g 以上は 1g 単位

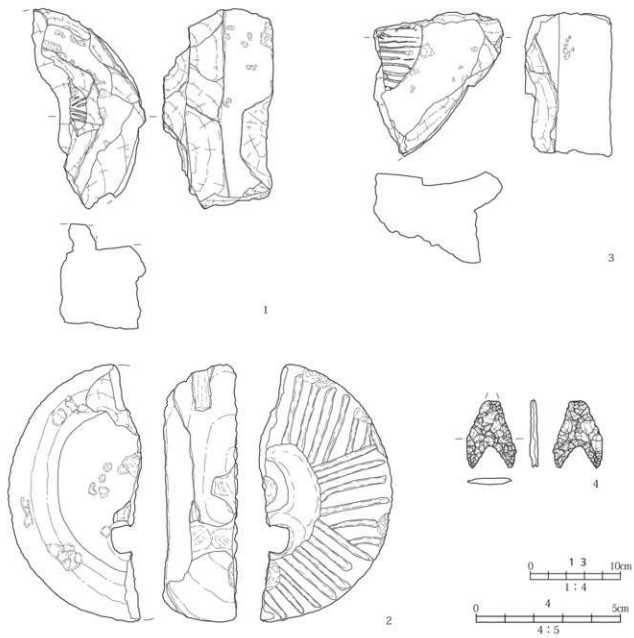




第 126 図 焼物



第 127 図 金属製品



第128図 石器・石製品

### 第3節 殿村遺跡出土木質遺物の樹種同定

植田弥生

#### 1 はじめに

殿村遺跡は会田盆地北部の松本市会田にあり、会田川の河岸段丘に立地する室町時代（14世紀中頃～16世紀後半）の宗教施設跡である。この遺跡の木製品は、生活用具の出土が少ない一方で、畜串状木製品・形代・端材・短冊状板・板材・削屑などが多く出土し、特に畜串状木製品の出土数が多いのが特徴である。中世の木製品の樹種利用は全国的にあまり知られておらず、まして宗教関連遺跡からの報告は極めて少ない。当遺跡から出土した多くの木製品を網羅的にその樹種を明らかにすることは、当地域の中世における器種とその樹種の選択性を知る貴重な資料となる。中世は木工技術が進展した時代であり、それに伴い木材利用量も更に進んだはずである。木製品の樹種を量的に明らかにする作業は、利用木材の背後にある産地山林の様相を理解するための情報にも繋がる。また情報が少ない中世の木製品とその樹種の資料を蓄積してゆくことは、古代や近世のとの比較や山林利用の変遷を理解する上でも重要と思われる。

ここでは2次・4次・5次調査で出土した15世紀後半の木製品および1次・2次・6次・8次調査で取り上げられた木炭の樹種を調査した。木製品については、2次と5次調査の池状遺構（石積前空間）および4次調査の石積遺構1528の器種と樹種の関連をまとめた。木炭については、遺跡において平場が造成される過程で含まれていた木炭樹種と、平場が利用されていた過程で残された木炭樹種を調べ比較した。

#### 2 試料

木製品：2次調査の木製品104点は、造成された平場南端部に築造された池状遺構（石積前空間 76層）の湿潤な堆積土から出土したものである。4次調査の木製品は、平場東端に位置する石積壁を伴う長方形の石積遺構1528（122層）の内部に堆積したシルトや粘土層から出土した36点である。ここからは大量の寄生虫卵が検出されており、便所や排泄物に関わる遺構と推定されている（辻、2015）。5次調査の木製品は、池状遺構（石積前空間）の暗オリーブ色粘土層から出土した3面新段階堆積層（39層、35・39層）の348点である。

木炭：1次調査で採取された32試料、6次調査の2試料、8次調査の4試料、合計38試料である。ひとつの試料中に複数破片が含まれる試料については、材の横断面観察から異なる樹種と覆われるもの、また形状から明らかに異なる由来と思われるものにはそれぞれ枝番をつけ識別し同定を行った。

#### 3 方法

木製品から材の3方向すなわち横断面（木口）と接線断面（板目）そして放射断面（柃目）を見定めて、片刃の剃刀を用い各方向から薄い切片を水平に引く様に剥ぎ取り、スライドガラスに並べ、封入剤としてガムクロラルで封入し、永久プレパラート（材組織標本）を作成した。この材組織標本を、光学顕微鏡で40～400倍に拡大し観察した。

木炭は、横断面を手で割り実体顕微鏡で予察し、次に材の3方向（横断面・接線断面・放射断面）の断面を作成し、走査電子顕微鏡で拡大された材組織を観察した。走査電子顕微鏡用の試料は、3断面を0.5cm角以下の大きさに整え、直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡（日本電子（株）JSM-5000型）で観察と写真撮影を行った。また、横断面から樹種が予想できる一部の樹種（ブナ属・クリ・コナラ節など）については、実体顕微鏡下で接線断面や放射断面の特徴を追加確認して同定を行った。

材組織標本および木炭試料は、松本市教育委員会文化財課に保管されている。

#### 4 結果

第 17 表は今回の調査で出土した樹種の一覧で、木製品と木炭からの出土数を集計した。

##### (1) 木製品

木製品管理台帳に同定樹種を記入し、2次調査木製品は第 18 表に、4次調査木製品は第 19 表に、5次木製品は第 20 表に示した。各表の左端の図版 No. は、報告書（松本市教育委員会 2012、2014、2015）の木製品の項に掲載されている図版 No. と対応しており今回樹種を調べた。

2次（104点）・4次（36点）・5次（348点）調査の木製品合計 488 点の樹種は、トウヒ属・アカマツ・ツガ属・サワラ・ヒノキ・スギ・ネズコ・アスナロの針葉樹 8 分類群、モクレン属・ヤナギ属・ハギ属・フジ属・ナナカマド属・ナシ亜科・ケヤキ・ヤマグワ・クリ・ブナ属・クスギ節・コナラ節・オニグルミ・カエデ属・サワフタギ・リョウブ・トネリコ属・広葉樹 A の落葉広葉樹 18 分類群であった。

以下に 2 次と 5 次の池状遺構（石積前空間）と 4 次の石積遺構 1528（122 層）に分けて、出土器種とその樹種を報告する。

##### 1) 池状遺構（石積前空間） 第 18・20・21・22 表

池状遺構から出土した各器種の樹種と樹種選択性を検討するために、2 次と 5 次調査の結果をそれぞれ第 21 表に集計した。第 22 表は、5 次調査調査資料について、地点で出土器種に偏りがあるかを比較した。池状遺構は、殿村遺跡の中で最も多くの木製品が集中して出土した遺構であり、齋串状木製品と短冊状板がほとんどを占め生活用品の遺物は極めて少ない。

齋串状木製品の樹種は 2 次と 5 次調査の合計 203 点のうち、サワラ 98 点（48%）、ヒノキ（46%）であり、大半がサワラとヒノキで占められ、このほかにアカマツ・スギ・ネズコ・アスナロの利用が見られた。短冊状板も 2 次と 5 次調査の合計 125 点のうち、サワラ 61 点（53%）、ヒノキ 46 点（40%）であり、このほかにはトウヒ属・スギ・カエデ属・広葉樹 A が見られた。

板・端材・削屑・底板・角材・折敷底板・円板・部材・杭？・不明においても、サワラとヒノキが多く、それ以外もトウヒ属・アカマツ・ツガ属・スギ・アスナロの針葉樹の利用が多い。削屑・角材・端材・杭？・不明からは針葉樹以外にも、広葉樹のモクレン属・ヤナギ属・ハギ属・ナシ亜科・ケヤキ・ヤマグワ・クリ・ブナ属・コナラ節・クスギ節・オニグルミ・リョウブの利用が散見された。

このほかに、下駄（2 次）はクリ、鳥形（5 次）はスギであった。

5 次調査区において、地点（松本市教育委員会 2015 p.23）により器種の出土種類に偏りがあるかを検討してみた（第 22 表）。どの地点においても齋串状木製品は多く、次に短冊状板が多く出土する傾向が見られ、端材・削屑・不明なども少数件い出土していた。この調査区においては、出土地点に器種の偏りは見られなかった。

##### 2) 石積遺構 1528（122 層） 第 19・23 表

4 次調査の石積遺構 1528 から出土した器種 36 点は、不明が最も多く 13 点、次に短冊状板が 11 点、齋串状木製品 4 点、端材 3 点、削屑 2 点、馬形・桶底・部材が各 1 点である。ほとんどの器種でサワラとヒノキが利用されていた。特に短冊状板と齋串状木製品はサワラ（8 点）とヒノキ（5 点）の 2 種が占め、このほかにはスギが短冊状板からは 2 点出土した。この遺構では不明とまとめられた器種が最も多く、そのうちの板材・角材はサワラ・ヒノキ・モクレン属で、芯持ち丸木はすべてが落葉広葉樹材でヤナギ属・フジ属・ナナカマド属・クリ・サワフタギであった。馬形はヒノキ、桶底はトネリコ属であった。

## ② 木炭 第24・25表

木炭として取り上げられた試料中には、一部または大半が炭化していない試料も含まれていた。

1次調査の32試料、6次調査の2試料、8次調査の4試料、合計38試料からはモミ属・アカマツ・ヒノキ属・ヒノキ科の針葉樹4分類群、アワブキ・ヤナギ属・ハギ属・カマツカ・サクラ属・ナナカマド属・ケヤキ・ヤマグワ・クリ・ブナ属・コナラ属コナラ節・カバノキ属・クマシデ属クマシデ節・アサダ・カエデ属・クマノミズキ類・ミズキ・ウツギ属・リョウブ・トネリコ属・広葉樹（環孔材）の落葉広葉樹21分類群が出土した。第25表は、平場が造成される過程の堆積層に含まれていた木炭（試料No.12～31, 36～38）と平場の遺構や地点から出土した木炭（試料No.1～11, 32～35）分けて集計し、出土樹種の傾向を検討した。

### 1) 平場造成過程の堆積層に含まれていた木炭樹種

造成前地山面（試料No.36）の立木はヤナギ属であった。

基盤土層炭層（試料No.29）は土層から洗い出された細かい木炭が多数あり、それは主に直径0.5cmほどの小枝や小さな破片が大量にあった。その中から無作為に65点を取り出し同定した。クリ（34点）が最も多く、サクラ属（8点）・コナラ属コナラ節（7点）・アワブキ（5点）・ウツギ属（3点）、ハギ属・ブナ属・ミズキが各2点、アサダ・カエデ属が各1点で、すべて落葉広葉樹であった。

基盤造成土（試料No.22～28, 30, 31）からは針葉樹のアカマツ（4点）が検出され、落葉広葉樹のブナ属・クマシデ属クマシデ節（各2点）、アワブキ・ハギ属・サクラ属・ナナカマド属・クリ・広葉樹（環孔材）が各1点である。アカマツはいずれも加工痕があり、ほかの樹種に比べて極めて大きい破片や芯去り丸木や芯持ち丸木また爪楊枝のような形状の加工品もあった。

平場南側斜面と平場南部造成土（試料No.12～21, 37, 38）からは、針葉樹のモミ属・アカマツ（各1点）、落葉広葉樹のコナラ節（6点）・サクラ属（3点）、アワブキ・カマツカ（各2点）、ブナ属・リョウブ・トネリコ属（各1点）であった。試料No.12はオニグルミ核、No.31からはモモ核とオニグルミ核が出土した。

### 2) 平場の遺構や地点から出土した木炭

焼土（炉）368、599（試料No.2, 3）の木炭はアカマツ・クリ・ヤマグワ・カエデ属であった。土坑1692・1693・1988（試料No.8, 9, 33）はヒノキ・ヒノキ科・クリ・コナラ節・クマシデ節、礎石建物13（試料No.4）と礎石558掘方内（試料No.5）からはクマシデ節が、石列4周辺焼土面（試料No.6, 7）からはケヤキとクマノミズキ類、池状遺構埋土（試料No.10, 11）はコナラ節・カバノキ属・カエデ属であった。

拡張部溝（試料No.1）の木炭はクリ、溝1991（試料No.34）の木炭は薄い板状の破片でアカマツ・ヒノキ・ヒノキ属であった。このほか、中央部炭集中（試料No.35）はコナラ節、B地点（試料No.32）はミズキである。

木炭の形状は小径の材や小径木の割り材が目立ち、カエデ属・クマシデ属・クマノミズキ類には硬質で消し炭のようであった。

### ③ 樹種記載

以下に同定根拠とした材組織の特徴を分類配列順に記載し、材の組織写真を図1～7に提示した。

#### 01) モミ属 *Abies* マツ科 第133図 27c・t・r (No.19)

仮道管・放射柔細胞からなり樹脂細胞はない針葉樹材。放射柔細胞の壁は厚く数珠状肥厚が見られる。分野壁孔は小型のスギ型とヒノキ型で、1分野に1～6個、炭化材では孔口の大きさが不揃いに見える。

モミ属は常緑高木で、暖帯から温帯下部の山地に普通に見られるモミ、温帯上部の高山に生育するウラジロモミ・シラベ・アオモリトドマツ、北海道の山地に生育するトドマツの5種がある。いずれの材も組織

は類似しており区別はできない。材質はやや軽軟で加工は容易であるが保存性は低い。

02) トウヒ属 *Picea* マツ科 第129図 1c・t・r (No.5A1-181)

垂直・水平樹脂道があり、水平樹脂道は小さく分布は少なく、仮道管・放射柔細胞・放射仮道管からなる針葉樹材。分野壁孔はトウヒ型で1分野に4～6個が雑然と配置、放射仮道管の有縁壁孔対は小さく壁は厚く先端は角張ったトウヒ型である。

トウヒ属は温帯から亜寒帯の山地に生育する常緑針葉樹で、低山地に分布するハリモミ、本州中部に稀に生育するヒメバラモミやヤツガタケトウヒ、亜寒帯に多いトウヒ・アカエゾマツがある。材組織から種類の特定は難しい。材は割裂容易で弾性がある。

03) アカマツ *Pinus* Sieb. et Zucc. マツ科 第129図 2c・t・r (5A1-275), 第133図 28r (No.34-3)

垂直・水平樹脂道が多く、垂直樹脂道の径は大きい針葉樹材。分野壁孔は窓状、放射仮道管がありその内壁は鋭く尖った鋸歯状肥厚が顕著である。

アカマツは暖帯から温帯下部の内陸部に主に分布し、人間活動の活発な周辺地の主要な二次林要素である。材は耐水性がある。

04) ツガ属 *Tsuga* マツ科 第129図 3c・t・r (2A1-056)

樹脂道は無く、仮道管・樹脂細胞・放射柔細胞・放射仮道管からなる針葉樹材。放射柔細胞の壁は厚く数珠状肥厚が見られ、有縁壁孔を持つ放射仮道管がある。分野壁孔は小型で2～4個ある。

ツガ属には本州の福島県以南の暖帯から温帯下部の山地に普通のツガと、本州・四国・九州の温帯上部の深山に生育するコメツガがあるが、材組織からは2種を区別することはできない。材は重硬で割裂性も大きく耐久性もよい。

05) サワラ *Chamaecyparis pisifera* (Sieb. et Zucc.) Endl. ヒノキ科 第129図 4c・t (5A1-337)

樹脂道は無く、仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。分野壁孔はやや大きいヒノキ型で、孔口はヒノキよりやや大きく開き、開口幅と壁孔縁の幅はほぼ同じで斜めまたは水平に近い状態で開いている。1分野に主に2個が水平に配置する。

サワラはヒノキより分布域が狭く東北部から中部地方の沢治いの岩上に生育する日本特産種の針葉樹である。材はヒノキより軽軟で耐久性・保存性はやや劣る。

06) ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科 第129図 5c・t・r (5A1-336), 第133図 29r (No.8)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。分野壁孔の孔口はやや斜めに細く開いたヒノキ型で、1分野に主に2個が水平に配置する。

ヒノキは本州の福島県以南・四国・九州のやや乾燥した尾根や岩上に生育し、材は耐久性・切削性・割裂性にすぐれる。

07) スギ *Cryptomeria japonica* D. Don ヒノキ科 第129図 6r (2A1-086)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。分野壁孔はヒノキ属に比べ大きく、孔口は水平に大きく開き壁孔縁の幅は狭いスギ型、1分野に主に2～3個ある。

スギは本州以南の暖帯から温帯下部の湿気のある谷間に生育し、材はやや軽軟であるが加工容易である。

08) ネズコ(クロベ) *Thuja standishii* Carr. ヒノキ科 第129図 7r (2A1-095)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。分野壁孔の孔口はやや大きく開いたヒノキ型や、やや小さめのスギ型があり、1分野に2～4個ある。

ネズコ(クロベ)は本州・四国の温帯上部の山中に生育し、特に中部地方以北に多く分布する。材は耐朽

性・切削性・割裂性にすぐれる。

09) アスナロ *Thujaopsis dolabrata* Sieb. et Zucc. ヒノキ科 第130図 8t・r (2A1-067)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。分野壁孔は小型のヒノキ型やスギ型で、1分野に2～4個が雑然と配置している。放射組織の高さは5細胞前後で低い。

アスナロは日本特産の1属1種で、本州・四国・九州の温帯の山中に生育する。材質はヒノキよりやや劣るが有用材であり、材には殺菌効果がある。

10) モクレン属 *Magnolia* モクレン科 第130図 9c・t・r (4A1-010)

小型の管孔が単独または2～数個が複合して分布する散孔材。道管の壁孔は階段状、穿孔は主に単穿孔で階段穿孔も見られ、内腔には水平や弧状のチロースがある。放射組織は異性、1～2細胞幅、上下端に方形細胞があり、道管との壁孔は大きく階段状または対列状に整然と配列している。

モクレン属は暖帯または温帯に分布する落葉性の高木または小高木である。北海道以南の山地に生育するホオノキ・コブシ、本州と九州に生育するタムシバ、関東北部以西に生育するオオヤマレンゲ、中部地方西南部に生育するシデコブシがあるが材組織から識別は出来ない。材質はやや軽軟で割裂性は大きくあり割れや狂いが少なく加工し安い材である。

11) アワブキ *Meliosma myriantha* Sieb. et Zucc. アワブキ科 第133図 30c・t・r (No.21-2)

やや小型で厚壁の管孔が単独または柔細胞を介して放射方向に2個～4個複合し、疎らに分布する散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は主に単穿孔で階段数が5本前後の階段穿孔も混じる。放射組織は異性、1から3細胞幅で非常に高く、放射柔細胞も大きい。周囲状柔組織が顕著である。

アワブキは本州以南の暖帯の山地に普通の落葉高木である。和名は枝を燃やすと切口から泡が吹き出すことに由来する。材は細工物や薪炭への利用があるぐらいである。

12) ヤナギ属 *Salix* ヤナギ科 第130図 10c・t・r (5A1-242)

小型の管孔が単独または2～4個が複合し晩材部に向いゆるやかに径を減じる散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔である。放射組織は単列異性、道管との壁孔は大きく交互状に密在にする。

ヤナギ属は暖帯から温帯の水湿地や丘陵地の日当たりのよい所に生育する落葉高木または低木で多くの種類があり、材組織は類似しており樹種を特定できない。材は軽軟で切削容易だが耐朽性は低い。

13) ハギ属 *Lespedeza* マメ科 第130図 11c・t・r (5A1-301) 第133図 31c・t・r (No.29-8)

年輪の始めに小型の管孔が1層並び、その後は単独や少数が放射方向や斜めに配列し、年輪界には極めて小型の道管と繊維細胞の集合がある。道管の壁孔は交互状、単穿孔である。放射組織は明瞭な異性、1～3細胞幅で非常に高い。繊維細胞は層階状で、小道管にはらせん肥厚がある。

ハギ属は、日当たりのよい空き地や荒地に育つ灌木で種類数は多い。

14) フジ属 *Wisteria* マメ科 第130図 12c・t・r (4A1-026)

中型～大型の管孔が主に単独で分布し小型の管孔が混在する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、小道管にはらせん肥厚がある。放射組織は同性、主に5細胞幅、木繊維は層階性がある。

フジ属は本州以南の暖帯から温帯の林縁の樹木に巻き付き生育する落葉性ツル植物で、本州以南に分布するフジと兵庫県以西に分布するヤマフジがある。

15) サクラ属 *Cerasus* バラ科 第133図 32c・t・r (No.21-1)

小型の管孔が単独や放射方向・接線方向・斜状に複合して分布している散孔材。道管の壁孔は対列状または交互状、穿孔は単穿孔、内腔に細いらせん肥厚がある。放射組織は異性、1～3細胞幅、道管との壁孔は小型で密在する。

サクラ属は暖帯から温帯の落葉広葉樹林内に生育し多くの種がある。材は粘り気があり強く、保存性も高い。

16) ナナカマド属 *Sorbus* バラ科 第130・131図 13c・t・r (4A1-016)

小型で孔口が丸い管孔が単独で均一に分布し年輪界でやや径が小さくなる散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、らせん肥厚がある。放射組織は同性、2細胞幅である。

ナナカマド属は小高木のナナカマドや、高木になるアズキナシ、ウラジロノキなど温帯から寒帯の山地に生育する落葉広葉樹である。木製品製作用の用途はあまり知られていないが、薪炭材に利用される。

17) カマツカ *Pourthiaea villosa* (Thunb.) Decaisne var. *laevis* (Thunb.) Staf. バラ科 第133・134図 33c・t・r (No.14)

小型の管孔が主に単独で多数分布する散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、内腔にはかすかにらせん肥厚がある。放射組織は異性、1～3細胞幅、上下端に方形・直立細胞が単列で1～3細胞高あり、道管との壁孔は小型で交互状である。

カマツカは暖帯から温帯の山野に普通の落葉低木である。材は重硬・強韌で割裂しにくい。

18) ナシ亜科 *Rosaceae subfam. Maloideae* バラ科 第131図 14c・t・r (5A1-331)

非常に小型の管孔が主に単独で分布し、年輪始めは接線状に密に配列し、木部柔細胞が散在する散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、内腔にはかすかならせん肥厚がある。放射組織はほぼ同性、主に1細胞幅、道管との壁孔は小型で交互状である。

19) ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科 第131図 15c・t・r (5A1-295) 第134図 34r (No.6-1)

年輪の始めに中型の管孔が1～2層配列し、その後は小型の管孔が集合して接線状・斜状に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、小道管にらせん肥厚がある。放射組織は異性、1～5細胞幅で上下に大型の結晶を持つ。

ケヤキは暖帯下部から温帯の山中や川岸に生育する落葉高木である。材質は堅く木目が美しく、建築材や容器に利用される。

20) ヤマグワ *Morus australis* Poir. クワ科 第131図 16c・t・r (2A1-061)

中型の管孔が単独や少数複合して分布し徐々に径を減じ、晩材部では小型と非常に小型の管孔が集合して塊状・斜状に分布する環孔材。放射組織は異性、1～7細胞幅である。

ヤマグワは亜熱帯から温帯の山中に生育する落葉高木である。材は重硬・強韌で保存性が高い。

21) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 第131図 17c (5A1-290) 第134図 35c (No.2-2)

年輪の始めに中型～大型の管孔が密に配列し徐々に径を減じてゆき、晩材では非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単穿孔、内腔にはチロースがある。放射組織は単列同性である。

クリは北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉高木である。材は加工やや困難であるが狂いは少なく粘りがあり耐朽性にすぐれている。

22) ブナ属 *Fagus* ブナ科 第131図 18c (5A1-291) 第134図 36c (No.20)

丸みをおびた小型の管孔が密に除々に径を減じてゆき、晩材では極めて小型となり分布数も減る散孔材。道管の壁孔は交互状や孔口がレンズ状で水平に大きく開く階段状があり、穿孔は階段数が10から20本の階段状と単穿孔がある。放射組織は異性、1～3細胞幅のものと幅が広く背の高い広放射組織がある。

ブナ属は温帯域の極相林の主要構成樹種で、大木となる落葉樹である。北海道南部以南の肥沃な山地に群生するブナと、本州以南のおもに太平洋側に分布しブナより低地から生育しているイヌブナの2種がある。材も建築材から漆器まで用途が広い。



23) コナラ属コナラ亜属クヌギ節 *Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Cerris* ブナ科 第131図 19c (2A1-060)

年輪の始めに非常に大型の管孔が1層配列し、その後は厚壁で孔口が円形の小型管孔が単独で放射方向に配列し広放射組織がある環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、チロースがある。放射組織は同性、単列のもの集合状のものがあり、道管との壁孔は柵状である。

クヌギ節は落葉性のドングリの仲間とクヌギとアベマキが属し暖帯の山林に普通の落葉高木で、二次林要素でもある。材は重厚で割裂性が良く、木製品や薪炭材としてよく利用される。

24) コナラ属コナラ亜属コナラ節 *Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 第131図 20c (2A1-305) 第134図 37c (No.9-7)

年輪の始めに中型の管孔が配列し除々に径を減じ、晩材部では薄壁で孔口が角形の小型管孔が火炎状・放射方向に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、内腔にチロースがある。放射組織は単列のもの広放射組織・複合状のものがある。

コナラ節は暖帯から温帯に生育する落葉高木でカシワ・ミズナラ・コナラ・ナラガシワがある。材は加工がややしくく乾燥すると割れや狂いが出やすい欠点があるが、人里近くに普通の樹種で入手しやすいこともあり利用頻度は高い。

25) カバノキ属 *Betula* カバノキ科 第134図 38c・t・r (No.11)

中型の管孔が単独または放射方向に2～数個が複合し分布する散孔材。道管の穿孔は階段数が10～15本の階段穿孔。放射組織はほぼ同性、1～4細胞幅である。

カバノキ属は温帯から寒帯の山地の陽地に生育する落葉性の高木または低木で、約9種がある。本州以南に分布するミズメ、岐阜県以東に分布し崩壊地に二次林を形成するシラカンバ、高山に多いウダイカンバなどがある。樹皮は薄く剥げ細工物に利用されまたよく燃えるので付け木になる。材は重硬で有用材である。

26) クマシデ属クマシデ節 *Carpinus* sect. *Distegocarpus* カバノキ科 第134図 39c・t・r (No.24)

小型の管孔が単独または2～4個が放射方向に複合して散在し、年輪界は不明瞭な散孔材。管孔が多く分布する領域と放射組織が多く分布する領域が見られる。道管の壁孔は小型で交互状に密在、穿孔は横棒数が10本前後の階段穿孔である。管孔の内壁には細いらせん肥厚が密にある。放射組織はほぼ同性、1～2細胞幅である。穿孔がほとんど階段穿孔であることからクマシデ属のうちサワシバとクマシデを含むクマシデ節と同定した。材は丈夫で器具柄・シャトル・荷棒などの用途によく使われる。

27) アサダ *Ostrya japonica* Sarg. カバノキ科 第134図 40c・t・r (No.29-4)

小型の管孔が単独や2～数個が放射方向に複合して分布し、年輪界では径を減じる散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、道管にはらせん肥厚がある。放射組織は同性、1～2細胞幅である。

アサダは、温帯の山地に生育する落葉高木で、材質は堅く丈夫である。

28) オニグルミ *Juglans mandshurica* Maxim. subsp. *sieboldiana* (Maxim.) Kitamura クルミ科 第131・132図 21c・t・r (2A1-047)

単独あるいは2～3個が複合した中型の楕円形の管孔が除々に径を減じながら散在し、接線状の柔組織が顕著な散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、チロースが顕著である。放射組織はほぼ同性または上下端部に方形細胞がある異性、3細胞幅が多い。

オニグルミは暖帯から温帯のやや湿った所に生育する落葉高木である。材は加工しやすく狂いが少ない。

29) カエデ属 *Acer* ムクロジ科 第134・135図 41c・t・r(5A1-302) 第135図 42c・t・r(No.10-2)

小型の管孔が単独または2～3個が放射方向に複合して均等に分布し年輪界はやや不明瞭で、帯状の柔組織が顕著な散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、内腔に細いらせん肥厚がある。放射組織は同性、

1～4細胞幅である。

カエデ属は日本全土の暖帯から温帯の山地や谷間に生育し、落葉広葉樹林の主要構成樹であり、約26種と多くの変種が知られている。材は堅く緻密で割れにくく、保存性は中程度である。

30) クマノミズキ類 *Cornus cf. brachypoda* C.A. Meyer ミズキ科 第135図 43c・t・r (No.6-2)

やや大きな小型の管孔で孔口が円形、主に単独で分布する散孔材。道管の壁孔は交互状、階段穿孔で横棒数は30本前後である。放射組織は異性、1～3細胞幅で上下に方形・直立細胞が単列である。

横断面の管孔配列からミズキ属のクマノミズキまたはヤマボウシと思われる。

31) ミズキ *Cornus controversa* Hemsl. ミズキ科 第135図 44c・t・r (No.29-6)

小型の管孔が単独または放射方向に2～3個接合して分布する散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は横棒の数が多い階段穿孔である。放射組織は異性、1～3細胞幅、多列部は平伏細胞からなりその上下端に方形・直立細胞が単列で伸びしばしば一端の単列部の細胞数が多い。横断面の管孔は複合して分布傾向があることから、ミズキ属のなかでもミズキと特定した。

ミズキは暖帯から温帯の山地に普通の落葉広葉樹である。材は緻密で加工しやすい。

32) ウツギ属 *Deutzia* ユキノシタ科 第135図 45c・t・r (No.29-3)

やや小型の管孔が多数分布し、太い放射組織が目立つ散孔材。道管の穿孔は横棒数が非常に多い階段穿孔である。放射組織は明瞭な異性、放射柔細胞は大きく、主に3細胞幅、細胞高は非常に高い。

ウツギ属は全国の山野に普通のウツギ、関東以西の陽光地に生育するヒメウツギやマルバウツギなどがある。いろいろな民俗的な用途の利用が知られており、遺跡からも出土する事例の多い樹種である。

33) サワフタギ *Symplocos coreana* (Lev.) Ohwi ハイノキ科 第132図 22c・t・r (4A1-017)

非常に小型の管孔が均一に密在する散孔材。道管の穿孔は横棒数が20～30本の階段穿孔である。放射組織は異性、1～2細胞幅、単列の放射組織は直立細胞からなり、2細胞幅の部分は平伏細胞からなりその上下端は方形・直立細胞が単列でのびる。

サワフタギは山中の谷間に生える落葉低木である。

34) リョウブ *Clithra barbinervis* Sieb. et Zucc. リョウブ科 第132図 23c・t・r (5A1-345) 第135図 46c・t・r (No.17-2)

小型の管孔が主に単独で2～3個が複合する分布もみられる散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は階段数が非常に多く60本ほどある階段穿孔である。放射組織は異性、直立細胞からなる単列と5細胞幅で細胞高の高い紡錘形のものが多い。

リョウブは北海道南部の暖帯から温帯下部の山中に普通の落葉高木である。材は堅いが折裂しやすく割裂はあまりよくない。

35) トネリコ属 *Fraxinus* モクセイ科 第132図 24c・t・r (4A1-022)

大型の管孔が2～3層配列し、晩材部は単独または2個複合した厚壁の小型の管孔が分布する環孔材。周囲状柔組織がある。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単穿孔である。放射組織は同性、1～2細胞幅である。

トネリコ属はおもに温帯に生育する落葉高木でシオジ・ヤチダモ・トネリコ・アオダモなど約9種ある。材は重硬で弾力性があり折れ難く、機械類・板材・棒・柄などに使われる。

36) 広葉樹A broad-leaved tree A 第132図 25c・t・r (5A1-184) .26c・t・r (5A1-319)

板目に沿って非常に薄く削がれた材であり、横断面では小型の管孔が多くは単独で分布しているのが見えたが、年輪の一部であり年輪全体の様子は判らない。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、道管内にチロースがある。放射組織は明瞭な異性、放射柔細胞は大きく平伏・方形・直立細胞が混在し、1～3細胞幅、細胞高は高い。年輪内の管孔配列が確認できないので、樹種は特定できていない。

## 5 考察

宗教関連遺跡の性格を暗示する齋串状木製品と短冊状板が圧倒的多数を占めた木製品は、樹種もほとんどがヒノキ科ヒノキ属のサワラとヒノキで占められていた。既報（バリノ・サーヴェイ株式会社 2017、本書付録 DVD に収録）でもサワラが多いことはすでに知られていたが、今回さらに調査試料数を増やし調査した結果、サワラがやや多いがヒノキも多く使われており、サワラとヒノキの利用は拮抗していた。そのほかの板・端材・削屑などの器種においてもサワラとヒノキが主な樹種であった。中部地方は丁度サワラとヒノキの生育分布が重なりあう地域である。当遺跡でサワラと共にヒノキも多く利用されていたことは、この2種が入手容易な地元の木材資源であったことを反映している。

鈴木（2002）は長野盆地の石川条里遺跡の木材樹種調査から、長野県では弥生時代から古墳時代前期にかけてサワラの利用が全国的に見てもめずらしく多く利用されていたことを指摘し、サワラの資源が豊富であったことから、古代の木材利用樹種圏のひとつに中部地方をサワラ圏と特徴づけた。石川条里遺跡ではサワラとヒノキは弥生時代中期から利用されており、古墳時代前期になるとヒノキよりサワラのほうが圧倒的に多く使用されていた（能城・鈴木 1997）。また天竜川右岸に位置する箕輪遺跡（三村・植田 2005）でも古墳時代後期以降や古代中世そして中世以降？の各時期の土木材は一貫してサワラが最も多く使われ続けていた。長野県内の中世の木製品樹種を通覧すると、サワラが多く次にヒノキが多い傾向にある（能城・鈴木 1997、長野県埋蔵文化財センター 2000a, 2000b, 2012、三村・植田 2005）。石川条里遺跡では平安時代と中世では曲げ物や折敷そして祭祀具に関してはサワラとヒノキの出土数は拮抗している。当遺跡でもサワラとヒノキが拮抗していたことは、宗教関連遺跡で祭祀具の出土が多いこと、ヒノキ材への価値観が益々高まってきた中世という時代を反映しているのかも知れない。

検出された樹種の中で池状遺構から出土した短冊状板 2 点（2 次 044、5 次 181）と板 10 点（2 次 003・005・006・025 ~ 028・034・102・103）がトウヒ属であった点が注目される。これらはすべて柁目取りで非常に薄い（0.1 ~ 0.5 cm）という共通点がある。003・005・006・102・103 は既報で木製品の項に図示されている（松本市教育委員会 2012）。その後 102 と 103 は接合することが判明し刀形に似る。003・005・006 も刀形の一部を連想させられる。長野市内の松原遺跡からは中世の実用品の刀子の柄にトウヒ属が使われていた（長野県埋蔵文化財センター 2000b）。また、石川条里遺跡からは平安時代のトウヒ属の齋串が出土している。祭祀具にトウヒ属が使われる事例があることから、板と分類された 2 次 003・005・006・102・103 は祭祀具刀形でトウヒ属が選択使用されたものと思われる。なお 1 次調査の刀形 2 点（松本市教育委員会 2011）はサワラと針葉樹である（バリノ・サーヴェイ株式会社 2017）。2 次 025 ~ 028 は、「曲物の側板か」と見られていて、幅 2.5 ~ 3.7 cm で長さは 4.4 ~ 8 cm のいずれも端整な長方形である。長野市の前山田遺跡では中世～近世のトウヒ属の曲物が出土している（植田 1999）。トウヒ属も曲物に利用されていたようであるが、当遺跡の 2 次 025 ~ 028 は曲物側板の一部の破片としては、非常にまっすぐに整った長方形の形状である点に疑問が残る。材組織からトウヒ属の種類は特定できないが、花粉分析からも僅かながらトウヒ属が検出されている（バリノ・サーヴェイ株式会社 2017）ので、低地帯から山地帯に生育するハリモミ *Plea polita* が利用されていた可能性が考えられる。

石積遺構 1528（4 次）は、堆積土から多量の寄生虫卵が検出され便所や排泄物に関わる遺構の可能性が指摘されている（辻 2015）。この遺構では齋串状木製品は少なく、短冊状板が最も多く次に芯持ち丸木が多かった。齋串状木製品が最も多い池状遺構とは出土器種の構成に違いがあるのは、石積遺構 1528 と池状遺構は遺構の性格が異なることを反映しているとも思われる。この遺構からはやや例れた精巧な加工がほどこされていた不明 4 点（4 次 009・019・020・021）と端材 1 点（4 次 010）と削屑 1 点（4 次 036）がありすべてモクレン属であった。いずれも厚みは 1 cm 以下で、柁目または追柁目であり、同一個体の破片の

可能性が指摘されていたが、樹種も一致した。モクレン属の材は均一で仕上がりの肌目も綺麗で加工容易な材であることから木工によく利用されるので、これらは調度品や容器などの破片であったかも知れない。

木炭は針葉樹の種類数と出土数は少なく大半は落葉広葉樹であり、その点が木製品との大きな違いであった。また、多くの木炭に切削痕や加工形成の跡がみられ、人の手が関わっていた。

特にクリ・コナラ節・クマシデ節は複数の試料から出土しており、燃料材としての利用も良く知られている樹種であり、平場の炉跡や土坑周辺からは内耳鍋や埴場なども出土している。既報からもコナラ節・サクラ属・カエデ属・クマシデ節・ブナ属・エゴノキ属・マツ属複雑管束亜属・モミ属が炭化材から出土している(バリノ・サーヴェイ株式会社 2017、(株)加速器分析研究所 2017、小林 2018)。様々な種類の落葉広葉樹材の利用は、木炭以外にも5次調査木製品の芯持ち丸木も同様に複数種類が利用されていたことから、遺跡周辺地には種類数の豊富な落葉広葉樹林が生育していたと思われる。

木炭の樹種の出土傾向は、平場造成過程の堆積層に包含された木炭と平場の遺構や地点から出土した木炭ではやや違いが見られた。造成前地山から出土した立木はヤナギ属であり、地下水位の高い土地環境と樹種の生育適地が一致する。基盤土層炭層(試料 No.29)の洗い出された木炭は直径 0.5cm ほどの小枝や小さな破片が大量にあり、これらは意図的に混ぜ込まれたものと考えられている。この層に含まれていた種類数は落葉広葉樹 10 種類であり、他の試料に比べても非常に多くの樹種を含んでいた。クリが最も多く次にコナラ節が多く、アワブキ・ハギ属・サクラ属・ナナカマド属・ブナ属・ウツギ属などもこの層に特徴的であった。また平場造成土からはモモ核やオニグルミ核も出土した。多種類の落葉広葉樹の小枝からなる木炭やモモ核やオニグルミ核が平場造成土に包含されていたのには、何らかの意味付けがあると思われる。なおアカマツも 7 点のうち 5 点が基盤造成土と平場南側斜面炭層からの出土であり、形状も大きなものが多い。

一方、平場の遺構や地点から出土した木炭は、同じくクリ・コナラ節が多く、カエデ属・クマシデ節・クマノミズキ類は硬質で消し炭のようであり、どちらも燃料材に適した樹種であった。

## 6 まとめ

出土木製品の大多数は齋串状木製品と短冊状板であり、いずれもサワラとヒノキの 2 種でほぼ占められていた。サワラがやや多いが、サワラとヒノキの比率はほぼ拮抗していた。

池状遺構からは齋串状木製品と短冊状板の出土がほとんどであったが、石積遺構 1528 からは齋串状木製品は少なく短冊状板と芯持ち丸木が主な出土器種であった。出土器種の構成の違いは、遺構の性格の違いを反映している可能性がある。

池状遺構からはトウヒ属の短冊状板 2 点と板 10 点が出土した。このうち板 5 点は祭祀具刀形の可能性があると思える。当遺跡から出土している刀形 2 点はサワラと針葉樹であるが、トウヒ属も選択利用されていたと思われる。アカマツは木製品と木炭から共に出土が目立った。アカマツと特定の器種との関連は見られないが、身近な用材として利用されていたと思われる。また、木炭と芯持ち丸木からは多くの種類の落葉広葉樹が出土した。これらも身近な木材として利用されており、遺跡周辺には種類数の豊富な落葉広葉樹林が成立していたと思われる。

平場造成過程の基盤造成土(試料 No.29)は、地山上の黒褐色ないし灰褐色を呈するシルトに意図的に混入された大量の細かい炭で、多くが直径 0.5cm 前後の芯持ち丸木(細い枝部)の破片であった。クリが最も多く、10 種類の落葉広葉樹が検出された。ここからの出土樹種数は、ほかの試料より極めて多い。平場造成に関わるほかの試料からはモモ核とオニグルミ核が出土した。木炭の投入は単なる除湿効果の目的だけではなくなんらかの意味付けもあったと思われる。

## 【引用文献】

- (株) 加速器分析研究所 2017 「殿村遺跡出土炭化材の樹種」『殿村遺跡—第8次発掘調査報告書・虚空蔵山城跡第2・3・4次発掘調査報告書—』pp.71-75.
- 小林克也 2018 「殿村遺跡の炭化材樹種同定」『殿村遺跡—第7次発掘調査報告書—』 pp.107-108
- 松本市教育委員会 2011 「木製品」『殿村遺跡—第1次発掘調査概報—』 pp.45-46. 写真図版10
- 松本市教育委員会 2012 『殿村遺跡—第2次発掘調査報告書—』
- 松本市教育委員会 2014 『殿村遺跡—第4次発掘調査報告書—』
- 松本市教育委員会 2015 『殿村遺跡—第5次発掘調査報告書—』
- 三村昌史・植田弥生 2005 「箕輪遺跡における木材利用と木材資源」『長野県埋蔵文化財発掘調査報告書 71 国道 153 号 伊那・松島バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書 —箕輪町内— 箕輪遺跡』 pp.368-387
- 長野県埋蔵文化財センター 2000a 「木製品」『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 50 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 27 —更埴市内その6— 更埴条里遺跡・屋代遺跡群 (含む大境遺跡・窟河原遺跡)—古代2・中世・近世編—本文』 pp.164-167
- 長野県埋蔵文化財センター 2000b 「木製品」『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 53 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 6 —長野市内 その4— 松原遺跡 古代・中世 本文編』 pp.372-374
- 長野県埋蔵文化財センター 2012 「木製品の樹種同定」『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 92 一般国道 18 号 (坂城更埴バイパス) 埋蔵文化財発掘調査報告書 3 —千曲市内その3— 東條遺跡 ほか 本文編』 pp. 230-262
- 能城修一・鈴木三男 1997 「石川条里遺跡出土木製品の樹種」『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 26 中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 15 —長野市内その3— 石川条里遺跡 第3分冊』 pp. 68-138
- バリノ・サーヴェイ株式会社 2017 「附編1 殿村遺跡1次A区採取試料ほかの自然科学分析」『附編2 殿村遺跡出土木製品の自然科学分析』『殿村遺跡—第7次発掘調査報告書—』
- 鈴木三男 2002 『日本人と木の文化』八坂書房 東京
- 辻 誠一郎 2015 「殿村遺跡とその時代—環境史から見た中世の景観—」『殿村遺跡とその時代IV—平成25年度調査報告会・講演会の記録—』 pp.15-28
- 植田弥生 1999 「前山田遺跡出土木製品の樹種同定」『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 43 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 9 —長野市内 その7— 小滝遺跡 北之脇遺跡 前山田遺跡』 pp.527-537.

## 謝辞

切片作成は、松本市教育委員会文化財課の廣田早和子さん・丸山 恵さん・富岡享子さんほかの方々の多大な協力を得て達成することができました。改めて深く感謝申し上げます。木炭観察は(株)パレオ・ラボの電子顕微鏡を使わせて頂き、木製品と木炭の写真撮影の便宜も図って頂き感謝申し上げます。

第 17 表 殿村遺跡出土木製品と木炭の樹種と点数

樹種	学名	木製品	木炭
モミ属	マツ科 <i>Abies</i>		1
トウヒ属	マツ科 <i>Picea</i>	12	
アカマツ	マツ科 <i>o</i> Sieb. et Zucc.	12	7
ツガ属	マツ科 <i>Tsuga</i>	1	
サワラ	ヒノキ科 <i>Chamaecyparis pisifera</i> (Sieb. et Zucc.) Endl.	194	
ヒノキ	ヒノキ科 <i>Chamaecyparis obtusa</i> Endl.	193	3
ヒノキ属	ヒノキ科 <i>Chamaecyparis</i>		1
スギ	ヒノキ科 <i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	17	
ネズコ (クロベ)	ヒノキ科 <i>Thuja standishii</i> Carr.	2	
アスナロ	ヒノキ科 <i>Thujopsis dolabrata</i> sieb. et Zucc.	5	
ヒノキ科	ヒノキ科 Cupressaceae		1
モクレン属	モクレン科 <i>Magnolia</i>	7	
アワブキ	アワブキ科 <i>Meliosma myriantha</i> Sieb. et Zucc.		8
ヤナギ属	ヤナギ科 <i>Salix</i>	14	1
ハギ属	マメ科 <i>Lespedeza</i>	1	3
フジ属	マメ科 <i>v</i> (Willd.) DC	1	
サクラ属	バラ科 <i>Cerasus</i>		12
ナナカマド属	バラ科ナシ亜科 <i>Sorbus</i>	3	1
カマツカ	バラ科ナシ亜科 <i>Pourthiaea villosa</i> (Thunb.) Decaisne var. <i>laevis</i> (Thunb.) Staf.		2
ナシ亜科	バラ科ナシ亜科 Rosaceae subfam. Maloideae	1	
ケヤキ	ニレ科 <i>Zelkova serrata</i> (Thunb.) Makino	2	3
ヤマグワ	クワ科 <i>Morus australis</i> Poirlet	1	1
クリ	ブナ科 <i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	6	41
ブナ属	ブナ科 <i>Fagus</i>	5	5
コナラ属クヌギ節	ブナ科 <i>Quercus</i> subgen. <i>Quercus</i> sect. <i>Cerris</i>	1	
コナラ属コナラ節	ブナ科 <i>Quercus</i> subgen. <i>Quercus</i> sect. <i>Prinus</i>	2	17
カバノキ属	カバノキ科 <i>Betula</i>		1
クマシデ属クマシデ節	カバノキ科 <i>Carpinus</i> sect. <i>Distegocarpus</i>		7
アサダ	カバノキ科 <i>Ostrya japonica</i> Sarg.		1
オニグルミ	クルミ科 <i>Juglans mandshurica</i> Maxim. subsp. <i>sieboldiana</i> (Maxim.) Kitamura	2	
カエデ属	ムクロジ科 <i>Acer</i>	1	3
クマノミズキ類	ミズキ科 <i>Cornus cf. brachypoda</i> C.A. Meyer		1
ミズキ	ミズキ科 <i>Cornus controversa</i> Hemsl.		3
ウツギ属	アジサイ科 <i>Deutzia</i>		3
サワフタギ	ハイノキ科 <i>Symplocos coreana</i> (Lev.) Ohwi	1	
リョウブ	リョウブ科 <i>Clithra barvinervis</i> Sieb. et Zucc.	1	1
トネリコ属	モクセイ科 <i>Fraxinus</i>	1	1
広葉樹 A	broad-leaved tree A	2	
広葉樹 (環孔材)	broad-leaved tree (ring-porous wood)		1
		合計 488	129

第 18 表 殿付遺跡 2 次調査 木製品樹種同一覧

図例	地区	面	遺 積	整理番号	図種	手 法	樹種	寸法 (mm)			備考
								長・口径・底径	幅	厚・高	
1	2A1	3面	石橋前空間 (76 層)	002	下駄	肉材 (道杉目)	タリ	21.25	10.15	1.95	右方部遺跡下駄 踏の方向に口縁 欠陥有り 鉄釘付着 裏は片削りに残っている
20	2A1	3面	石橋前空間 (76 層)	003	板	板材 (板目)	トウヒ属 (7.23)	(2.83)		0.15	欠陥あり 4mm×5mm位の切り込み 木口を曲線的に加工
5	2A1	3面	石橋前空間 (76 層)	004	底板	板材 (板目)	ヒノキ (14.08)	(1.90)		0.25	側面あり 裏に付着物あり 歪み大
21	2A1	3面	石橋前空間 (76 層)	005	板	板材 (板目)	トウヒ属 (7.00)	(2.27)		0.10	欠陥あり 付着物あり 木口一本端を曲線的に加工
19	2A1	3面	石橋前空間 (76 層)	006	板	板材 (板目)	トウヒ属 (5.48)	(1.70)		0.14	欠陥あり 付着物あり 木口一本端を曲線的に加工
2	2A1	3面	石橋前空間 (76 層)	007	板	板材 (板目)	ヒノキ (11.10)	11.90		0.50	歪みあり 割れあり 付着物あり 中心に三角形の穴 歪みあり 木口切り落とし 左右の本端縁がささり 若干の鉄釘付着 片面若干の調整あり
4	2A1	3面	石橋前空間 (76 層)	008	短冊状板	板材 (板目)	サワラ	10.46	4.37	0.53	木口片方切り落とし 片方切り折り 木端に欠陥あり 両面共に割れ割かしが 調整痕は見えない
3	2A1	3面	石橋前空間 (76 層)	009	加厚状板	板材 (板目)	サワラ	7.10	2.20	0.40	加工痕顕著 片方欠陥
14	2A1	3面	石橋前空間 (76 層)	010	透申状木製品	肉材 (板目)	ネズコ (10.20)	0.68	0.60	0.60	加工痕顕著 片方欠陥
18	2A1	3面	石橋前空間 (76 層)	011	透申状木製品	肉材 (板目)	ヒノキ (11.07)	0.66	0.55	0.55	上方欠陥 加工面若干あり
2A1	3面	石橋前空間 (76 層)	012	透申状木製品	肉材 (側出)	ヒノキ (17.80)	0.60	0.70		0.60	片方欠陥 加工面あり 途中折れあり
9	2A1	3面	石橋前空間 (76 層)	013	透申状木製品	肉材 (板目)	サワラ (2.008)	0.50	0.55	0.55	歪みあり 木口からの周辺崩落 先端削れ状 歪みあり
13	2A1	3面	石橋前空間 (76 層)	014	透申状木製品	肉材 (板目)	ヒノキ (13.08)	0.75	0.65	0.65	上方欠陥 加工面あり 歪みあり
7	2A1	3面	石橋前空間 (76 層)	015	透申状木製品	肉材 (板目)	サワラ (12.20)	0.55	0.60	0.60	上方欠陥 加工面あり
8	2A1	3面	石橋前空間 (76 層)	016	透申状木製品	肉材 (板目)	ヒノキ (11.70)	0.55	0.65	0.65	上方欠陥 表面に等間隔で切込 3ヶ所 歪みあり
16	2A1	3面	石橋前空間 (76 層)	017	透申状木製品	肉材 (板目)	サワラ (6.50)	0.60	0.55	0.55	上下欠陥 加工面あり
2A1	3面	石橋前空間 (76 層)	018	透申状木製品		ヒノキ					
2A1	3面	石橋前空間 (76 層)	019	透申状木製品		ヒノキ	6.02	0.42	0.47	0.47	上下欠陥 断面四辺形
17	2A1	3面	石橋前空間 (76 層)	020	透申状木製品	肉材 (板目)	ヒノキ (6.18)	0.60	0.60	0.60	上下欠陥 上部木口に切込あり 鉄釘付着 歪みあり
2A1	3面	石橋前空間 (76 層)	021	透申状木製品	肉材 (板目)	ヒノキ	6.00	0.78	0.50	0.50	上方欠陥 加工面あり
2A1	3面	石橋前空間 (76 層)	022	透申状木製品	肉材 (板目)	ヒノキ	5.68	0.67	0.54	0.54	上下欠陥 断面六角形
2A1	3面	石橋前空間 (76 層)	023	透申状木製品	材材 (側出)	ヒノキ	6.55	0.40	0.35	0.35	上方欠陥 途中折れあり 欠陥大
2A1	3面	石橋前空間 (76 層)	024	透申状木製品	肉材 (板目)	ヒノキ	5.09	0.50	0.40	0.40	加工痕顕著 断面や変形した四辺形 上方欠陥 歪みあり
2A1	3面	石橋前空間 (76 層)	024-1	透申状木製品	肉材 (板目)	アスナロ	4.31	0.58	0.41	0.41	上下欠陥 断面歪みを伴った三角形
2A1	3面	石橋前空間 (76 層)	025	板	板材 (板目)	トウヒ属	8.00	3.50	0.15	0.15	左右欠陥 片面に裏に付着物 曲げ物の割れか 上記遺物と同一個体か
2A1	3面	石橋前空間 (76 層)	026	板	板材 (板目)	トウヒ属	3.90	3.00	0.15	0.15	左右欠陥 片面に裏に付着物 曲げ物の割れか 上記遺物と同一個体か
2A1	3面	石橋前空間 (76 層)	027	板	板材 (板目)	トウヒ属	4.40	3.70	0.15	0.15	左右欠陥 片面に裏に付着物 曲げ物の割れか 上記遺物と同一個体か
2A1	3面	石橋前空間 (76 層)	028	板	板材 (板目)	トウヒ属	6.65	2.50	0.15	0.15	左右欠陥 曲げ物の割れか? 上記3点と同一個体か
2A1	3面	石橋前空間 (76 層)	029	板	板材 (板目)	サワラ	14.40	3.32	0.43	0.43	上下欠陥 片木端欠陥 片面若干の調整 片面削り割かし
2A1	3面	石橋前空間 (76 層)	030	板	板材 (道杉目)	サワラ	16.40	5.55	0.74	0.74	片方の木口欠陥 もう一方の木口は工具で溝面に切断か 片面削り割かし片面は調整あり
2A1	3面	石橋前空間 (76 層)	031	板	板材 (板目)	ヒノキ	15.45	5.40	0.55	0.55	片方の木口欠陥 片方の木口だけ削れ 片面調整あり 片面削り割かし 厚さは一定ではないと片側に厚い
2A1	3面	石橋前空間 (76 層)	032	板	板材 (板目)	ヒノキ	18.30	3.80	0.90	0.90	両木口欠陥 両面削り割かし
2A1	3面	石橋前空間 (76 層)	033	板	板材 (板目)	サワラ	12.50	5.60	0.90	0.90	両面削り割かし 片面削り割かし 木口割しは工具で切り落とし
2A1	3面	石橋前空間 (76 層)	034	板	板材 (板目)	トウヒ属	7.30	3.90	0.19	0.19	片方欠陥 付着物あり 歪み大
2A1	3面	石橋前空間 (76 層)	035	板	板材 (板目)	ヒノキ	12.55	3.25	0.40	0.40	上下欠陥 両面削り割かし 木端片方厚く片方が厚い
2A1	3面	石橋前空間 (76 層)	036	短冊状板	板材 (板目)	サワラ	10.55	3.60	0.48	0.48	上端切り折り 片面調整有り 片面削り割かし 下方と右木端欠陥
2A1	3面	石橋前空間 (76 層)	037	短冊状板	板材 (板目)	サワラ	20.30	1.65	0.32	0.32	上下欠陥 木端側欠陥 両面削り割かし
2A1	3面	石橋前空間 (76 層)	038	短冊状板	板材 (板目)	サワラ	8.25	1.16	0.50	0.50	上下欠陥 左右の木端は欠陥か? 表面は少し残っている 付着物あり
2A1	3面	石橋前空間 (76 層)	039	短冊状板	板材 (板目)	サワラ	11.77	1.73	0.49	0.49	片方やや斜に欠陥 片方は肉厚に異なる 木端は片方生き 片方欠陥 歪みあり
2A1	3面	石橋前空間 (76 層)	040	短冊状板	板材 (板目)	ヒノキ	11.00	1.88	0.34	0.34	木口切り落とし 下欠陥
2A1	3面	石橋前空間 (76 層)	041	短冊状板	板材 (板目)	サワラ	10.40	1.88	0.49	0.49	上下欠陥 両面削り割かし
2A1	3面	石橋前空間 (76 層)	042	短冊状板	板材 (板目)	サワラ	7.60	1.98	0.50	0.50	片方の木口欠陥 片方の木口は工具で切り振り
2A1	3面	石橋前空間 (76 層)	043	短冊状板	板材 (板目)	サワラ	13.15	1.37	0.44	0.44	上下欠陥 木端片方欠陥
2A1	3面	石橋前空間 (76 層)	044	短冊状板	板材 (板目)	トウヒ属	5.00	2.24	0.10	0.10	幅小さな破片で型型を認めない
2A1	3面	石橋前空間 (76 層)	045	肉材	肉材 (板目)	サワラ	9.20	2.25	1.76	1.76	両木口側破さ 付着物あり 物に調整など見られない
2A1	3面	石橋前空間 (76 層)	046	肉材	肉材 (道杉目)	ヒノキ	13.55	1.47	0.92	0.92	片方欠陥 片木端欠陥 片面削り割かし欠陥あり 片面工具で削り割しはそのまま
2A1	3面	石橋前空間 (76 層)	047	肉材	肉材 (板目)	オニグルミ	6.55	1.90	1.54	1.54	両面削り割かし
2A1	3面	石橋前空間 (76 層)	048	肉材	肉材 (板目)	ヒノキ	11.20	2.40	2.18	2.18	全面削り割かしのた加工痕などは不明
2A1	3面	石橋前空間 (76 層)	049	肉材	肉材 (板目)	サワラ	22.40	1.85	1.30	1.30	片方の木端生き 残り欠陥 片面欠陥の無い部分に未処理残存か?
2A1	3面	石橋前空間 (76 層)	050	端材	肉材 (ミカン割り)	ヒノキ	4.50	3.50	3.10	3.10	片方の木口調整さ 片方欠陥 木端は歪みまたはノミで削り

















第21表 殿村遺跡2次・5次調査 池状遺構(石積前空間)出土木製品とその樹種

		遺構										池状遺構												
		2次調査：石積前空間(76層)					5次調査：3面新段階堆積層(39層, 35・39層)					*1, *2, *3: 疑問符の付いた試料も含めて集計												
樹種 / 器種	遺構	短冊		板		削屑		*1 削屑		*2		*3		不明		不明								
		短冊	短冊	板	板	削屑	削屑	端材	端材	底版	折敷	甲板	甲板	杭?	杭?	不明	不明							
		製品	製品	製品	製品	製品	製品	製品	製品	製品	製品	製品	製品	製品	製品	製品	製品							
トウヒ属		1	10			1																		
アカマツ								3	1					2	2									
ツカ属			1																					
サワラ		13	9	3	2	2	32	2	8	2	2	1	1	1										
ヒノキ		22	2	4	6	9	1	2	46	1	2	46	1	2	1									
スギ		1					1																	
ネズコ		2					2							2	1									
アスナロ		1		1	2		4																	
モクレン属							0								1									
ヤナギ属				2			2			3	2				2									
ハギ属							0									4	11							
ナシ亜科							0									1	1							
ケヤキ							0							2			1							
ヤマダマ				1			1										2							
ク							1										0							
ク						1	1										0							
ブナ属							0							1		2	4							
コナラ属							0			2	1			1	1		5							
クスギ節							0				1					1	2							
クスギ節							1										0							
オニグルミ							1										0							
カエデ属							0									1	1							
リョウブ							0										1							
広葉樹A							0									2	1							
計		39	12	17	11	18	1	1	5	104	164	1	103	2	26	9	5	4	1	3	16	1	13	348

第22表 殿村遺跡5次調査 池状遺構(石積前空間)の地点ごとの出土器種

\*1, \*2, \*3: 疑問符の付いた試料も含めて集計

出土地点	齋串状木製品	鳥形	短冊状板	板	*1 端材	削屑	*2 折敷 底板	*3 円板	部材	杭?	不明 (板材)	不明 (棒材)	不明 (芯持 丸木)	合計
西区	32		35		6	1	1	1	1		3			80
西区 NE	26		19		7	1	1	1			4		3	62
西区 NW	32		23	2	9	1	1			1			7	76
西区 ST1	73		24		4		2	2		1	5	1	3	115
西区 ST3	1	1	2			6				1	4			15
合計	164	1	103	2	26	9	5	4	1	3	16	1	13	348

第23表 殿村遺跡4次調査 石積遺構1528 出土木製品とその樹種

遺構 4次調査: 石積遺構 1528

樹種 / 器種	齋串状木製品	馬形	短冊状板	端材	削屑	桶底	部材	不明 (板材・ 角材)	不明 (芯持 丸木)	合計
針葉樹	2		6	1						9
スギ	2	1	3	1	1		1	2		11
モクレン属			2		1	1			4	6
落葉										
フジ属										1
ナナカマド属										1
クリ										3
サワフタギ										1
トネリコ属							1			1
合計	4	1	11	3	2	1	1	6	7	36

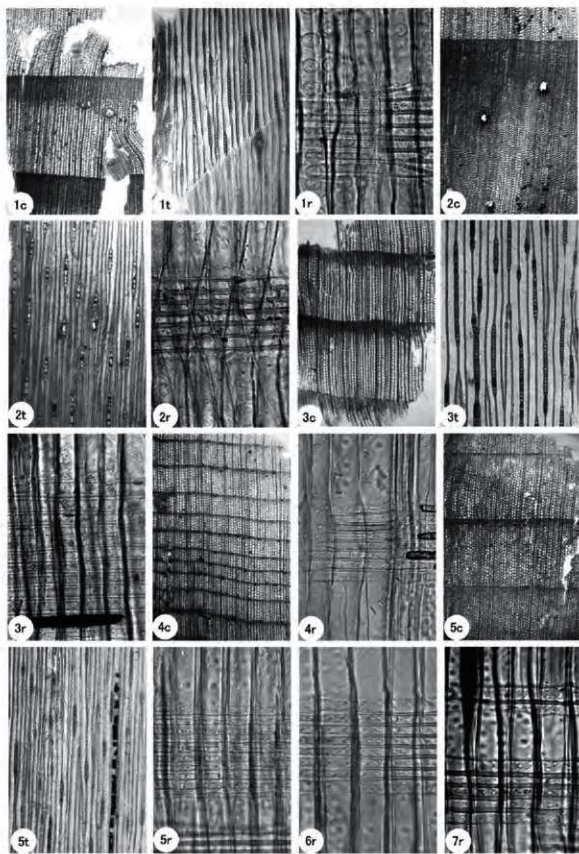
第24表 殿村遺跡出土炭化材(未炭化や一部未炭化のものを含む) 樹種同一一覧

試料 No.	枝番	調査次 ・ 調査区	面	遺構	樹種	放射径 cm	接線径 cm	軸長 cm	包含 年輪数	加工 痕	形状・備考
1				A区北 殿村1次 北東部1面溝	クリ	5.0	2.0	3.0	3		薄い破片
2	-1	1A	2	焼土(中) 368	アカマツ	0.5	1.2	2.0	6		芯部含む小破片や小径材の破片
	-2				クリ	Φ 2.0		1.7	7		破片複数, 芯部破片もあり
	-3				ヤマグワ	0.7	0.5	1.2	3		芯部破片
3		1A	2	焼土(中) 599	カエデ属	2.1	2.2	2.0	33		破片, 堅質
4		1A		礎石建物13(礎石 774廻り方内)	クマシデ属クマシデ節	2.5	5.2	3.0	18	○	推定直径5.5cm, 丸木一部破片, 堅質, 片面切削痕
5		1A	2	礎石558廻り方内	クマシデ属クマシデ節	1.5	2.5	3.7	24		推定直径4.0cm, 丸木一部破片, 堅質, 樹皮付き
6	-1	1A	4	石列4周辺焼土面	ケヤキ	3.0	5.0	5.5	16		推定直径6.0cm, 丸木一部破片, 堅質, 樹皮付き
	-2				クマノミズキ類	3.0	3.7	5.0	6		薄片, 堅質
7	-1	1A	4	石列4周辺焼土面	ケヤキ	1.4	3.0	4.5	8		推定直径4.0~5.0cmの破片, 芯取り扁平破片
	-2				ケヤキ	1.6	1.2	2.9	9		丸木の一部破片
8		6A2		土坑 1692	ヒノキ	3.1	2.6	2.9	37	○	芯部近くを含む作り出し丸木の破片?, 加工材?
9	-1	6A2		土坑 1693	ヒノキ	2.5	3.0	3.2	16		破片
	-2				クリ	—	—	—	—		小破片複数
	-3				クマシデ属クマシデ節	4.7	1.0	2.5	24+		破片, 堅質
	-4				ヒノキ科(保存悪い)	0.4	2.0	2.5	7		薄片
	-5				クリ	0.9	2.4	2.3	5		薄片, 節部
	-6				クリ	1.0	1.5	2.0	2		芯部に近い薄片
	-7				コナラ属コナラ節	Φ 1.3		1.3	7		芯持ち丸木
	-8				クマシデ属クマシデ節	2.0	2.0	1.0	11		破片



試料 No.	枝 番	調査次 ・ 調査区	面	造構	樹種	放射径 cm	投線径 cm	軸長 cm	包含 年輪数	加工 前	形状・備考
10	-1	1A	3	池状造構堆積上 (木器包含層)	コナラ属コナラ節	2.0	1.2	6.0	14		破片
					カエデ属	1.6	1.2	3.0	15		破片
					コナラ属コナラ節	4.2	1.6	5.6	15		みかん割り状の破片、年輪幅1~4mm
11	1A	2	池状造構堆積上 (木器層より上の層)	カバノキ属	1.3	3.2	4.5	18		破片	
12	-1	1A	1~2	平場南側斜面の現 包含層	アカマツ	1.5	1.5	3.8	4		○ 芯作り出し丸棒状、一部生成け
					コナラ属コナラ節	1.0	0.5	5.0	4		薄破片
					オニグルミ 核	—	—	—	—		半割れ、外側凸面も割れ有り
13	-1	2A	1~2	平場南部造成上	コナラ属コナラ節	2.8	1.6	6.0	31+		ぬか目材破片、2cmで31年輪有り
					カマツカ	Φ3.5		5.0	32+		芯持ち丸木、樹皮付き、最終年輪は樹材部 止まり
14	2A	1~2	平場南部造成上	カマツカ	2.0	2.1	8.8	12+		みかん割り状破片、樹皮付き	
15	2A	1~2	平場南部造成上	アワブキ	1.5	3.1	10.7	20		芯持ちみかん割り状破片、樹皮付き	
16	2A	1~2	平場南部造成上	コナラ属コナラ節	3.8	3.8	18	20+		芯持ちみかん割り状破片、樹皮付き、最終 年輪は樹材部止まり	
17	-1	2A	1~2	平場南部造成上	サクラ属	Φ4.5		4.0	15+		芯持ち丸木
					リョウブ	3.0	4.0	6.5	19+		芯持ちみかん割り状破片
18	-1	1A	4	平場造成上 池よ り先行 15C	クマシデ属クマシデ節	Φ2.8		4.2	14		芯持ち丸木、樹皮付き
					サクラ属	3.0	1.8	2.2	19+		みかん割り状破片
19	1A	4	平場造成上	モミ属	1.3	3.5	1.7	10		破片	
20	1A	仮1	平場造成上	ブナ属	2.0	2.2	2.6	40		みかん割り状破片	
21	-1	1A	4	平場造成上	サクラ属	1.2	2.0	1.8	7		みかん割り状破片
					アワブキ	2.0	3.2	3.2	9		みかん割り状破片
22	1A	4	基盤造成上	サクラ属	3.1	2.2	2.5	7		破片6、接合しない元は同一材か	
23	-1	1A	4	基盤造成上	ブナ属	2.3	2.3	3.1	10		みかん割り状破片
					アワブキ	2.1	1.4	4.3	25		みかん割り状破片
24	1A	4	基盤造成上	クマシデ属クマシデ節	Φ1.9		2.6	10		芯持ち丸木	
25	-1	1A	4	基盤造成上	アカマツ	4.0	6.5	17.0	20±		○ 薄皮、平炭、芯部あり、一部樹皮付き、内部 未炭化
					アカマツ	Φ2.2		8.5	—		○ 芯持ち丸木、斜め切削痕ありこの部分未炭 化
26	-1	1A	4	基盤造成上	クマシデ属クマシデ節	Φ2.5		13.0	—		芯持ち丸木、樹皮付き、乾燥している
					アカマツ	0.7~1.3	0.3~7.0	7.0	—		○ 爪楊枝型の加工木、片側先端が3面カット 一部炭化、一部樹皮付き
					広葉樹(環孔材)保存悪 い	0.8	0.4	6.5	7		扁平の細長い破片、表面に炭熟跡あり、
					ハナ属	Φ0.5		6.3	4		芯持ち丸木、樹皮付き、未炭化、肉端や表面 に少し炭化跡
27	-1	1A	4	基盤造成上	ブナ属	2.5	1.0	4.0	12		○ 薄片、斜め切削痕
					クリ	Φ1.2			1 (当年 核)		芯持ち丸木、樹皮付き
28	1A	4	基盤造成上	ナナカマド属	1.7	1.8	1.4	12		芯取りみかん割り状破片	
29	-1	1A	4	基盤造成上	ミズキ	0.3	0.6	1.0	4		
					ウツギ属	0.5	0.9	1.0	5		
					ウツギ属	Φ1.2		1.0	2		芯持ち丸木
					アサダ	0.5	1.0	0.8	8		
					ハナ属	Φ0.5		1.5	2		芯含む丸木の半分
					ミズキ	0.9	0.5	0.8	5		
					サクラ属	Φ0.5			7		芯持ち丸木、樹皮付き
					ハナ属	Φ0.5			8		芯持ち丸木
					ウツギ属	Φ0.5			3		芯持ち丸木
					サクラ属	0.5	0.7	0.8	4		
					ブナ属	Φ1.0			6		樹皮、最終年輪樹材部
					ブナ属	Φ0.5			3		芯持ち丸木
					アワブキ						小破片5
					コナラ属コナラ節						小破片7
					サクラ属						小破片6
					クリ						小破片34
					カエデ属						小破片1
30	1A	4	基盤造成上	アカマツ	2.2	5.0	28.5	10±		○ 板目から縦割り、外面は炭化、内方と片 端丸く切削痕?	
31	-1	1A	4	基盤造成上	オニグルミ核						半割れ3個、定形1個一部炭化し層面順 による穿孔跡
					モミ核						半割れ1個
32	8B1	B	地点		ミズキ	Φ1.1		5.5	3		芯持ち丸木

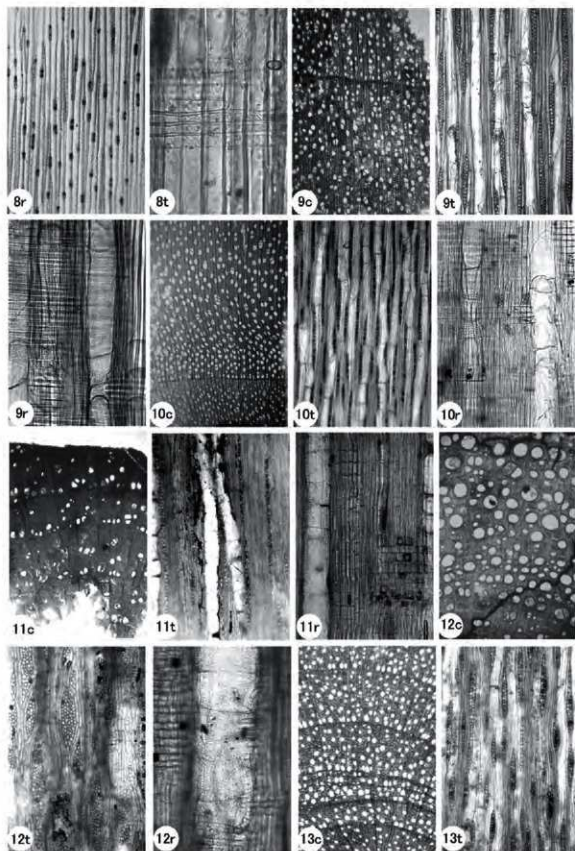




スケール：c: 横断面 1.0mm, t: 接線断面 0.4mm, r: 放射断面 0.1mm

1c・t・r: トウヒ属 (5A1-181), 2c・t・r: アカマツ (5A1-275), 3c・t・r: ツガ属 (2A1-056), 4c・r: サワラ (5A1-337), 5c・t・r: ヒノキ (5A1-336), 6r: スギ (2A1-086), 7r: ネズコ (2A1-095)

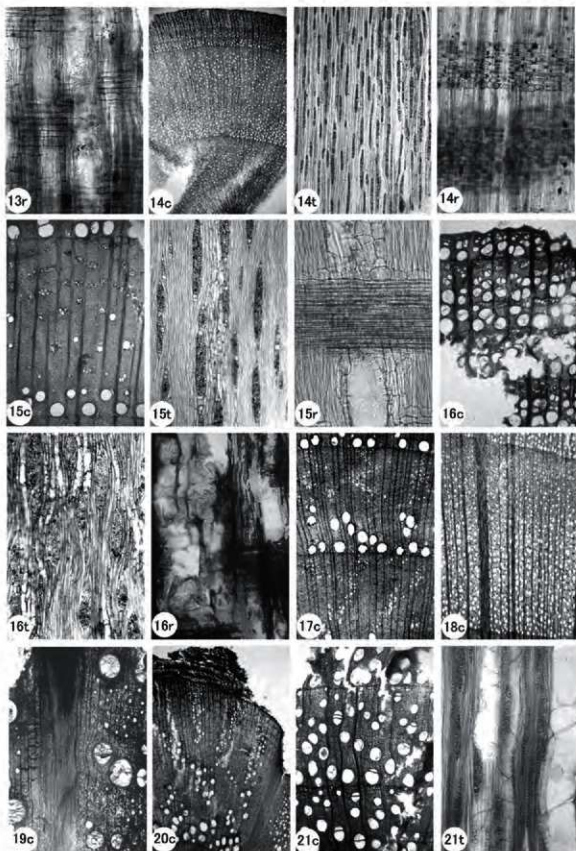
第 129 図 殿村遺跡木製品の材組織顕微鏡写真



スケール：c: 横断面 1.0mm, t: 接線断面 0.4mm, r: 放射断面 8r は 0.1mm, 9-13 は 0.2mm

8t:r: アスナロ (2A1-067) , 9c\*t:r: モクレン属 (4A1-010) , 10 c\*t:r: ヤナギ属 (5A1-242) , 11 c\*t:r: ハギ属 (5A1-301) , 12 c\*t:r: フジ属 (4A1-026) , 13 c\*t: ナナカマド属 (4A1-016)

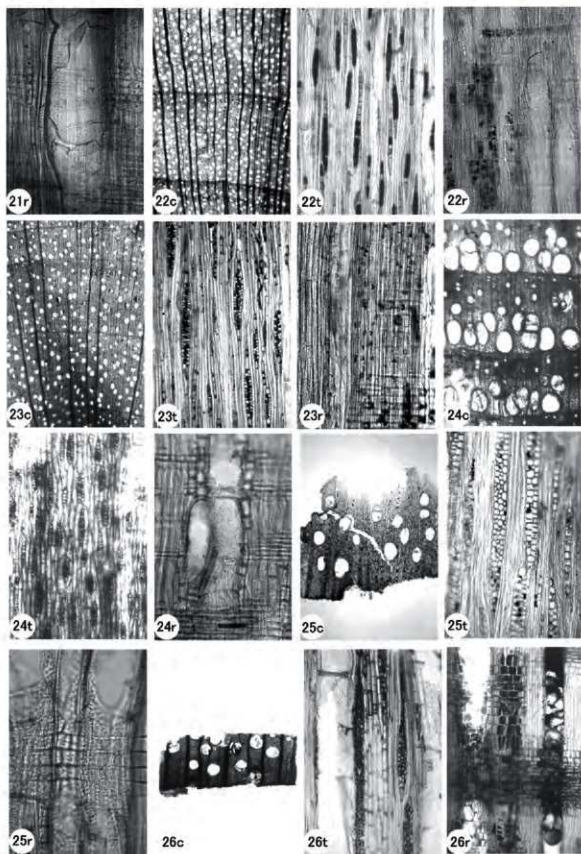
第 130 図 殿村遺跡木製品の材組織顕微鏡写真



スケール：c：横断面 1.0mm, t：接線断面 0.4mm, r：放射断面 0.2mm

13 r：ナナカマド属 (4A1-016), 14 c・t・r：ナシ亜科 (5A1-331), 15 c・t・r：ケヤキ (5A1-295), 16 c・t・r：ヤマグワ (2A1-061), 17 c：クリ (5A1-290), 18 c：ブナ属 (5A1-291), 19 c：クスギ節 (2A1-060), 20 c：コナラ節 (2A1-305), 21 c・t：オニグルミ (2A1-047)

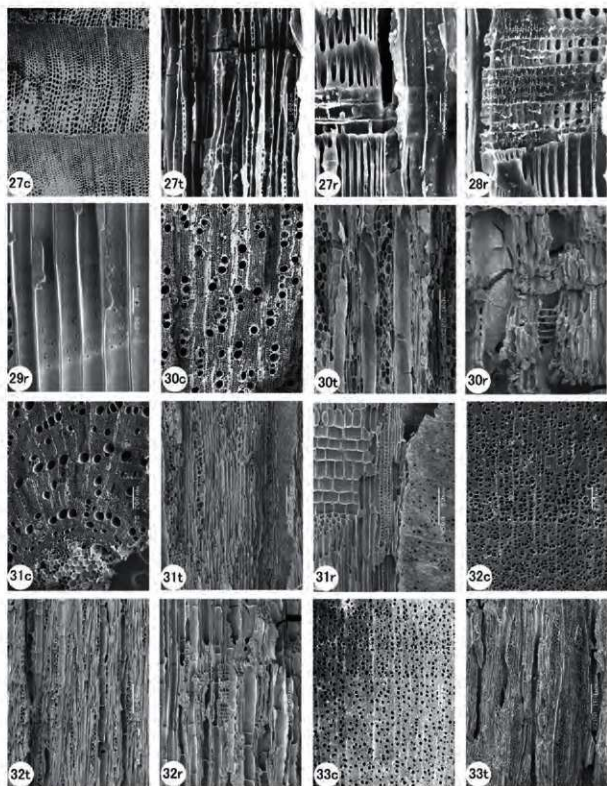
第 131 図 殿村遺跡木製品の材組織顕微鏡写真



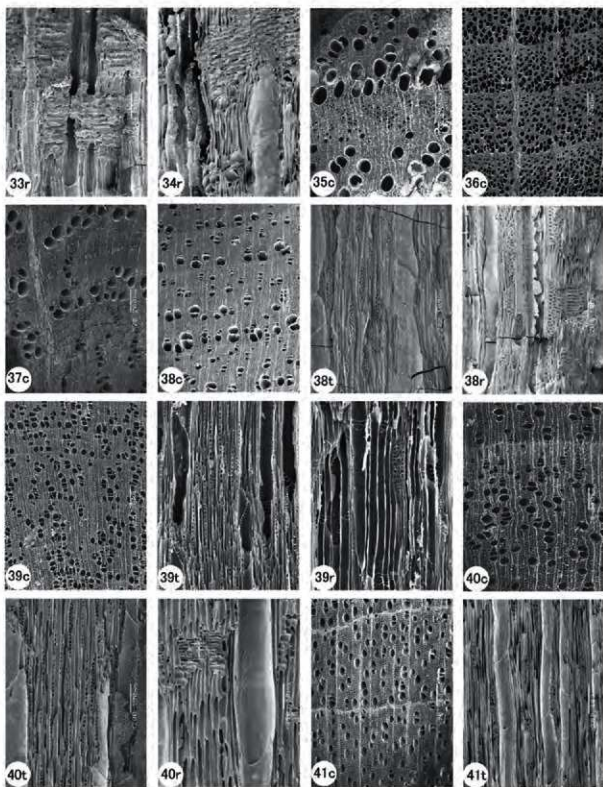
スケール：c:横断面 1.0mm, t:接線断面 0.4mm, r:放射断面 0.2mm

21 r:オニグルミ (2A1-047), 22 c・t・r:サワフタギ (4A1-017), 23 c・t・r:リョウブ (5A1-345),  
 24 c・t・r:トネリコ属 (4A1-022), 25 c・t・r:広葉樹 A (5A1-184), 26 c・t・r:広葉樹 A (5A1-319)

第 132 図 殿村遺跡木製品の材組織顕微鏡写真

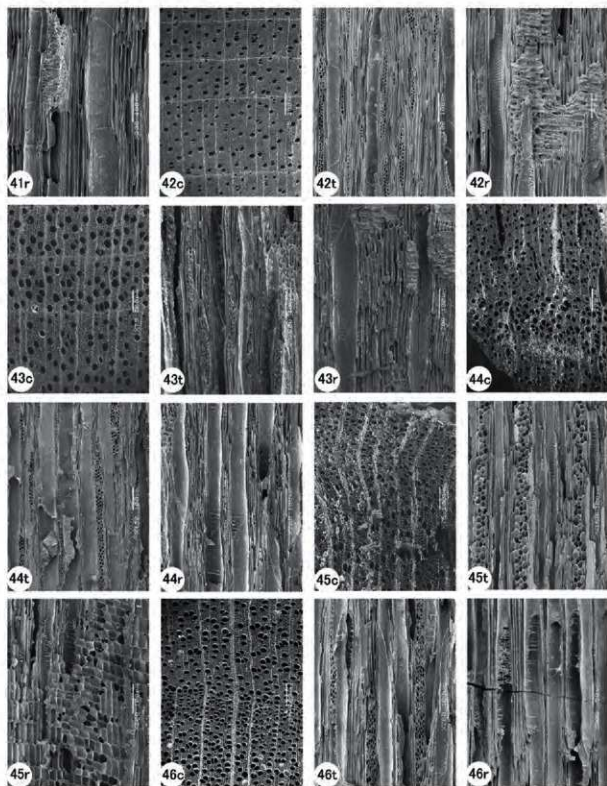


c: 横断面, t: 接線断面, r: 放射断面 27 c・t・r: モミ属 (No.19), 28r: アカマツ (No.34-3), 29r: ヒノキ (No.8), 30c・t・r: アワブキ (No.21-2), 31 c・t・r: ハギ属 (No.29-8), 32 c・t・r: サクラ属 No.21-1), 33 c・t: カマツカ (No.14)



c: 横断面, t: 接線断面, r: 放射断面 33r: カマツカ (No.14), 34 r: ケヤキ (No.6--1) 35 c: クリ (No. 2-2), 36 c: ブナ属 (No.20), 37c: コナラ属コナラ節 (No.9-7), 38 c・t・r: カバノキ属 (No.11), 39 c・t・r: クマシデ節 (No.24), 40 c・t・r: アサダ (No.29-4), 41 c・t: カエデ属 (5A1-302)





c: 横断面, t: 接線断面, r: 放射断面 41 r: カエデ属 (5A1-302), 42 c・t・r: カエデ属 (No.10-2), 43 c・t・r: クマノミズキ類 (No. 6-2), 44 c・t・r: ミズキ (No. 29-6), 45 c・t・r: ウツギ属 (No. 29-3), 46 c・t・r: リョウブ (No. 17-2)

## 第4章 虚空蔵山城跡岩屋社周辺の測量調査

### 第1節 虚空蔵山城跡及び周辺遺構の概要

本章では、平成30年度に実施した虚空蔵山城跡岩屋社周辺の測量調査の結果を報告する。この調査は、殿村遺跡と密接に関わる虚空蔵山を中心とした宗教空間を構成する遺跡の調査の一環として実施したもので、平成24・25・28年に実施した虚空蔵山城跡十二原沢上流平場群における寺院的遺構の調査に続き、岩屋社の所在する巨岩遺構を対象に行ったものである。

虚空蔵山は会田盆地北部を画する峰々の中で大洞山に次いで高い標高1,139mの独立峰で、地域の象徴的存在となっている。この山の自然景観や地形・地質については既に第2章で述べたが、その成因は海底における火山活動に由来する輝石安山岩の貫入岩が山頂部を構成し、山体の大部分は小川層の軟弱な砂岩が隆起とともに浸食を受け山頂部だけが残ったケスタ地形である。この山には戦国時代の城郭に伴う平場が随所に築かれていることが知られ、総称して虚空蔵山城跡と呼ばれているが、その特徴は山頂の峯ノ城、山腹の秋吉砦、中ノ陣城、南西の平場群等、決して大規模とはいえない複数の城塞から構成されている点にある。その一方で、秀麗な山容に加え、山頂付近の峻険な岩場、砂岩岩壁やそこに形成された洞窟、人や植物の侵入を許さない急傾斜面のガレ場、谷奥の湧水等、古来聖地として信仰の対象となっていた可能性が高く、その一端として十二原沢上流平場群には城郭に先行する室町時代の寺院とみられる宗教施設が存在していた。

現在に姿を伝える山中の人為的な遺構は戦国時代に城郭施設に取り入れられ、それ以前からの宗教施設に対して改修を行っていると推察される。これまでの調査に基づき尾根や谷に分布する遺構群を列記すると以下のとおりである(第139・140図、写真図版26・29)。

- |                           |                   |
|---------------------------|-------------------|
| ①山頂岩場群                    | ⑦両瀬沢上流の平場群(支群1~4) |
| ②岩屋社を含む砂岩岩壁群(岩1~8・長岩)     | ⑧秋吉砦              |
| ③ガレ沢(6カ所)                 | ⑨十二原沢上流の平場群       |
| ④湧水群(オゲ水・十二原沢・知見寺沢・うつつ清水) | ⑩中ノ陣城             |
| ⑤峯ノ城                      | ⑪南西尾根の平場群(砦)      |
| ⑥北尾根の平場群                  | ⑫知見寺沢上流の平場群       |

詳しくは虚空蔵山城跡2~4次報告を参照されたいが、このうち①~③の岩に関わる自然地形や④の湧水のような自然現象は信仰の対象や宗教活動の場だった可能性が高く、⑤~⑪は城郭遺構として築造または改修されているもの、その一方で⑦・⑧・⑨・⑫は宗教施設が前身とみられるものである。さらに、⑤峯ノ城は①の岩場群の上に後発的に造られ、②の岩壁は⑦~⑨のある尾根の最上部、標高1,000m付近に所在し両者は一体的関係にある、③のガレ沢は末端に沢の源流となる④湧水を伴い、湧水近くに⑨や⑫等の谷部に展開する平場群を伴うという構造を見ることができる。

こうした点から、前回報告では以下のような解釈を試みた。

- i: 城郭以前の宗教的活動の実態は不明だが、山頂の岩場や岩壁は磐座的な信仰の対象が後に修験の行場としての性格を帯びた可能性があり、虚空蔵菩薩を祀る岩屋社はそれを伝えるものと解される。
- ii: 岩壁から続く尾根上の平場群は城郭的な要素が希薄で、最上部の岩に至る宗教施設の可能性がある。
- iii: ガレ沢を背景とする湧水も信仰の対象たる存在であり、十二原沢上流平場群では室町時代に至って寺院的施設が形成された。

(竹原)

## 第2節 調査の方法と概要

今回の調査は虚空蔵山を構成する宗教施設のうち、磐座の遺構あるいは洞窟を利用した修験に係る修行窟等の行場遺構の可能性が高く、虚空蔵山の信仰の象徴的存在として現在も信仰が継続している岩屋社の巨岩遺構を対象に、その構造把握を目的に詳細な測量を実施した。

測量は岩塊（岩1）の露出部分全体と付属する平場等周辺の施設に対して行った。その方法は地上三次元スキャナーによる計測で、公共座標は平成23～25年の虚空蔵山城跡地形測量に際して設置した基準点から導いた。業務は（株）協同測量社に委託し、現地作業を平成30年10月上旬～12月中旬に行い、その後データ処理を進めた。最終的な完成・納品は平成31年3月下旬である。成果品の内容は縮尺50分の1の平面図、オルソ立面図、縦断面図、横断面図で、磨崖仏のみ縮尺10分の1とした。本報告にあたってはこれらの成果品を加工したうえで掲載した。（竹原）

## 第3節 岩1の概要

### 1 岩屋社の歴史的経過

岩1の洞窟に所在する岩屋社は天御中主命を祭神とする一方、会田の殿村遺跡の一角にある長安寺の奥院として共に虚空蔵菩薩を本尊とする神仏習合した姿を伝えることから、真言修験との関わりが深い宗教施設と考えられる。虚空蔵山の名は『高白斎記』天文22年（1553）の「会田虚空蔵山迄放火」が初見で、二次史料ではあるが中世末の会田を描いた『文禄3年会田郷往古之略図』には会田の背後に座す虚空蔵山と山頂直下に記された鳥居「鎮守虚空蔵尊」が象徴的に描かれている（第8図）。また、長安寺については天正9年（1581）『信濃国道者之御祝いくぼり日記』にその名前があり、寺伝では文永3年（1266）に会田氏関与により鎌倉建長寺の蘭溪道隆（大覚禪師）によって開山されたとされる（第7図下段）。一方で虚空蔵山との関わりは、戦国時代に会田氏が虚空蔵菩薩を祀ったことに始まるとも伝えるが、本来は虚空蔵菩薩を主尊とする真言密教系の寺院が前身として存在したと考えるべきであろう。

岩屋社は古くから両瀬村の産土社であった。昭和27年には神明社、山の神社、金山社、津島社、秋葉社、天神社が合祀された。かつて毎年1月13日には両瀬区の子供が泊まり込むおこもりが行われ、秋の例祭は現在も10月初旬の第1土日に行われている。また戦前までは雨乞いも行われていたようである。長安寺は檀家を持たず祈祷のみで法灯を繋いだ寺院として最近まで活動していた（最後の住職が没して無住となったのち平成25年に堂舎が解体された）。松本市立博物館が所蔵する重要有形民俗文化財「民間信仰資料コレクション」の一つである田の神様は長安寺で配られていたもので、牛王宝印の紙札で焼米を包み草の軸2本に巻き付けた斎串の一種である。春の八十八夜に水田の水口に立てたもので、斎串を用いた祭祀の一形態である。長安寺には牛王宝印の版木が2点残されるが、その起源が禪宗化以前に想定される真言修験寺院に由来するものなのか非常に興味深い。

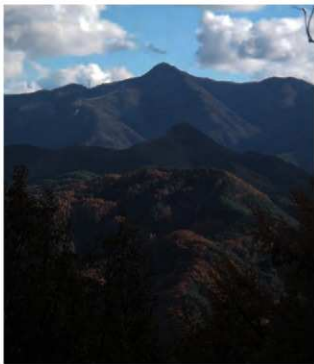
### 2 岩1の位置と周辺の景観（第139・140図、写真図版26～28）

岩1はオゲ水に隣接する鳥居を起点とする岩屋社直登参道の終点の東側にあり、さらに巨岩の東縁はガレ沢に接する。周囲はアカマツ等の樹林となるが傾斜が非常に厳しく最大で45°近くに達する。参道の西には岩2・3を頂点とする尾根筋があり、両瀬沢上流の平場群のうちの支群3の平場群が展開する。岩1はこの尾根からガレ沢に移行する地形変換点に位置するが、地形図を詳細に観察するとここには山頂付近から下る短い尾根が形成され、その先端が岩1となっていることが読み取れる。そして岩1から下は広大なガ

レ沢の一角となる。

現在、オゲ水前の標高 940m 地点を通過する林道から標高 1,059m の岩 1 までの行程は、ガレ沢の西縁にある直登参道が支群 3 の平場群を通過するつづら折れ道を利用することとなる。ガレ沢の縁辺部を直登する参道は非常に過酷な石階段の道で、現在ではオゲ水横の参道入口からしばらくの間を除き石階段も不明瞭になり道の位置すら捉えにくい部分がある（第 143 図）。

岩 1 から南の視界は開け、眼前に会田川と流域の村々を見下ろし、南西に会田の町並みや保福寺川、板場から反町の集落とその背後の丘陵地帯を経て松本盆地南部や北アルプス、鉢盛山、御嶽山等を見渡すことができる。また、対岸には召田集落と小笠原貞慶により会田氏が滅亡に追い込まれた矢久城（一期城）を真正面に見下ろし、その背後に続く傘山、さらに保福寺川の河谷を隔てた奥に座し会田盆地南部を画する戸谷峰を眺望し、奇しくも正三角形を描く 2 つの山の山の頂点が一直線に並ぶ光景を目にすることができる（第 136 図）。こうした相対する山々の見せる象徴的な景観は、岩屋社ひいては虚空蔵山を取り巻く宗教空間を考える上でひとつの意味を持つのではないかと考えさせる。



第 136 図 対岸に望む矢久城跡・傘山・戸谷峰

### 3 岩 1 の構造（第 138・141～146 図、写真図版 26～28）

社殿 現在の社殿は拝殿・本殿とその東に続く吹き抜けの舞台からなる。拝殿は間口 3 間・5.4m×奥行 2 間・3.6m の鉄板葺入母屋造の木造建物で、前面は洞窟の底面よりせり出し、舞台とともに懸造になっている。建物の南北軸線は N-6° -W である。出入口は西壁南隅の引き戸で、東壁にも舞台との引き戸出入口を設ける。南壁中央には 1 間幅のアルミサッシ窓があり木製雨戸が伴う。室内は板床で、奥壁中央に 1 間幅の本殿を設け格子戸で仕切る。その床面は拝殿から 45 cm 程の高さで奥行は目測 0.5 間程、これに合せて洞窟壁面も壁龕状に掘り窪めている可能性があるが直接確認できない。本殿の中央に置かれた厨子内には像高 48cm の木造虚空蔵菩薩坐像が安置される。拝殿の床面には祭壇の左脇に囲炉裏が設置される。舞台は 4.8m 幅で、奥行も最大 4.8m を測る。奥側は洞窟壁面に合せた輪郭線となる。南縁に設置された高欄以外には付属する施設は見られない。

岩の形状・規模 岩 1 は虚空蔵山の山体を構成する砂岩の岩盤が露出したもので、岩 2～5 とともに標高 1,050m 付近において東西に連なる。岩 1 はその東端にあり、岩 2 とは 12m 離れ隣り合う。地上に露出した岩塊全体の大きさは幅 31.5m×高さ 20m×奥行 16m で、上端の標高は 1,070m である。

洞窟 岩壁の側面には幅 11.8m×底面奥行最大約 4.5m×開口部最大高 4m の洞窟（岩屋）がある。内部空間は天井が東半で 80 cm 程低くなり壁面が内傾する断面形状を呈するが底面は比較的平坦である。壁面は社殿のある西半部で若干手が加えられているとみられる。天井部先端は底面より 2.5m 張り出す庇状となる。壁面は観察可能な舞台部分をみるとタフォニ（風化穴）であろうか、直径 5～15 cm の円孔が所々に見られるほか、人為的要因のものとして天井付近にかけて煤の付着や一部に墨書が残る。また砂岩の風化により表面の剥落も著しい。社殿背面の状況は分からないが、左側壁には長方形の壁龕が 2 段に深く掘り込まれ、その手前の壁面には水切りの細溝が刻まれる。現在の社殿が建築される以前、ここに小祠があったものとみ



第137図 会吉の岩殿山観音堂（上）と原山川窟の薬師（下）

られる。こうした小川層の巨岩に形成された洞窟の類例として、同じ会田川沿いに会吉の岩殿山観音堂や原山川窟の薬師（第137図）があり、いずれも密教系の信仰の対象として堂舎を伴っている。

洞窟左側の磨崖仏と参道 次に洞窟の外の状況を見る。まず洞窟の左（西）には、3軀の磨崖仏と石柱状の自然石を安置した1.2m四方の方形の浅い壁龕が刻まれる。その底面から磨崖仏の手前を通って社殿側に緩く下降する溝が掘られている。さらに手前には直登参道の終点と拝殿を結ぶ幅50～60cmの参道が岩を削って設けられる。磨崖仏は大日如来とみられる智拳印を結んだ坐像を右上方に配置し、左上方には聖観音とされる坐像を配する。この2軀の中央には合掌姿の地藏とされる立像が蓮華座の上に立つ。『四賀村の石造文化財』によれば、立像には「□□六月」「小岩井村 金井□ □□□日参供養 両瀬村施主□□」の銘文があると記されるが、実地調査では風化によりほとんど確認できなかった。これらの磨崖仏はいずれも舟形光背を伴い一見三尊仏のような配置だが、大きさや像容、尊格の点から見て別々のものである。まず、像高86cmの中央の立像は顔面や衣文の線刻が3軀の中では比較的明瞭で、袂はまっすぐ足元まで伸びる。蓮華座の彫りは浅く、敷茄子は厚く丸みを帯びた形態である。次に右上の坐像は、蓮華座を除く像高50cm、右手を上にした智拳印を結び、肉髻が明瞭に表される。衣文の線刻は明瞭だが繊細である。蓮華座の彫りも繊細で浅く、敷茄子は厚く丸みを持った形状をなすことから、立像と似た特徴といえる。しかし、蓮華を手にする左上の坐像は像高31cmで右上の坐像より小さく全体に彫りが大雑把である。肉髻も不明瞭で、顔面の表現や細かな衣文の線刻も見られない一方、蓮華座は輪郭の彫りが深く明瞭である。敷茄子は扁平で間延びした形を呈し、他の2軀とは異なる。それより下の台座は自然石を安置する壁龕を切って上から掘り込まれており、壁龕が先行することが分かる。3軀は直接的な切り合いがなく前後関係は不明だが、壁龕と立像の関係は壁龕の影響で立像の蓮華座が右に寄っている状況が観察される。従って、立像と右上の坐像が時期的に近く、壁龕は立像に先行し、壁龕に後行して左上の坐像が彫られたことだけは明らかである。その他、

磨崖仏周辺には後世に彫られた落書きや人物像もいくつか見られる。

洞窟右側の壁龕 岩1は洞窟の右手から屈曲して側面に移行する。側面の上方標高1,059.4mの位置には横長の壁龕があり、山の神社の小祠が鎮座する。壁龕は小洞窟と呼んだ方が適切で、自然形成とみられる。高所にあるため接近しての調査は不可能だったが、測量図からの計測では幅3.8m×高さ1.6m×奥行1.7mの規模を有する。

下段の岩壁 岩1は洞窟の下にもやや窪んだ壁面が続く。その高さは中央部で最大6.5mあり、東西約18mの広がりをもつ。壁面は洞窟底面がややオーバーハングし、最大で奥行1.3mの庇状となる。また壁面には大きいもので80cmに達するタフォニがいくつも見られる。さらに拝殿南東隅の直下と1間(1.8m)西側の壁面には18cm角の方形のほぞ穴がある。左右で高さが異なるが、壁面の手前には平場1があることから、このほぞ穴に屋根等の骨組みを当てた何らかの施設が平場上にあったと推察される。ちなみに壁面の下部は傾斜面となって広がり末端が平場1の最奥部となる。そこからほぞ穴までの高さは右が5.5m、左が5.1mである。壁面に間わるその他の施設としては、石積1がある。この遺構は壁面下端と高さを合わせてその左側にあり、長さ1.7m×高さ95cmの規模を有する。築石は周辺で調達できる長軸20～55cmの輝石安山岩の山石を長手に寝かして4～5段布積みし右端のみ縦置きする。

#### 4 岩1に伴う周辺の遺構(第138～146図、写真図版28・29)

直登参道終点のモミの木 オゲ水からの直登参道の終点の右脇にはモミの古木がある。幹径は1.5mあり、空洞化した内部は北側(岩屋社参道側)に開口し自然石の石碑が安置されている。落雷により幹の上部を既に失うが横枝は葉を付けている。周辺を見渡してもモミはこの1本だけであり、御神木としての性格を有していたと考えられる。

平場1～3と石積 下段の岩壁と石積1を背面とする平場1は、幅11.3m×奥行6mの半円形を呈し、輪郭は不明瞭である。全体に18°前後傾斜する平場前面の標高は1,048mである。西縁にはガレ沢に含まれる巨礫が横たわる。前面はあまり良好な状態で残存していないが、長さ12.3m×現存高50cm内外あり、輝石安山岩の角礫を3～4段積んでいる。平場2は石積1の東端直下であり、傾斜が強く非常に不明瞭である。幅4.5m×奥行1.3mを測る。平場3は平場1から6m下って南東5.5mにあり平場前面の標高1,041.2mを測る。幅10m×奥行4.7m、傾斜角18°前後の三日月形の平場である。右奥寄りに地山の礫があるが平場前面に石積は築かれない。

岩2・3と平場群 直登参道の終点はつづら折れ道(道3)との交点でやや広がった空間となる。ここから山頂に至る道3を進むと山側(北側)に石2・3がある。これらは今回対象としていないため詳細を明らかにできないが、岩1とは至近距離にあるため互いに関連すると考えられる。岩1・2のいずれも帯状の平場が伴い、これが両瀬沢上流の平場群の支群3の最上部となる。ここから林道直下の標高925m地点まで比高130mの間に39の平場が尾根上に連続し、後に畑としても利用され大型化している最南部の2面を除きいずれも小規模な三日月形を呈するものばかりである。しかし東のガレ沢に接していることから背面に石積を伴うものやガレ沢の礫群を壁面とするものがいくつか見られる。

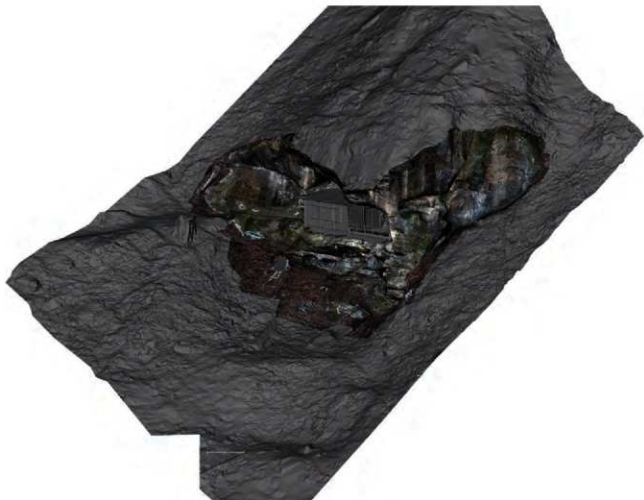
オゲ水・参道入口と周辺の平場群 現在直登参道の入口として鳥居のあるオゲ水周辺から標高984mまでの間、参道に沿って6面の平場がある。参道は平場の中央を貫いて上昇し、石階段も比較的良好に残る。鳥居のある最下段をはじめ3面の平場には前面石積が伴う。オゲ水はガレ沢末端の湧水で、この周辺の地名は「ウバガフトコロ」といわれている。現在は石仏が座す大石の脇に突き出た木桶から水を落とし、これが両瀬沢東沢の水源となっている。大石の背後は参道から大石の東側まで東西に3段連なる平場があり、その背後にある水源から石仏脇までは平場の境に沿って溝を設けて引水している。岩屋社の参道はここから

両瀬沢に沿って南下し、途中砂防ダムを経て両瀬集落に達する。ダムから上流側には道に沿って既に放棄された畑が平場遺構のように現在も残っている。両瀬集落内の現道も古い姿を伝えているとみられ、宝篋印塔や五輪塔等の中世石造物が道沿いの墓地に点々と残される。岩屋社と両瀬集落を結ぶこの道は、虚空蔵山と里を結ぶ古くからの信仰の軸線の一つとしてその姿をとどめているものと捉えられよう。(竹原)

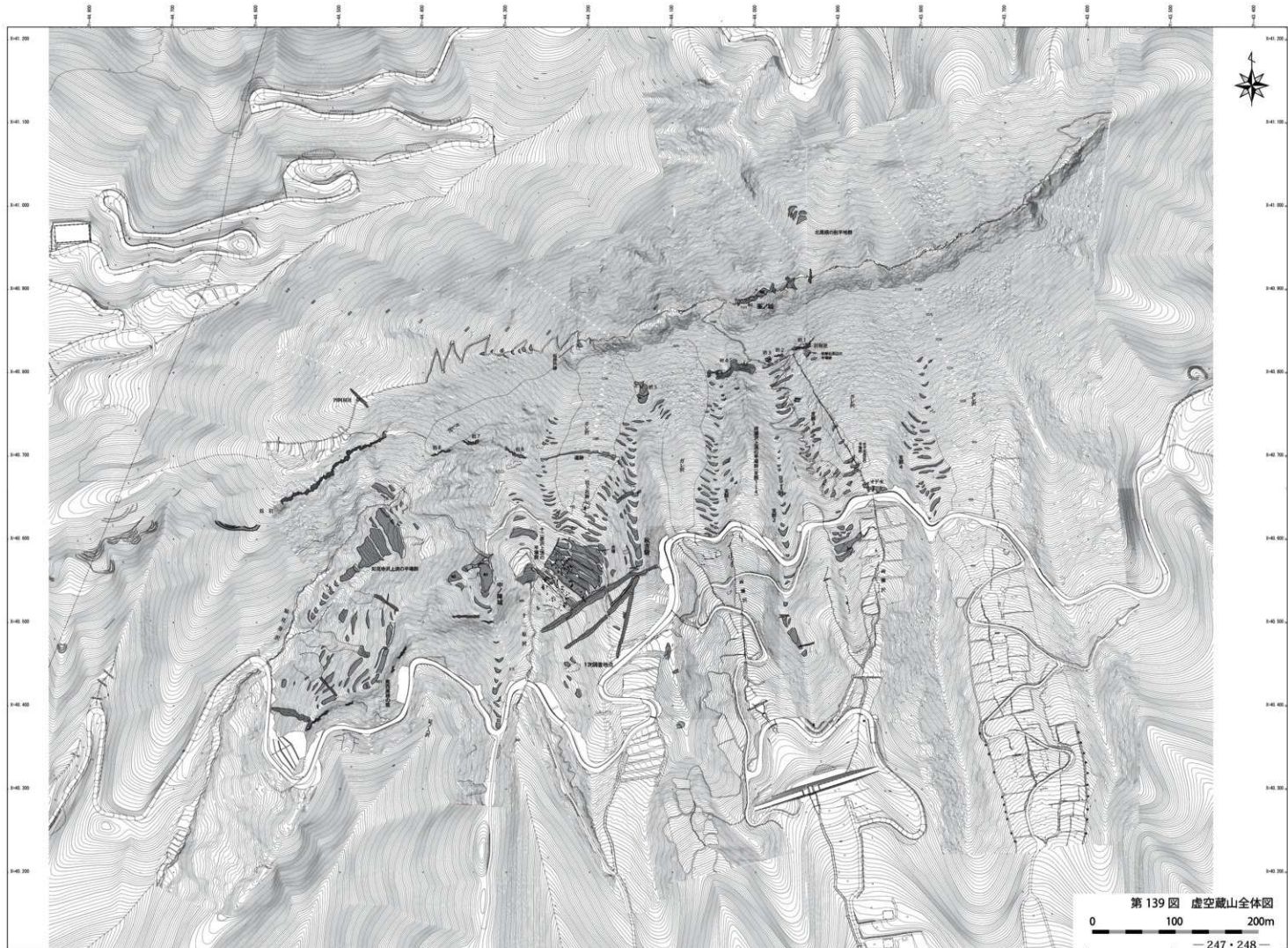
#### 第4節 調査のまとめ

今回の岩1の測量調査により、既報告の十二原沢上流平場群における室町時代に成立した寺院的施設に加え、虚空蔵山の宗教施設の構成要素の一つであり、虚空蔵山の信仰の根幹と言うべき岩屋社のある巨岩遺構について、詳細な記録を得ることができた。発掘調査は行っていないため考古学的所見はほとんど得られなかったものの、岩屋遺構の全体像を把握できた点で多大な成果を収めたといえよう。

これまでの調査の結果、岩壁あるいは洞窟を伴う巨岩遺構にはそこを頂点として下方に平場が複数併い、時として尾根や谷を登る参道に沿って延々と平場が連なることを確認した。これらの平場の中には非常に狭く形も整わないものもあって、すべてに建物が伴っていたとは考えにくいため、その性格については今後の解明課題である。しかし、従来虚空蔵山城を構成する城郭施設として捉えられてきたこれらの平場群は、秋吉砦や中ノ陣城を除き主郭と呼ぶべき中心的な平場を欠如し求心的構造をなさない。むしろ巨岩との関係から宗教施設がその根源にあった可能性が高く、十二原沢上流平場群と同様、宗教施設の後、戦国時代後半に至って城郭施設としての要素が加わったと捉える視点をもつことが妥当と考えたい。(竹原)



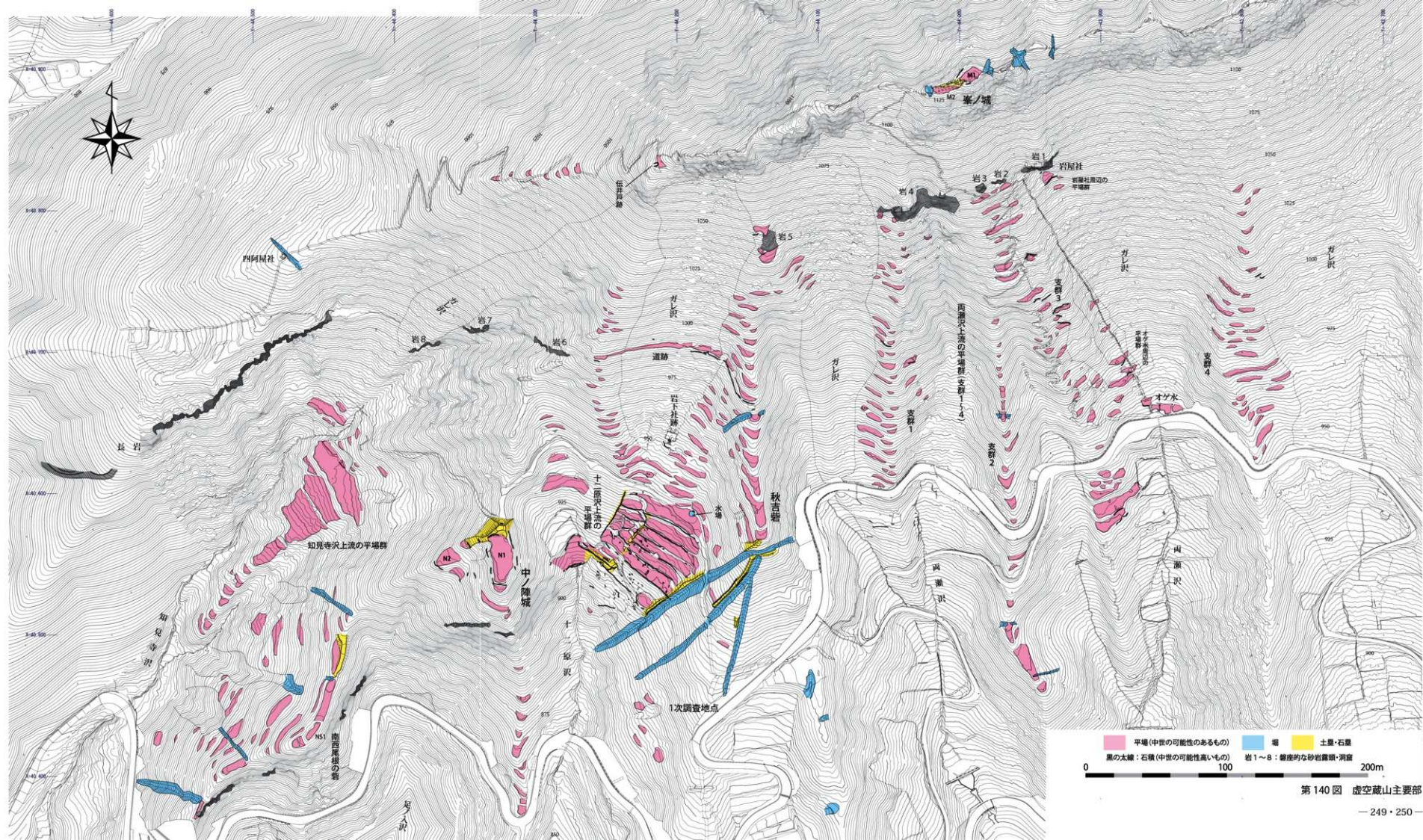
第138図 岩1(岩屋社)俯瞰図



第 139 图 虚空藏山全体图

0 100 200m





<span style="display:inline-block; width:15px; height:15px; background-color: #f080f0; border: 1px solid black;"></span> 平場 (中世の可能性のあるもの)	<span style="display:inline-block; width:15px; height:15px; background-color: #add8e6; border: 1px solid black;"></span> 堀	<span style="display:inline-block; width:15px; height:15px; background-color: #ffff00; border: 1px solid black;"></span> 土塁・石垣
<span style="display:inline-block; width:15px; height:15px; background-color: #000000; border: 1px solid black;"></span> 黒の太線：石積 (中世の可能性高いもの)	<span style="display:inline-block; width:15px; height:15px; background-color: #f080f0; border: 1px solid black;"></span> 岩 1～8：特徴的な砂岩露頭・洞窟	

0 100 200m

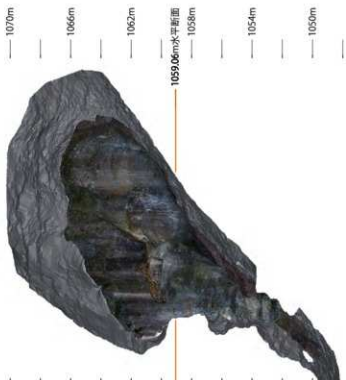
第 140 図 虚空蔵山主要部

立面A

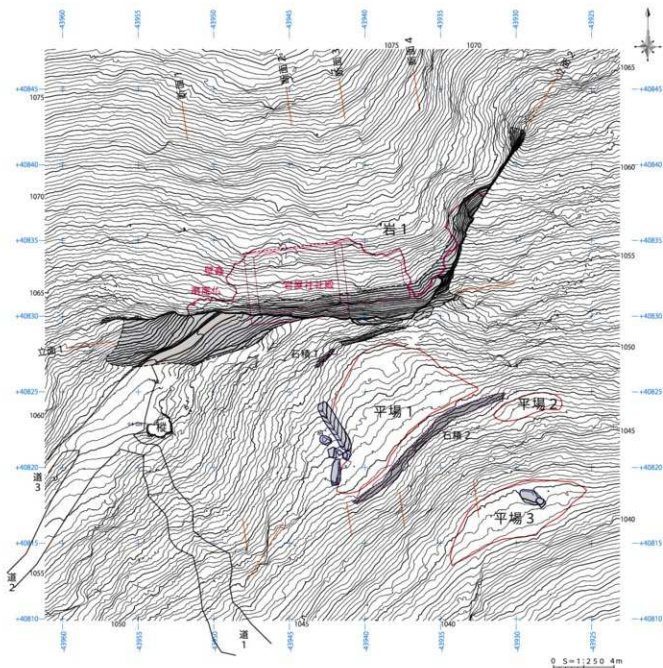
断面1  
断面2  
断面3  
断面4



立面B



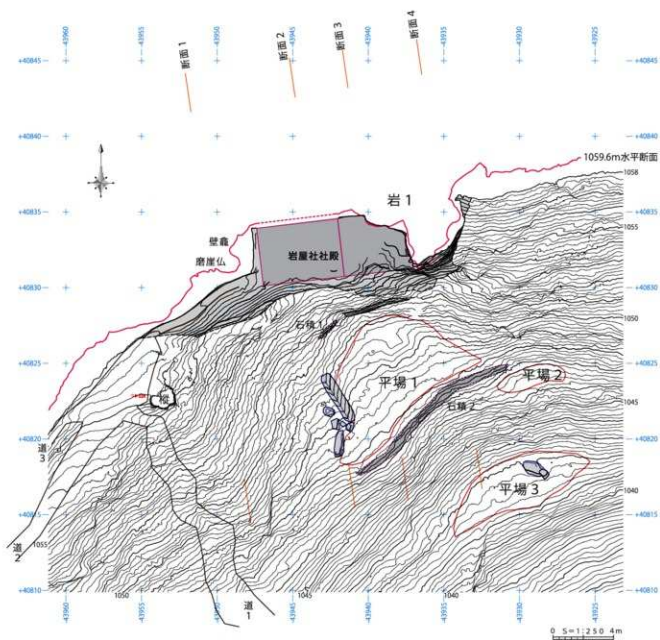
第141図 岩1 (岩屋社) 立面オルソ図・俯瞰図



第142図 岩1（岩屋社）平面測量図（1）

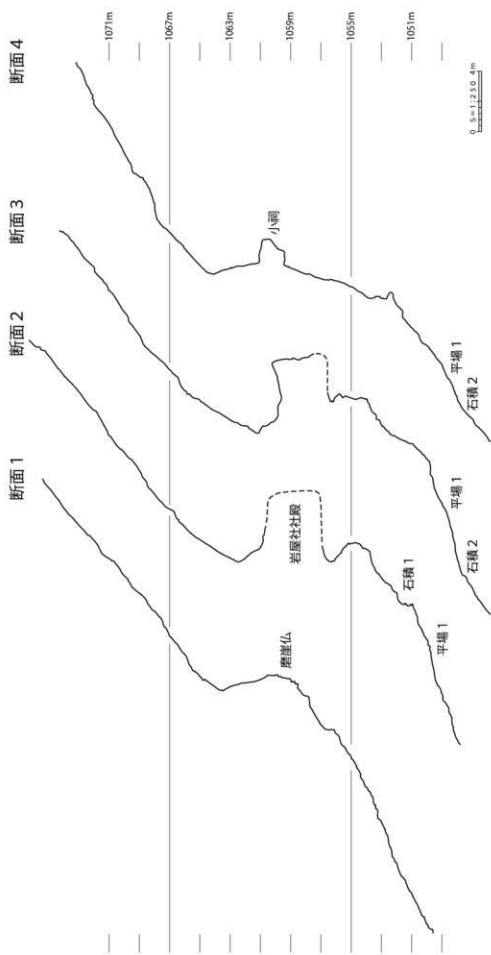
【参考文献】

- 四賀村 1978 『四賀村誌』  
 1992 『四賀村の石造文化財』  
 1997 『四賀村の社寺文化財誌』
- 松本県ヶ丘高校風土研究部歴史班 1979 『嶺間—四賀村の民俗と歴史—』  
 1980 『嶺間Ⅱ—虚空蔵山信仰とその周辺の民俗—』
- 松本市教育委員会 2017 『長野県松本市殿村遺跡—第7次発掘調査報告書—』  
 2017 『松本市四賀地区の中世石造物』  
 2018 『長野県松本市殿村遺跡—第8次発掘調査報告書—・虚空蔵山城跡—第2・3・4次発掘調査報告書—』

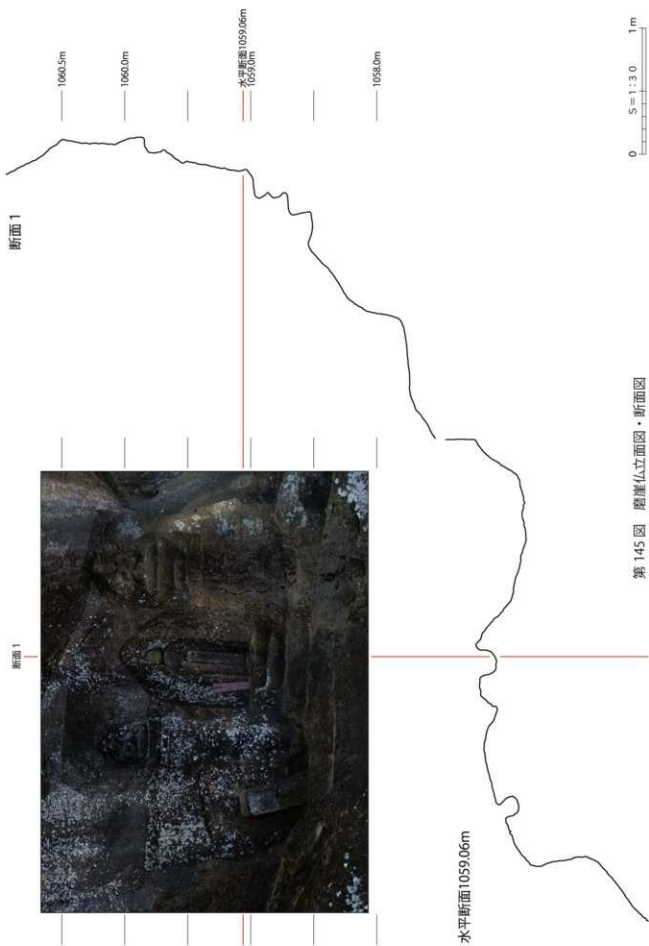


岩屋社直登参道 (道1) の状況

第143図 岩1 (岩屋社) 平面測量図 (2)



第144図 岩1 (岩屋社) 縦断面図



第 145 図 鹿崖仏立面図・断面図



第 146 图 磨崖仏周辺俯瞰図

## 第5章 調査の総括

### 第1節 殿村遺跡発掘調査の総括

#### 1 はじめに

殿村遺跡は中世の大規模な平場造成と、平場上で展開された多様な活動に係る諸施設を特徴とする遺跡であることはこれまでの報告を通して明らかである。また、諸活動に供された多様な用具が遺構内外から出土した。平場を単位とする遺構・遺物のまとまりは単一の実在ではなく、一定範囲に複数分布することも明らかになった。こうした様相は当地域における中世の遺跡としては際立った特徴を示しており、遺跡の性格解明に際しては遺跡のみならず、周辺の景観や関連する資料からの追及が不可欠なものとなった。その必要性に基づき発掘調査と並行して行った総合調査の詳細については別途総合調査報告書に成果をまとめることとなる。

従って本章では、平成20・21年の記録保存目的の殿村遺跡発掘調査から平成22年度以降平成29年度まで実施した保存目的の範囲・内容確認調査まで合計9次にわたる調査の最終調査報告書として、これまでの考古学的な調査の成果から、遺跡の性格究明に特に有益とみられる事柄を取り上げて殿村遺跡の様相を明らかにし、加えて虚空蔵山中の遺跡群にも言及したうえで「虚空蔵山宗教遺跡群（仮称）」を定義し、総合調査報告書へのつなぎとしたい。

なお、本章で必要となる情報は適宜図表にまとめて提示するが、引用する個別の調査の詳細については付録DVDに各回調査報告書のPDF版を収録したので必要に応じて参照されたい。

#### 2 平場の分布と変遷

##### (1) 平場の分布

1次調査において1A区に検出された大規模な平場遺構は、調査の早い段階から寺院等の宗教施設の可能性が高いとの認識を持っていた。また緩斜面が広がる周辺の地形や各地の僧坊群を伴う中世寺院の先行調査事例に照らして、本遺跡においても一定の範囲に平場群が展開する可能性が高いとの見方に立ち、その後の調査の目的の一つとして範囲確認が位置付けられた。

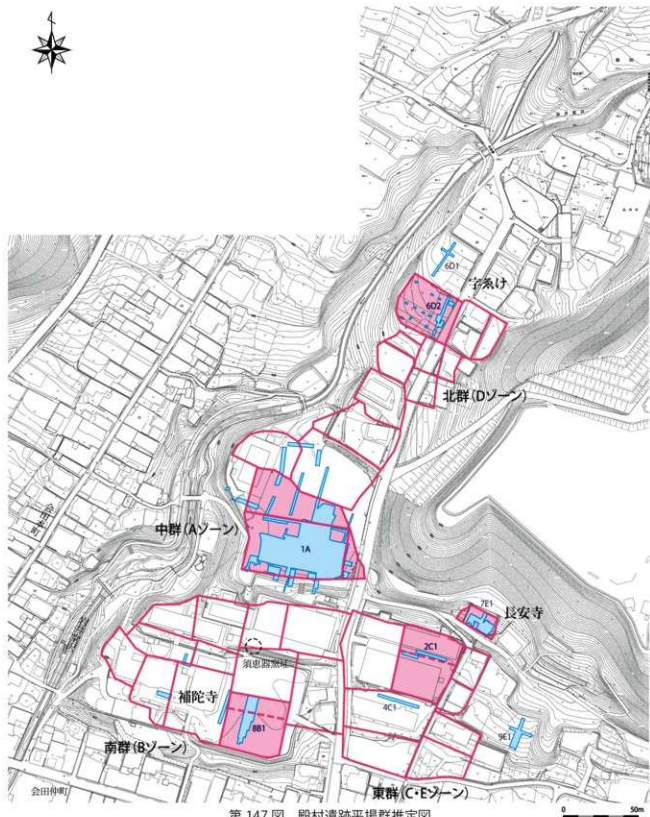
調査の結果、1A区を中心に北は6D2トレンチ、南は8B1トレンチ、東は2C1トレンチ及び7E1トレンチにおいて平場遺構が確認された一方、その外側にある6D1トレンチや9E1トレンチでは緩斜面上に中世遺構がわずかに存在するのみで平場の造成が行われないことを確認した。

また、調査した平場と地割との間に一定の相関関係が認められることから、城郭調査の手法も取り入れ、現地地形と明治期の地籍図を照合したうえで平場群の推定を行った（第147図）。この推定が正しければ、南北340m×東西270m、総面積3.4haに及ぶ凸字形の範囲に少なくとも37カ所程の平場を想定することが可能となる。さらにそのあり方から以下のようなまとまりに区分できるものと考えられる。

- |              |   |
|--------------|---|
| ①北群（Dゾーン）    | 梯子状に連なる方形の平場群                                       |
| ②中群（Aゾーン）    | 最大規模の1A平場と周辺  |
| ③南群（Bゾーン）    | Aゾーンの南に広がる畚盃目状の平場群                                  |
| ④東群（C・Eゾーン）  | Aゾーンの南東に広がる畚盃目状の平場群                                 |
| ⑤長安寺跡（7E1平場） | C・Eゾーンに北接し虚空蔵山から延びる尾根先端の小規模な谷を背にした一段高い地形面に存在する単独の平場 |

なお、平場群の北限に関しては、6D2平場までと推測したが、その北東には廣田寺があり、境内の墓地に





第 147 図 殿村遺跡平場群推定図

板碑や宝篋印塔が残ることを勘案すると、同寺が現在地に移転する以前にも何らかの施設があった可能性もあり、今後の検討課題となる。

こうした平場のあり方は根底で地形による規制が作用した状況が窺えるが、北群と南・東群を結ぶ節点にある最大規模の 1A 平場を伴う中群が重要な位置を占めた可能性が強く感じられる。また⑤の長安寺跡も他と比べて特異な状況にあり、以下に触れる点から他とはやや異なった平場の景観が窺える。(竹原)

## (2) 平場の構造

平場の規模 一連の調査では外郭線を含む平場の全体像が把握されたものはない。唯一大規模な面的調査を実施した 1A 平場も外郭線の把握は断片的であり、全形は不明である。従って、平場の形態や規模は現地形の観察や地割の検討から推測せざるを得ないが、そこから導かれた平場の規模は 1A 平場の東西約 70m × 南北約 38m を最大に、1 辺 15 ～ 45m 前後の方形ないし長方形プランが想定されることとなった。

土木量 平場造成に係る土砂の移動量は相当な規模である。極めて複雑な算出ではあるが、最終的に 1A 平場では約 1,700 m<sup>3</sup>、6D2 平場では約 400 m<sup>3</sup>、8B1 平場では約 270 m<sup>3</sup>、7E1 平場では約 200 m<sup>3</sup>、2C1 平場では 900 m<sup>3</sup> に及ぶ土砂移動があったことが推定される。これらの 1 m<sup>2</sup> 当たり平均土量を算出すると約 0.5 m<sup>3</sup> となり、この数字を基に遺跡全体の面積 34,200 m<sup>2</sup> を乗ずると総土量は 17,100 m<sup>3</sup> となる。まったく想像の域を出ない値であるが、これは井川城跡主郭で算定した土量 4,000 m<sup>3</sup> の 4.2 倍にあたり、その土木量の大きさを知る目安になる。

用土 想定される平場群は標高 628 ～ 655m、比高 27m の傾斜面に切り盛りによる造成を行っている。従って埋立てに必要となる用土は平場背面側の切土をもって確保されるが、各調査の所見から土質に以下のような特徴が認められる。

### i 岩井堂沢の扇状地堆積物である暗色系のシルト

平場群が乗る扇状地上に広がる堆積層から獲得したもので、小川層や青木層の砂岩や泥岩に由来する茶褐色から暗黄褐色を呈し鉄分を多く含む用土で、虚空蔵山に由来する輝石安山岩の様々な大きさの礫を多く含む。礫には 1 ～ 2m 大に及ぶ巨石も見られる。

### ii 青木層の風化岩盤層に由来し泥岩屑を多含する黄褐色シルト

場所によりほぼ岩屑のみという状況すら見られる。基盤の風化岩盤層及びその表層の風化した掘削によるもので、平場造成の尾根側への拡大や掘削が扇状地堆積物より下層まで達したことを示唆する。

### iii 炭・焼土等の有機物や遺物を含む灰褐色土

場所により構築物の用材の可能性のある被熱した石材も含み、新たな造成や修築に際し古い生活面を削った際に発生したと推定される用土

### iv 意図的に混入したとみられるクリ他落葉広葉樹の木炭塊や木炭粒を多含する黒褐色シルト

これらは、iv の黒褐色シルトが 4 面段階の湿潤な低位地形面に施した基盤造成土に特徴的に見られ、その上に i の岩井堂沢扇状地堆積物による 4 面の造成が行われる。また、3 面及び 2 面段階の造成は ii の風化岩盤由来の黄褐色土が多用され、1 面段階の造成に iii の有機物を含んだ灰褐色土を用いる。遺構面毎の傾向の違いは平場の変遷にも関わるため後であらためて触れる。

造成の手法 平場造成の手法にはいくつか特徴的な点がみられる。1 つは土塁状盛土で、平場造成にあたってその外郭線に土塁状の土盛りを行った後、平場内部の造成を行うものである。1A 平場と 6D1 平場で観察された。前者は 4 面段階の池状施設や 3 面段階にかけての平場前面の法面としても機能する。別に石積 A の背面や 3A1 調査区でも確認される。後者は 6D2 平場前面の石積 G と一体で築造される。

2 つ目は版築手法で、黒色土と黄褐色土の互層が観察される。先述の土塁状盛土や平場の先端付近、石積の背面（裏込め土）など、緻密さと強度性が要求される箇所に多く導入される。とりわけ石積 B3 の背面や 3A1 トレンチ地点における 4 面造成土には非常にきめ細かい版築を見ることができる。

石積 平場外郭線の壁面や、池状施設・溜め井戸・便所等水に関わる掘り込み遺構の壁面に施される。1A 平場を中心に 6D2 平場、8B1 平場で検出された。いずれも 15 世紀の築造で、戦国期の山城の石積に先行する、当時としては非常に高度な土木技術である。その構造は 1 次調査報告の章で詳細に述べたが、地山の岩井堂沢扇状地堆積物中の山石や会田川・岩井堂沢等の河床礫を加工せずに 50 cm ～ 1.2m 程垂直に積

むもので、裏栗石を伴わないものである。1A 平場では山石の大石・巨石を多用したタイプ 1（石列 8・石積 A・石積 B1）と、一抱え大で粒径にばらつきが少ない河床礫あるいは山石を布積みしたタイプ 2（石積 B2・B3）があり、タイプ 1 からタイプ 2 への変遷が認められた。衝立状に巨石を立て並べたタイプ 1 の石積は近世城郭の鏡石等と同様に、宗教施設の荘厳を示す構築物とも考えられるが、上記の巨石から小礫への変化は石積の置かれた環境の変化と石材調達先の変化によるところも大きいと考えられる。（竹原）

### (3) 平場上の遺構・遺物の様相

#### ア 遺構

殿村遺跡の一連の調査では、平場造成つまり普請に係る様相についてはある程度把握することができた。しかし、平場上に展開する諸施設については、保存目的の調査として 1A 区と 7E1 区以外は狭いトレンチ調査によったことと、1A 区では遺構の把握が困難な箇所が多かったことに加え、初期の記録保存調査の過程で短い調査期間や冬場の過酷な調査環境、体制等やむを得ない事情が重なったため、本質に迫る十分な調査ができなかった。

各調査で確認された平場上の諸施設は、ピット、土坑、掘立柱建物址、礎石建物址、柵（柱穴列）、塀（石列）、炉址、溜め井戸、便所、池等が見られた。これらのうち最も中心的な存在となる礎石建物は、修築などに際し石材を抜かれるためか全体像を含め実態把握が難しく、多出した掘立柱建物址も調査時の把握が不十分なものが多くいたため、わずかな例を除いて規格の整った寺院の堂舎等の建物を把握することが難しい。

しかしながら、中世においては寺院や武家居館に限られる礎石建物が 7E1 平場では 14 世紀に遡って出現することや、1A 平場では 15 世紀段階に池や便所等の施設に平場外郭線と同様高度な石積技術が導入されることなど、遺跡の性格を示す特記点も見出せる。後に触れるが、総じて 14～15 世紀におけるこうした遺構の存在は、同時期の守護居館である井川城跡と比較しても導入が早いといえることができる。

#### イ 遺物

平場上の遺構や造成土内から出土した遺物からは、遺跡の性格に関わる所見が何点か見出される（第 149 図）。しかし、一連の調査では寺院等宗教施設の性格を決定づける仏具や石塔、墨書木簡等の遺物に恵まれず、陶磁器や石製品等の遺物から遺跡の性格を語らざるを得ない。

まず焼物の構成だが、全体に土師質土器皿が多く、その中にはロクロ成形ながら京都系を志向した白色の精良胎土（3 群）で大きく外開する器形（皿 C）が見られることが特記される。皿の量的な比率は統計上出土数が多く安定的な 1A 平場や 8B1 平場を例にとると 6 割を占めている。同様な胎土・成形を示す京都志向の皿は同時期の井川城跡や戦国期の小笠原氏拠点である林山腰遺跡からも出土しており、焼物全体に占める皿の構成比も似通う。こうした皿の量的な多さは武家居館や宗教施設における儀礼的存在を示唆している。また、皿の中には灯明に使用されたものが目立つ点も平場上での活動の一端を示している。

次に瀬戸製品や貿易陶磁であるが、これらも量的な比率が井川城跡と傾向を同じくする。そのうえ用途の点で茶道具の存在が目立つ。殿村遺跡における主な茶道具には天目茶碗・茶入・茶壺・瓦質土器風炉・茶臼と、鉄製品の茶釜や木製品の除き一通りの用具が揃う。中でも天目茶碗には中国製品が一定量みられ、風炉にも黒色磨研された精製品があること、茶臼も在地産ではない緻密な高級石材によるものがあることが注意される。抹茶を主とする喫茶の用具が揃っている点も、上級の武家の居館や寺院に特有のあり方といえる。

さらに特筆すべき点として硯がある。これまでの調査では 1A 平場から 12 点、7E1 平場から 4 点の出土がある。これらの特徴としては何より 1 カ所からの出土点数が非常に多い点にあるが、加えて装飾性の少ない長方形の製品がほとんどを占め、長さ 15 cm 前後の大型品が目立つ状況も看過できない。使用石材には京都の鳴滝石とみられるものもある。この硯のあり方が武家居館とは大きく異なる点といえ、文字を日常的に

使用する宗教施設ならではの現象と捉えられるのではないだろうか。

金属製品では 7E1 平場の庭池から出土した擬漢式鏡が特徴的である。詳しくは 7 次調査報告に譲るが、池底近くから鏡面を下に向け出土し、羽黒山出羽神社鏡池等に見る池中納鏡に類する行為と理解される。宗教的行為そのものを示す遺物の一つといえよう。

遺物の特筆点として、最後に木製の祭祀具を挙げる。これらは 1A 平場の池状施設（石積前空間）の堆積土や埋立て土から多量に出土した齋串とみられる串状の製品と短冊状板が特徴的である。残念ながら祭祀行為の場を示すような出土状況は見られなかったが、不明な点の多い池状遺構の性格にも関わる祭祀行為が付近で行われたことは間違いないであろう。同じく 1A 平場の便所遺構である石積遺構 1528（4 次 4A1 トレンチ）からも同じ齋串状木製品や馬形木製品が出土しており、水に関わる何らかの儀礼が平場内で行われた可能性を示すと考えられる。

これらの木製祭祀具の樹種もヒノキやサワラが使用されることが明らかになった。池状施設からは大量に削屑も出土しており、祭祀具が平場内で製作されていた可能性を示唆している。もしその理解が正しければ祭祀具の製作に関わる体制に加え、木材流通や木材生産の問題、ひいては殿村遺跡を支えた生産基盤とも関わってくる。

こうした遺物の特筆点から見てくる平場の性格は、焼物に表われる武家の居館や寺院等の様相に加え、碗の多出や祭祀具の存在に宗教施設としての性格が色濃く示されているものと理解したい。（竹原）

#### ④ 平場の変遷（第 148・149 図）

最後に平場群の中核的な位置にある 1A 平場を中心に平場群の動きを概観してみたい。

##### ア 8 世紀末～9 世紀

1A 区周辺における古代以降の最初の活動は奈良時代末～平安時代前期に始まる。1A 区では 8 世紀末の住居址が検出され、調査区西半の微高地上を中心に居住活動の足跡が残される。また遺跡東部の 4C1 トレンチからは須恵器片や炭・焼土を含む遺物包含層が検出された。その他 6D2 トレンチから 8B1 トレンチまで遺跡のほぼ全域から遺物が散見され、会田小学校には学校改築で出土した既出遺物が収蔵されている。また会田小学校庭の造成に際し現ゲートボール場西棟敷地との境界付近から須恵器窯址が発見されたとの情報もあり（第 147 図）、この時期の活動は須恵器生産とも関わる可能性が高い。しかし、古代における活動は須恵器生産が衰退し 10 世紀に入ると急速に途絶える。これまでのところ中世以降の営みは 12 世紀以降に始まるとみられる。

##### イ 12 世紀～14 世紀前葉

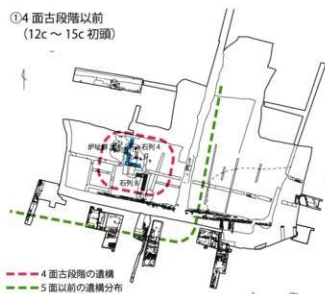
1A 区の 5 面段階にあたり、各調査地点ともに確実な平場造成や遺構が見出せず遺物の存在から活動の足跡が窺える時期である。

まず古代最末期である 12 世紀は、1A 区から白磁碗、平場 8B から黄釉の洗が出土している。続く鎌倉時代、13 世紀以降の遺物は 1A 区では西部の微高地上を中心に青磁鎚連弁紋碗や山茶碗、古瀬戸前期製品等の陶磁器が散見され、2C1・4C1・7E1 トレンチでも鎚連弁の青磁碗や青磁盤、手捏ねの土師質土器皿が出土している。これらはいずれも 1A 区以南に分布し、威信財である貿易陶磁が伴うことから、後の平場造成へと続く宗教的な活動の初期の状況を示していると考えられる。

##### ウ 14 世紀中葉～15 世紀初頭

1A 平場の 4 面古段階で、調査区西部の微高地に盛土造成を行い、石列 4 と西側の炉址群、石列 8 等からなる平場が形成された段階である。調査範囲が限られ不明な点が多いが、石列 8 を平場前面の石積と解するとこの段階の平場は小規模なものが想定される。なお石列 4 と石列 8 には時間差が内包される可能性も

①4 面古段階以前  
(12c ~ 15c 初頭)



--- 4 面古段階の遺構  
--- 5 面以前の遺構分布

③3 面新段階  
(15c 後葉)



--- 平場推定範囲

⑤1 面新段階  
(16 世紀後半)



□ 直立柱建物  
□ 礎石建物  
--- 区画施設 (溝・櫓等)

②4 面新段階  
(15c 前葉 ~ 中葉)



--- 平場推定範囲

④2 面新段階  
(15c 末 ~ 16c 中葉)



□ 直立柱建物  
□ 礎石建物  
--- 区画施設 (溝・櫓等)  
■ 炉址集中空間

第 148 図 1A 平場の変遷

区域	調査区	遺構										遺物											
		平場・数	改修	掘建	礎建	池	区画施設	炉	井戸	便所	焼物数/㎡	土師質皿%	瀬戸製品%	貿易陶磁%	3群胎土皿	手捏ね皿	茶道具	灯明皿	硯	祭祀具	銅製品	嚴治関係	
北(D)	6D1	×																					
	6D2	○ (2)	6	○			○	○															
中(A)	1~7A	○ (3)	4 (6)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	天・壺・白・炉			12	○	○	○	○
南(B)	8B1	○ (2)	3	○	○		○	○								天・船・入							○
	5B1~3	?																					
東(E)	7E1	○ (1)	2	○	○	○		○	○							碗・入			○				4
	2C1	○ (2)	2	○			○									碗			○				
	4C1	?																					
	9E1	×																					

※区画施設は石積・石列・欄・塙・溝等の遺構

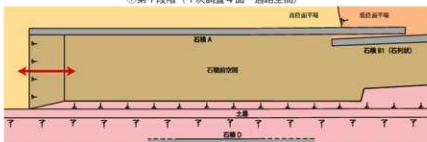
※茶道具略号 天：天目茶碗 船：船載天目茶碗 入：茶入 壺：茶壺 白：茶白 炉：風炉

※祭祀具は壺串、形代等

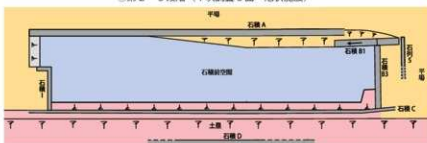
平場	8c	9c	10c	11c	12c	13c	14c	15c	16c	17c
北群 (6D2)		■							■	
中群 (1A)		■	■			■	■	■	■	
東群 (7E1長安寺)		■					■			
東群 (2C1・4C1)		■					■	■	■	
南群 (8B1)								■	■	
十二原沢上流平場群2面									■	

黒塗りは遺構あり・白抜きは未確認を示す

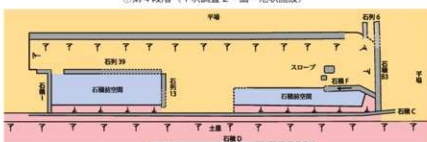
①第1段階（1次調査4面・通路空間）



②第2・3段階（1次調査3面・池状施設）



③第4段階（1次調査2面・池状施設）



第149図 各平場の遺構・遺物の構成（上）・平場の消長（中）・石積前空間の変遷（下）

ある。ちなみに石列 8 の石積手法は次段階の石積 A と近似しており、時期的な接近を感じさせるため、この段階の中でも下る可能性が高い。

この段階は南群・東群で遺物の出土が見られるが、1A 平場とともに遺構を伴う平場の状況が鮮明なものとして長安寺本堂跡にある 7E1 平場が注目され、1A 平場に先行することが確実である。先にも触れたようにこの平場は東群を見下ろす高台にあり、立地的に他の平場群からは独立し少し性格を異にしている。屋根先端に形成された谷に抱かれた平場空間には 14 世紀中葉の堂跡とみられる礎石建物や付属する掘立柱建物があり、その後 14 世紀末～15 世紀前葉には平場西寄りに石積護岸や玉石敷を伴う庭池が設けられ池中納鏡も行われた。こうした景観から 7E1 平場は池泉式庭園を伴う小堂空間が想定される。

以上のように、7E1 平場は殿村遺跡の中でも最も早い段階から平場造成が開始し、次いで 1A 平場でも造成が始まったものと現状では理解される。

#### エ 15 世紀前葉～中葉

1A 平場では 4 面新段階を迎え、平場が東～南に大幅に拡大し東西 70m に達する。前面を土塁と石積 A からなる通路空間で画し、南東には一段低い平場 1' が設けられる。その造成にあたっては湿潤な低位地形面にクリやコナラ等低地には生育しない樹種の木炭を多含する用土 iv で基盤造成を行い、その上に岩井堂沢扇状地堆積物に由来する用土 i を盛土する。用土の獲得先はおそらく北接する平場 2 の造成に係る削土とみられる。基盤造成土に木炭を混ぜる目的は理解し難いが、除湿などの実用面と浄化など精神面の両面からの検討が必要かと思われる。石積は巨礫・大礫を用いるタイプ 1 が伴う。平場上の諸施設は未調査のため不明ながら、平場低位面では東縁に接して築かれた便所や排泄物に関わる石積遺構ほか、焼物や木製品等の遺物を伴った遺構が検出される。

この段階は、北・東・南の各群でも平場造成が開始する。北群 6D2 平場ではこの時期以降 6 段階の改修が行われる。その当初の姿は上下（南北）2 段からなる平場構造で、段階的に上段平場が拡張され第 6 段階に至って 1 面のみ平場となる。上段平場の前面は当初の土坡から第 2 段階以降一貫して石積が施される（第 6 段階は不明）。平場上には掘立柱建物や礎石建物が溝や炬炬等の施設を伴って展開する状況が窺えるが調査範囲が狭いため全体像は窺えない。

東群 2C1 平場でも同様に上下 2 段構造が認められ、最終的に 1 面構造に遷移するが、南群 8B1 平場では逆に 1 面構造から 2 段構造に移行している。8B1 平場では竪穴状遺構や炬炬、掘立柱建物が密集し、垣塙の出土や周辺の遺構面に炭・焼土が広く散在する状況から、銅鍛冶を伴う作業空間があったとみられ、1A 平場ではほとんど見られない竪穴状遺構の存在などとともに際立った特徴を示す。土師質土器を中心に焼物の出土量も 1A 平場を凌駕する。この段階の 7E1 平場では前段階の生活面がかさ上げされるが、上面を破壊されているため詳細が分からない。

#### オ 15 世紀後葉

1A 平場では 3 面段階に移行し、平場低位面が埋め立てられ 1 面構造となる。造成土は青木層の風化泥岩に由来する用土 ii が主体で、その獲得先に山側の岩盤層の掘削が予想されることから、平場造成が東～北に拡大した可能性を示唆している。特徴的な点として平場前面の通路状空間東部が石積と埋立て土によって閉塞され、長大な池状施設が出現することが挙げられる。伴う石積は河床礫が多用されるタイプ 2 に移行し築石は運搬ししやすい小振りのものが主体となる。先にも触れたように、この段階に石材の獲得先が岩井堂沢扇状地堆積物から会田川や岩井堂沢に移ったことが考えられ、その背景として平場造成の拡大に伴い現地で地山層からの用材調達次第に困難になっていったことを反映しているのではないかと考えられる。加えて荘厳性が必要とされた前段階における通路の見せる石積から、池の護岸石積へと性格が変化したことにも一因があると考えられる。なお、この段階の後半には段階的に池状施設の埋立てが進行し次第に縮小していく。

周辺の状況は、6D2 平場における上段平場の拡張が引き続き進行する。また 8B1 平場では北平の埋立てにより石積を伴う 2 段階構造となり、上段平場には焼土・炭を伴う長方形土坑や掘立柱建物、礎石建物が営まれる。前段階に引き続き、作業空間的色彩が強い様相を呈している。

#### カ 15 世紀末～16 世紀中葉

1A 平場は 2 面段階を迎える。池状施設の埋立てとともに平場の中部～西部の広い範囲が風化泥岩層を含む用土 II でかさ上げされ、周辺の平場造成がさらに進んだ段階である。この段階は平場前面の埋め立ても進み、前段階の土塁・石積に代わり新たな石列で法尻を区切る。平場中央付近ではこの石列が途切れ、通路とみられるテラスが検出されたことから出入空間が存在した可能性がある。さらに平場南東にも外郭線に沿って柱列や溝、1 間四方の礎石建物からなる空間が設けられる (7A1 トレンチ)。広大な平場内部は柵や溝により空間が分割され (A～H 等)、炉址の集中や礎石建物の存在など空間毎に異なる様相をみせる。これらの遺構は総じて平場南東部に集中する傾向を看取しつつも、全体的には区画単位で建物が均等に存在する状況を示す。建物の向きは若干ばらつくが、概ね東西に長軸をとる建物が多い。

この段階も北群 6A1 平場では引き続き拡張が進み、下段平場の狭小化が著しくなる。また南群 8B1 平場は下段の埋立てにより再び 1 面構造となる。

#### キ 16 世紀後葉

1A 平場は全体が造成土でかさ上げされる 1 面の段階で、平場前面中央部から東部でもあまり段差を伴わず長く下降するスロープ状に遷移する。平場東部は 1 段かさ上げされ狭い平場 3 に移行する。平場造成土は焼土粒や炭粒等有機物を多く含んだ用土 III が主体となることから、この段階には周辺の平場において削平を伴う改修が行われ、その削土が 1A 平場にもたらされたと推察される。平場空間の分割は塀、石列、柵等により鮮明となり (A～G)、そのうえ 2 面段階の等質的状況から、築地塀 (石列 1) を境に平場中央奥寄りの空間 (F・G) に建物等の遺構が集中する求心的とも捉えられる状況になる。また平場東部には固定的に溜め井戸が配されるなど、空間毎の機能分化が進行した状況も窺える。

この段階の建物や区画施設の軸方位には 15° 前後のブレが窺える。仔細に見ると石列 1 を中心とする N-11° ～ 13° -E に集中するグループと、柱列 1・2・10 等 N-0° ～ 6° -E に集中するグループに二分されるようである。ともに平場空間を南北に分割する上記の区画施設が伴っており、位置的に見て両者の併存の可能性が低いことから時期差があると理解され、遺構の状況など勘案すると前者から後者へと推移したと見做される。

この時期の周辺平場群は北群 6D1 平場が 1 面構造となり、他の平場の多くも実態は鮮明ではないものの活動が継続していたとみられる。

#### ク 16 世紀末以降

各平場群において、平場上での活動がすべて終了し廃絶する。1A 平場ではほとんど無遺物の黄褐色土層が平場を覆うように広がり、平場の廃絶に伴い他所から用土を調達して意図的に行った行為の可能性が高く、背景に相当強い力が作用していることが予想される。それはその後の土地利用にも影響が見え、近世以後一帯は居住域として利用されることはなく畑地化が進んだと推定される。(竹原)

### 3 殿村遺跡の性格

以上、殿村遺跡の構造と変遷についてこれまでの調査成果を総合してまとめた。最後に宗教遺跡としての性格究明という調査課題にどこまで答えることができたのか整理し、本節の括りとした。

最初に、これまで検出された平場群を宗教施設と解釈する点について改めて確認しておきたい。遺跡理解に関わる主たる所見を以下に列記する。



- ① 15 世紀前半に築造が開始する石積を伴う大規模な平場
- ② 14 世紀中葉に導入が遡る礎石建物
- ③ 方形居館とは異なる外郭線や内部空間のあり方
- ④ 碁盤目状に展開する平場群
- ⑤ 礎の多出
- ⑥ 祭祀具（齋串等）の多出
- ⑦ 小堂空間的な 7E1 平場

まず 1A 平場に係る①～⑥の点について、各地の事例に従えば 15 世紀前半における武家の石積・石垣導入は三重県北畠氏居館跡が知られるのみである。近年戦国期の武家居館や城郭における事例が増加しつつあり、京都府田辺城や栃木県唐沢山城等に 15 世紀に遡るとされる石垣・石積が確認されている。長野県内でも高梨氏館跡、野沢館跡、松岡城等平地居館や台地城に 15 世紀に遡る可能性のある石積が散見される。しかし、現時点において武家層への石積・石垣導入はまだ限定的と言わざるを得ない。一方、この時期における寺院石積は京都府慈照寺・勝持寺等、滋賀県弥高寺・能仁寺遺跡等、和歌山県根来寺等、福井県白山平泉寺等、長野県では干沢城下町・塩田城跡・下信濃石遺跡等武家の城郭に比して遙かに導入が進んでおり、技術的な系統性については一考の余地があるものの、古くは古代末や中世初頭に遡る静岡県大知波峠廃寺（10 世紀）や愛知県普門寺旧境内（12 世紀）における例、あるいは一遍聖絵や法然上人絵伝等絵巻物に登場する寺院風景に描かれる石積に至るまで、寺院の石積は中世の早い段階から普遍的なものであった。

平場の内部空間については建物の性格を含め構造解明に大きく課題を残すが、平場の規模に相応した將軍御所志向の建物配置や空間構造を 1A 平場に見出すことは難しい。とりわけ 4 面段階の長大な池状施設は武家居館では理解に苦しむ遺構である。寺院遺跡でもあまり調査例を見ないものであるが、強いて類例を挙げるとすれば善光寺大勸進門前の放生池など社社の境内の前に構える放生池や川において、特に中心軸線上に直交して配置され橋等の施設を伴って中央を参道が貫くものが、この遺構の解釈の糸口になるものと考えられないだろうか。

遺物の面からは寺院に直結する仏具や石塔は皆無である。威信財や茶道具、儀礼の器である土師質土器皿等のあり方は井川城跡との決定的な差異は見られないものの、大型品を含む実用的な礎の多出は武家居館とは明らかに異なる際立った様相であり、日常的に筆記を行う寺院ならではの活動が背景にあるものと理解できる。齋串は必ずしも仏教的な祭祀具ではなく出土遺跡も宗教施設に限定されないものであろうが、殿村遺跡では池状施設の性格と密接に関わる遺物として注意される。

このように 1A 平場については解釈が難しい点が多いものの、7E1 平場についてはその立地に加えて小堂と庭池からなる空間のあり方が最も寺院に相応しい姿といえよう。そのうえ 14 世紀に遡る礎石建物は井川城跡より 1 世紀近く遡るものであり、15 世紀後半以降に導入が進む武家居館に大きく先行する。

以上の所見に加え、1A 平場を中心に南群や東群のような平場が碁盤目状に展開するあり方は、山寺を典型とする中心伽藍と僧坊群からなる寺院空間に通じる姿と理解される。その際中心伽藍をどこに求めるかが課題となる。近年山寺の空間構成の検討が進む地域の事例によれば、最奥部の中心伽藍に至る参道に沿って僧坊群が展開する状況が明らかになってきている。なかでも近江では天台系寺院を中心に僧坊群が直線参道の左右に展開し正面奥に中心伽藍を構える例が知られるが、信濃では参道も含めた山寺の空間構成の把握自体がまだ少なく様相の解明に至っていない。殿村遺跡においては平場内部の構造に加え、地割からも明確な参道の姿を捉えることは難しいが、最大の平場空間である 1A 平場とその下に碁盤目状に展開する南群や東群の平場のあり方から見て、1A 平場を中核とした平場群の構造を検討し得る。その際、あくまで地割からの想定にすぎないが、平場間を結ぶ道は 1A 平場東西の隅に至る南北の往来を想定できるのかもしれない。

しかし同時に北群の存在や独立的な存在を示す 7E1 平場の存在など、単純な理解はできない。

この点については、考古学的検証から少し離れ、天正 9 年『信濃国道者之御蔵いくばり日記』(第 7 図)に登場する 3 つの寺との関係から考えたい。同文書には当時会田に所在した寺が列記されるが、とりわけ注目されるのは長安寺、補陀寺、系ヶ寺である。長安寺は鎌倉時代に会田氏の関与で蘆浜道隆により開山した臨濟宗寺院で、奥院である虚空蔵山岩屋社とともに虚空蔵菩薩を安置することから密教寺院を前身とする可能性が高い。補陀寺は岩井堂観音堂を奥院とする真言寺院、系ヶ寺は実態が分からないが、『信濃史料叢書』掲載の解釈に従い「系ヶ」を「会下」と解釈すれば僧の修行所的な寺ということになる。第 145 図に示すように、この 3 カ寺のうち長安寺と補陀寺は実際に殿村遺跡の東群と南群の位置に存した寺である。系ヶ寺は長く所在地不明の寺であったが、大河内家文書の『文化 10 年会田町村絵図』から殿村遺跡の北群から廣田寺にかけての一角が「字系ヶ」であることが判明し、遺跡の北部に系ヶ寺があった可能性が高い。

一連の発掘調査では文字資料に恵まれなかったことと、これらの寺院に係る中世文書も『御蔵いくばり日記』以外に見当たらなかったため直接的な証左を得ないが、平場群と寺の関係を考えればこの 3 カ寺の中世における姿が殿村遺跡の平場群であるとみてほぼ間違いないであろう。その中でも長安寺は小堂空間である 7E1 平場に実際に本堂があり、また寺伝でも往時の寺域は 1A 平場まで広がっていたと伝わっていることから、遺跡との関係が最も濃厚といえる。

殿村遺跡の理解に戻って、これら 3 カ寺それぞれが僧坊群を伴った面的な広がりを持っており、互いに接して凸字形の領域を形成したと理解することが現状では妥当と考えたい。さらに想像を逞しくすれば、長安寺と補陀寺からなる中群・南群・東群、系ヶ寺に関わる北群といった理解が可能ではないだろうか。

残念ながらこの仮定の解釈を検証するためには、これまでの調査成果では圧倒的に情報が不足しており、遺跡の理解に通じる大きな課題として今後の調査に委ねなければならない。

雑駁なまとめであるが、以上が殿村遺跡の現状における理解である。(竹原)

## 第 2 節 虚空蔵山における調査の総括と「虚空蔵山宗教遺跡群(仮称)」

虚空蔵山城跡の 3 次わたる発掘調査成果は既刊の報告書で総括した。調査の目的は、宗教施設と目される殿村遺跡を理解するうえで不可欠となる聖地虚空蔵山との関係を探るため、従来の見解では城郭とされてきた十二原沢上流の平場群に中世寺院跡の可能性を求め、その検証をするためであった。

調査の結果、16 世紀前半に城郭化する以前の活動が平場の下層にあり、伴出した古瀬戸や貿易陶磁から 15 世紀～16 世紀初頭に留め井戸や堂とみられる礎石建物を最上段の平場に伴う 6 段前後の平場群からなる寺院とみられる宗教施設であることが判明した。その平場の造成には版築手法による盛土や裏込め石を有さない石積など、殿村遺跡と同様な普請が行われていた。また、焼物の様相も標高 900m を上回る高所にありながら茶道具や貿易陶磁が目立ち、硯や石臼・石鉢等も出土している。花粉分析の結果から周辺ではソバの栽培が行われていたことも判明した。

宗教施設としてのこのような遺構は、殿村遺跡と並行する時期、正確には殿村遺跡における宗教的活動が最盛期を迎える 15 世紀に至って新たに出現した山中の寺という理解がなされたのである。この寺院的景観を覆うように 16 世紀前半以降、堀や土塁、総石積の雛壇状の平場が築造され、平場群は虚空蔵山城の主体部として大きく姿を変えていった。石積も殿村遺跡にも見られる形態から粗割りした平石を布積する信濃の戦国期城郭石積に見られる手法に変わるなど変化が大きいものの、調査所見からは寺から城へ時間的な連続性が窺えた。殿村遺跡では 2 面段階後半～1 面段階に對比される時期である。こうして谷部の山寺に主

体部を構え屋根上に若を配する特異な姿の城が成立した。

従って虚空蔵山城跡は聖地に築かれた城郭としても注目すべき遺跡である。聖地と城郭の関係に関する研究は近年注目されつつある領域で、まだ深化の途上にある。寺から城への変化の過程について、本遺跡の場合は遺構・遺物の状況から寺は存続せずに城郭化したのではないかと推察された。その際、寺院が山麓など他所に移転したのか、あるいは廃寺となったのか、前者の場合近江観音正寺と観音寺城の例がよく知られ、松本平でも伝承として林城と慈眼寺の例があげられるが、本遺跡では寺の存在も含めて他の史資料に手掛かりをほとんど得ていない。既出の文禄3年絵図にこの点を探ると城郭は山腹に「城廓」「出丸」と記され、中腹に寺の表記はない。また、城郭より上位に岩屋社を示す「鎮守虚空蔵尊」が描かれており、戦国時代以後も城郭化後も山全体の聖地性は保たれていたと受け取られる。

一連の調査で、十二原沢上流の平場群が信仰の山である虚空蔵山中に所在した山寺と推定されたことにより、宗教空間を構成する山寺と里坊の関係としてこの平場群と殿村遺跡の対比が可能となった。そこで、宗教遺跡群としての虚空蔵山と殿村遺跡の関係をより深く理解するため、虚空蔵山中に所在する他の宗教的遺構まで調査を拡大して、平成30年度に岩屋社周辺の巨岩遺構の測量調査を実施することになり、その成果を本書に掲載した。

既に報告したとおり、虚空蔵山の聖地的景観あるいは宗教施設は、山そのものに加え、山頂の岩場、岩1をはじめとする山頂直下の岩壁や洞窟を伴う巨岩群、ガレ沢、湧水等の自然要因の宗教施設と、それらに至る途上に築かれた人為的要素の宗教施設である平場群から構成され、十二原沢上流の平場群は後者の典型的な例であった（第150図）。

岩1は自然形成による宗教施設の最も典型的な例で、なおかつ『文禄3年会田郷往古之略図』（第8図）にも示されるように虚空蔵菩薩を祀る虚空蔵山の信仰の根幹に関わる岩屋社が鎮座する洞窟でもあり、古くは真言修験の修行窟の可能性が窺える遺構である。

先に述べた殿村遺跡の平場群がその実体を示すとみられる長安寺と奥院の岩屋社の関係、あるいは十二原沢上流の平場群と殿村遺跡の関係は、山の宗教施設と里の宗教施設が不可分の関係にあったことを示唆するといえる。この点は文献史料にも窺え、文禄3年絵図には会田を中心に置きそこを貫く構図上の中心軸として描かれた南北の往来と並行して、山と里を結ぶ道がもう一つの軸線として端的に描かれており、会田川に沿った東西の往来との交点には「大門」の文字が見えることから、虚空蔵山を中心とした宗教空間の入口が会田にあったことが読み取れる。

こうした考古学的所見とそれを補足する資史料から、殿村遺跡と十二原沢上流の平場群や巨岩等からなる虚空蔵山の宗教施設群が有機的に結び、一つの宗教空間を形成していたことがおぼろげながら見えてきたといえる。そこで、この空間を構成する宗教施設及び宗教施設と不可分の城郭施設を合わせて「虚空蔵山宗教遺跡群」を仮称する（150図）。実態の不明なものも含めてその構成はおおよそ以下のとおりとなるが、その中であって山寺と里坊の性格が与えられる殿村遺跡と十二原沢上流の平場群は中核的存在として位置付けられよう。なお、山と里を結ぶ宗教的な軸線は多元的であったことも予想されるが、ここでは最も中核的な存在だったとみられる会田との関係に主眼を置く。

#### 〔虚空蔵山宗教遺跡群〕

##### ①山中の遺跡 山頂の岩場と峯ノ城

- 山頂直下の巨岩・洞窟群（岩屋社含む）と付属する平場群
- ガレ沢
- 湧水（オゲ水、十二原沢上流の平場群の溜め井戸等）
- 山寺（十二原沢上流の平場群等）

山腹の城郭（秋吉砦、中ノ陣城、南西尾根の砦群、うつつ城）

岩井堂沢右岸の巨岩と山寺（岩井堂観音山）

②山麓の遺跡

里坊（長安寺跡・補陀寺跡・推定糸げ寺跡含む殿村遺跡、無量寺）

知見寺跡（所在不明）

人理堂跡（ニゴミ堂）

旗塚（三峯社上、無量寺下尾根、廣田寺裏山）

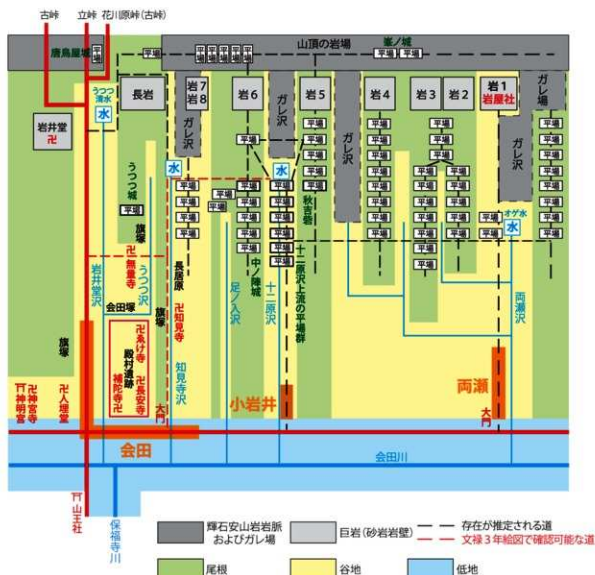
会田塚

山王社跡

（会田御厨神明宮・神宮寺）

③山と里を結ぶ道跡

虚空蔵山宗教遺跡群を取り巻く宗教空間については、歴史学をはじめ関連分野からの調査を交えた総合調査によってその様相に迫ることになり、発掘調査と並行して進めてきたものである。その成果については冒頭で触れたように虚空蔵山宗教遺跡群（仮称）総合調査報告書にまとめ、別途刊行する予定である。そこでは宗教空間の構造と変遷、ひいては宗教遺跡群の本質を明らかにすることが課題となる。従って発掘調査結果に基づく考古学的所見を基軸とした本報告書における遺跡理解はここで一区切りとしたい。



第 150 図 虚空蔵山宗教遺跡群（仮称）の概念

最後に、平成 21 年の現地保存に始まり、その後平成 29 年の第 9 次調査、さらに平成 30 年度の虚空蔵山岩屋社測量調査に至るまで、一連の調査を無事に遂行できたことは、ひとえに地元の皆様の深い理解と惜しみない協力があつたからに他ならない。遺跡を保存に導いた原動力となった地元の皆様の遺跡やふるさとに対する深い愛情を背にこの調査を進めていくことができたことに感謝の念を禁じ得ない。また一方で、あまり経験のない中世社寺遺跡の調査に多々指導・助言をいただいた調査指導委員会をはじめとする研究者や団体にもお礼を申しあげたい。しかし、これまでの調査で殿村遺跡の実体にどれだけ迫ることができたのか、その問いに対する答えは甚だ心許ない。これまで触れてきたように、調査による遺跡の様相解明は決して十分とは言えず、むしろ今後のさらなる調査に委ねなければならない課題が山積している。それとともに、残された遺跡を今後どのように保存・活用していくか、これも地域の方々と一緒に考えていかなくてはならない大きな課題である。本書と続く総合調査報告書の刊行を節目に、次の目標に向かって再びスタートを切ることが私たちの責務である。(竹原)

#### 【参考文献】

- 安土城考古博物館 2014 『安土城への道—聖地から城郭へ—』  
 牛山佳幸 2012 「山寺の概念」『季刊考古学』121 雄山閣  
 2010・2011 「信濃における里山系寺院の成立と展開」『信濃』62-12・62-13  
 小野正敏 2017 「殿村遺跡とその時代—発掘された武家の権威と文化—」  
 久保智康 2001 「古代山形寺院の空間構成」『古代』110  
 2010 「古代信濃の天台寺院」『法華経の光—天台法華宗、信濃へ—』常楽寺美術館  
 国立歴史民俗博物館 2001 『なにが分かるか、社寺境内図』  
 2018 「特集 聖地」『歴博』211  
 織豊期城郭研究会 2019 『戦国・織豊期城郭の石垣』織豊期城郭資料集Ⅴ  
 竹原 学 2017 「虚空蔵山城」『季刊考古学』139 雄山閣  
 2018 「虚空蔵山城」『甲信越の名城を歩く』吉川弘文館  
 2019 「信濃地方の戦国期城郭石垣の様相」『戦国時代における石垣の考古学的研究』織豊期城郭研究会  
 2019 年度彦根研究会資料集  
 中世学研究会 2019 「城と聖地—信仰の場の政治性—」中世学研究会第 3 回シンポジウム資料  
 辻 誠一郎 2015 「殿村遺跡とその時代—環境史から見た中世の景観」『殿村遺跡とその時代Ⅳ』松本市教育委員会  
 時枝 務 2012 「山寺研究の課題」『季刊考古学』121 雄山閣  
 中井 均 2011 「殿村遺跡とその時代—中世の山寺・山城・居館」『殿村遺跡とその時代』松本市教育委員会  
 2013 「虚空蔵山城」『長野の山城ベスト 50 を歩く』サンライズ出版  
 2016 「信濃の山城の再検討—特に石垣を中心として—」『小笠原氏城館群—井川城址試掘・第 1 次・第 2 次発掘調査報告書—』松本市教育委員会  
 2016 『城館調査の手引き』山川出版社  
 中澤克昭 1999 『中世の武力と城郭』吉川弘文館  
 2015 『戦国・織豊期の城と聖地』『城館と中世史料』高志書院  
 2017 「城と聖地—近年の「城とは何か」論にふれて—」『遺跡に読む中世史』高志書院  
 2013 「殿村遺跡とその時代—中世の聖地と人々のくらし—」『殿村遺跡とその時代Ⅱ』松本市教育委員会  
 2018 「城から探る聖地の展開」『歴博』211 国立歴史民俗博物館  
 中野登任 1988 『忘れられた霊場—中世心性史の試み—』平凡社  
 藤岡英礼ほか 2006～2008 『忘れられた霊場をさぐる』1～3 (財) 栗東市文化体育振興事業団  
 藤岡英礼 2012 「山寺の空間—空間構造」『季刊考古学』121  
 文化庁文化財部 2006 「中世寺院関連遺跡の調査とその保護」『月間文化財』518  
 米原市教育委員会 2009 『新視点・山寺から山城へ—近江の戦国時代—』第 4 回山寺サミット  
 松本市教育委員会 2016 『小笠原氏城館群—井川城址試掘・第 1 次・第 2 次発掘調査報告書—』  
 2017 『殿村遺跡第 7 次発掘調査報告書』  
 2018 『殿村遺跡第 8 次発掘調査報告書・虚空蔵山城跡第 2・3・4 次発掘調査報告書』  
 2011 『殿村遺跡第 1 次発掘調査概報』  
 三河山寺研究会・三河考古学談話会 2010 『三邊の山寺』  
 水澤幸一 2006 「遺物からみた中世寺院—土器と陶磁器」『季刊考古学』40 雄山閣  
 雄山閣 1998 「特集 山の考古学」『季刊考古学』63  
 雄山閣 2012 「特集 山寺の考古学」『季刊考古学』121  
 雄山閣 2006 「特集 中世寺院の多様性」『季刊考古学』97